オンガクウェポン

門矢

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
オンガクウェポン

【Ｎコード】
Ｎ８５２７Ｓ

【作者名】
門矢

【あらすじ】
遠くも無く、近くも無い未来の日本……１０年前、大規模な爆発事故が発生し、片田舎から高層ビルが立ち並ぶ地方都市になった七石市。そこの地元の高校に通う少年、芦川　真はある日独特の雰囲気を持つ少女に出会う――ホワイトスネークのボーカルの声がヘッドホンから音漏れし、血の匂いがするファーストフード店で。
彼女は芦川に微笑みかける
「ようこそ！　『ボク達の世界』へ！」と

これは「音楽」を「武器」にして戦う、現実離れしててちょっぴりクレイジーな少年少女のお話

Track1－Lyla（前書き）

※ラノベっぽい文体になっています。
※微妙に残酷な描写あり。ですが、頻繁ではありません
好きな音楽を聴きながら読んでいただければ幸いです

Track1－Lyla

揺れる、揺れる、体が横にわずかに揺れる。車の中だからだ。シートベルトをつけているとはいえ、車体が揺れるので後部座席に固定されている子供の体も必然的に揺れた。

それは単に路面状況が悪いと言うわけではなく、運転席に収まっている男性が原因のようだ。

「ペーパーなのに…なんならあたしが運転して上げよっか」

「だが断る！家族連れで好きな音楽をかけながらドライブは男のロマンだろ！」

助手席に座る女性――運転席の男性の妻が苦笑交じりにいうが、夫のほうは聞かずに、カーステレオの音量を上げた。

「べーんべーんべーんべんべべん♪」

後部座席の子供が曲の出だしの不思議な楽器の音に合わせて歌う。

「おお、わが息子！この曲の良さがわかるか！ゆくゆくは英語の歌詞でちゃんと歌えるようになってくれ！」

「まだ6歳なのにそんなのきたいしてどーすんの」

「お前みたいに頭が良ければ、小学校に入ったらすぐ歌えるかも知れんぞ？」

「お前ってゆーな」

「おまえっていうな！」

「真似しない！」

夫婦のやり取りに、その子供がそれを真似る。車内には「鳥の歌」が流れ、和やかだ。

「おとうさん、ゆうえんちまだつかない？」

「ん！お前が一人前の男になるころにはつくさ！」

「貴方は何年後の話をしてるの？」

その言葉を真に受けてしまったのか、後部座席の子供は、どうしたら「いちにんまえ」になれるかをうつむいて考え始めてしまった

「無理に考えなくていいからね？貴方も変なこと教えない！」
「えー案外すぐだぜ？一人前っ――――」
父親が反論し終えようとした瞬間、急に前方が太陽のように光り、突如道路を走る車たちを爆風が襲った
車内にいる親子三人は悲鳴を上げながら爆風に呑まれる
揺れる、揺れる。理不尽な暴力のように、爆風と炎が車を揺らした。

「ってうわぁぁぁぁ？！！」
居眠りから冷めた１６歳の少年、芦川　真は、座席から飛び起き、自分の体を改めた
一通り自分の体を触り、怪我をしていないか確かめる…ってさっきのは夢じゃないか、と思い出しほっと緊張の糸を解く。
が、現実は夢よりも辛辣なものを突きつけてくる
「あたしの授業中に居眠りとはいい度胸だな、芦川？」
後ろから、もうすこしで３５越え（本人の前ではいえないが）と思われる、女性の声。嫌だ嫌だとは思いつつも、体が勝手に振り返ってしまう。
振り返ったすぐそばには、鬼軍曹と呼ばれ畏怖される、社会科の脇田先生が出席簿を両手で持って、芦川の後ろにスタンばっていた。手に持っている出席簿は頭に当たれば痛そうだ。
そう、いまは社会科、公民の授業中。しいて言うならここは日本の地方都市、その学校、県立七石高校の２－Ｂのクラス内だ。その中で芦川は居眠りをして、かつ派手に立ち上がって起きてしまったのだ。
周りからはクラスメイトのクスクス笑いが聞こえる。仲睦まじいカップルなんかは芦川を指差して堂々と笑っている。ちくしょー不幸せで理不尽な社会の波に揉まれろ。そして笑うな。
ともあれここは周りの目なぞは気にせず、素直に謝ったほうが得

策だ。脇田先生はいまにも出席簿を構えて山姥のように「キェェェェ！！」と襲ってくるかわからない。
「すいません、気をつけます…」
「今回は許す、座れ。…大変なのはわかるが学業にも集中してくれよ？」
芦川が座ると脇田先生は、スマートな立ち振る舞いで教壇に戻っていった。婚礼期なんかとっくに過ぎているのにえらそうにしやがって、と芦川は心の中であかんべーをした
教科書に目を落としながら、さきほどの夢を思い出す。いや、本当なら思い出したくは無い。ただ忘れてはいけない出来事。それが夢になって芦川の頭にもたげてきた。

疲れているのだろうか、今日は早めに寝よう等と考えると、ポケットの中で携帯電話が小さく震えた。授業中の携帯電話はご法度だが、ばれなきゃどうって事は無い。
こっそりと脇田が黒板に知らない県の特産物を書き始めたのを見計らい、携帯電話を見た。

『＞狗飼
今日、放課後学校近くの「ＤＡＮＤＡＮバーガー」で路上ライブの打ち合わせ。あと社会科のノート頼む』

半ば呆れながら携帯電話を閉じる。
狗飼　結城は同じクラスで芦川の親友だ。共に土手で拳を交え好きな女の子を奪い合ったり、友情を確かめるように盗んだバイクで夜の街を走り出したり、はしなかったが。少なくともお互いを信頼しあえる仲ではある。
ぱっと、狗飼の席を見ると空席だった。狗飼はギターが趣味で、よく授業をサボっては「恋人」並みに大事にしているクラシックギターと街に繰り出している。

多分今日も学校をサボり駅前で、ギターをかき鳴らしながら、世の不条理を歌っているに違いない。
親友よ、自由気ままに不平不満を歌うのは良い、だけどその不条理にとらわれている友人と一緒に、苦しみを分かち合うという思考は持ち合わせていないのかね？と伝わるはずのない思いを芦川は叫んだ。頭の中で。

放課後、芦川はメールでの約束どおり学校近くのチェーンのファーストフード店「ＤＡＮＤＡＮバーガー」に来ていた。
時刻は3時を少し回ったころ。小腹を空かせた学校帰りの学生や、若めの層の主婦の方々で賑わっていた。
その中を縫うように芦川は進み、ハンバーガーとコーラが乗ったトレイを持って、二人用のテーブルについた。
狗飼はまだ到着していないようだ。まったく自分から呼び出しておいてけしからん、とハンバーガーを包みから取り出し齧りながら芦川は（心の中で）愚痴る。食べたハンバーガーはチェーン店独特のパサパサ感をかもし出しており、コーラを口に流し込まなければ、口までパサパサになってしまいそうだった。
とりあえず狗飼が来たら愚痴のひとつでも言ってやろう、そう考えながらハンバーガーを齧り大きな窓の外を見る。
季節は秋に差し掛かった9月後半。この時間帯は長袖の制服じゃないと流石に寒くなってくるころだ。今年もあと一ヶ月で学校の文化祭だ。
今年は狗飼共にギターの弾き語りでもしようか、と考えたが芦川はまずギターを弾けないし、かなりの音痴だった。
しょうがない、休憩所で音楽でも聴いていよう。と不毛な計画が出来上がってしまった。

芦川　真。そんな不毛な妄想にふけっている少年の名前だ

顔はパッと見冴えないが、目が母親に似て吊りあがっており、いつも回りの皆に
「不満があるならちゃんと言いなさいよ！」
だとか
「そのしかめっ面どうにかならない？」
とよく言われる。
みんな酷い、いつでもってわけじゃないけど、基本的に不機嫌ではないよ、と
また極度の運動音痴で、体育の成績で2以上なんか取ったことが無い。
一時期、筋トレや、ランニングに精を出したが、結果はダメダメ。運動は落第さえしなければ良いや、とのらりくらりやっている。
それが16年間積み上げてきた「芦川　真」だった
特に面白くもないし、つまらないわけでもない。
それが芦川だ

ふと、携帯電話の時計を見ると、ここに来てから30分もたっていた。特に何か考えていたわけでもないのに時間がたつのは早い。
店内はさらに客が増え、席がどんどんなくなっていた。一人で二人用のテーブルに座っているのも心苦しいがしょうがない。これも自分のふがいない友人のためだ、とふてぶてしく納得したその矢先だった。
「あのーごめん。相席良い？」
突然声をかけられ、目をひん剥いて、そちらのほうを向いてしまった
「あ、え、はい？」
「えと…相席にしてもらっていいかな…？他に席無くて…」
そこにはハンバーガーやポテト、ナゲットが大量に乗ったトレイを持った、少し幼い顔立ちをした、同年代と思しき女の子が立っていた。

あたりを見渡すと本当に席は埋まっていて、自分の向かいの席しかないことが見て取れた。
しかし、この席は腐れ縁とはいえ自分の友人のために確保した席でもあるわけだし…
複雑な面持ちの芦川を見て、なにか感じたのか
「あ、だれかまってたりとかだよねっ。ごめんごめん、他あたるねっ」
と言ったあと小さくお辞儀をして他の席を探そうと、その子は芦川のそばを離れようとした

しかし彼女が離れていった瞬間、芦川は心の中でなにかが囁いた気がした。良心とかそういうものではなく、本能に近いようなものが、芦川を突き動かした。
「ま、ま、ってください…」
「？」
女の子はすぐにこちらへ振り返ってくれた。その顔は、目は少し悲しそうにも見えた
それもあいまって、芦川の口調は先ほどとは違い、ちゃんとしたものになった。
「相席でよければ、ど、どうぞ」
やっぱり少しどもってしまったが、その子の顔を笑顔にするには十分だった。
女の子はまるで真夏に咲くひまわりのように笑い「ありがとっ！」と言って芦川の向かいの席に座った。
その笑顔に思わず、顔が赤くなった芦川は「いえ、どうも…」とぼそぼそつぶやきながらごまかすように残ったコーラを飲む。

ちらりと向かいの少女を見た。ショートカットの髪が良く似合うボーイッシュな女の子だ。服装もズボンに紺のパーカーと女の子らしくは無い

彼女は「いただきますっ！」と短く手を合わせたあと、小さい口を使ってハンバーガーにカプリと齧りつく。
　それがたまらなく美味しかったのか、ニヤニヤしながら片手でポテトをいくつかつまみ、ほおばった。
よく見ると目が青い海のようで吸い込まれそうな色の目だ。肌も日本人に比べ白い。
もしかしたらハーフなのかもしれない。
普通女の子がガツガツ食事をするシーンを見てドキドキする諸兄も少ないだろうが、彼女のボーイッシュな外見がそれを正当化、むしろその子供っぽさを魅力として引き立たせていた。なにより、指に付いたケチャップをなめとる仕草がどこか艶かしくて――――

「どうかした？」
「いえなんでもっ！」
　どうやらガン見してしまったようだった。あわててうつむいて、胸の高まりを落ち着かせる。
（なんでこんなにテンパってるんだよ俺…）
　芦川自身、女性に免疫が無かった。多少かわいい子を見るだけでも、変なテンションになるのに、向かいに座っているのが、かなりレベルの高い女の子ともなればもうどうしようもない。
　芦川は逃げるようにポケットから音楽プレーヤーをとりだし、イヤホンをつけて曲を再生し始めた。
　芦川が使っているのはもう何年も前の世代の音楽プレーヤーだ。出来ることなら新しいものに変えたいのだが、そんな余裕はないし、なによりこれは形見だった。
幼いころに死んだ両親、そのうちの父親の形見のプレーヤーだ。そうむげには手放せなかった。
　ふと顔を上げると、ナゲットを食べている彼女の首にはヘッドホンがかけられていた。
コードが無い、音楽プレーヤーとヘッドホンが一体になっているタ

イプで、暗いところでラインが青く光る。最新型で流行のヘッドホン。
芦川のバイト代や、親族からの仕送りではとても買えないほど高い。そういう代物だ。とても羨ましい。
彼女の美麗さにさきほどまで目が行っていたのに、今度はヘッドホンとは、と芦川は自分が情けなくなり、かつ恥ずかしくなってその気持ちをごまかすように、音楽のボリュームをあげた。

まだ、客は大量に入っており、狗飼は現れない。しかし、かわりに妙な男が入店してきた。
黒いガクランのような服を着て、サングラスをかけた大男だ
「やのつく自営業の方でしょうか？」
と思わず口から漏れたときに芦川は気づいた。なにを言っているんだ、目の前には女の子もいるのに不安になりそうなことを言って！
「あ！　すいません！　気にしないでください！」
「……」
彼女の顔は先ほどの顔とはうって変わり、どこか怯えてるようにも、怒っているようにも見えた。
あーあ、失敗しちゃったぞ芦川。女子を困らせてどうするよ、とイヤホンを外しながら心の中で自分を叱責する。
「…の」
「は？」
彼女が小声でなにか言って首を横に振った
「違うの…ボクが…」
絞り出すような声で彼女はなにか言いたげだったが、それを邪魔するかのように怒声が飛んだ。
「おらぁ！茨乃ォ！でてこんかい！！」
怒声は大男から発せられたものだった。途端に店内の客たちの目が大男を見る。芦川も例外ではなかった。
大男の肌は浅黒く、背は１８０をゆうに越していて肩ががっちり

している。来ている服の袖がだぼっとしているので、腕の太さははっきりとはわからないが、相当のモノであろうことは疑いようも無かった。
「おら！今出てくれば半殺しで済ましてやる！とっとと出てきやがれぇ！」
大男は手近にあった椅子を蹴り飛ばした。その行動を見てか、客たちはみな目をそらす。
店員の一人は通報か、店長でも呼びに言ったか「スタッフルーム」と書かれた扉の中へ入っていった。

さっきから男が「茨乃」という人物と思しき名を呼んでいるが、いったい誰なのだろうか。芦川は頭の中で推理する。
パッと思い浮かんだのは「借金取り」
茨乃という人物が借金を踏み倒し、それをこの大男が追ってきた…しかし違和感がある。
この学校が終わった直後のこの時間、こんな時間にファーストフード店に基本借金をするようなおっさんはいない。
店内を見渡しても学生、よくても主婦ぐらいだ。
となると、他にはカラーギャングや不良が、なにかの仕返しに「茨乃」とやらがいる、ここに来てお礼参り、なんてのも考えられるが、それも考えにくい。
そもそもそういう輩は相手が断れないように、集団で呼びつけに行ったりするはずだ。この男は一人だ。店の外で、メリケンサックやナイフを持った少年らなどは見当たらない。

色々と思案するうちに先ほどの扉から、店員と、白髪が生えた中年の「店長」と書かれたプレートをつけたおじさんが、のそのそと大男のほうに歩いていき、叫ぶ大男の前に立つ。
「大変申し訳ありません、お客様…ほかのお客様のご迷惑となりますので…」

「ああん？」
本当に申し訳なさそうに、静かに抗議する中年店長
しかし大男は威圧的な態度を崩さず、拳をならす。店内で流れるピアノの静かな曲が、場違いに聞こえる。
「おい、じじい。お前、歳はいくつだ？」
「は？と、歳ですか？」
「とっとと言えよ！クソジジイ！」
「ご、五十六です！」
大男が再びいすを蹴り上げると、店長は震えた声で自分の年齢を答えた。けられた椅子は、自動ドアのガラスにあたり、音を立てながら、ガラスを破る。ふと大男がサングラスをとり、何もかも悟ったような顔で店長の顔を見る
「そうか５６か…」
ふっと店内の緊張の糸が緩んだ気がした。が、
「５６年の人生お疲れさん」
大男がそう言うや否や、店長の顔がぺしゃんこに「潰れた」。もっと正確に言うと大男が「潰した」。大男の両手にはいつの間にか、ファンタジーなお話に出てくるガントレット（手甲）が装着されていた。
一瞬、ほんの一瞬だが静かになって、店内は悲鳴で埋め尽くされた

「いやぁぁぁぁぁ！！！」
「ここから！ここからだしてよぉぉぉ！！」
「邪魔だ！俺が逃げられねーだろ！」
入り口付近には人が殺到し、阿鼻叫喚の状態だった。
あまりの事態に感覚が麻痺してしまったのか、芦川は椅子に座ったまま、その様子を銅像のように固まって眺めてしまっていた。
「ってやばいよ！逃げなきゃ…っ！」
気づけば大男は、他の客を押しのけながら芦川とヘッドホン少女

の座っている座席のほうに歩み始めた。
芦川の頭がフル回転する。少なくとも入り口は人が多すぎて、到底すぐには逃げられそうに無い。かといって、トイレなどに立てこもるのも、駄目だ。特殊な器具をつけているとはいえ、男の腕力は相当なはずだ。すぐに突き破られる。
そしてヘッドホンの少女は恐怖のせいなのか、顔が真っ青になり先ほどまでの芦川のように動けなくなっている。
状況は最悪、まるで海で溺ぼれ、沈んでいくような感覚に――――
（待てよ、溺れる？）
突然芦川の脳に電流名ひらめきが浮かぶ。見えた、ここからの脱出口が。
すぐに必要なものを探し、見つけ出す。逃げることに必死になって主婦が置いていった野菜などが入った　買い物袋だ。すぐに手に取り、ひっくり返して中身を全部出す。
用があるのはじゃがいもや、特売の卵ではない。それを入れている「ビニール袋」だ。
そのビニール袋に今度は自分の財布から小銭を流し込み、窓ガラスに打ちつける！
ガラスには当たったと同時にほんの少しひびが入る。また繰り返し打ち、どんどんとひびを広げていく。

昔、テレビ番組かなにかで、海などに車ごと落ちたときの対処法として、紹介されていた手法だ。
窓のガラスもあけようと思えば開けられるが、一般的な窓と違いかなり開けにくく、かつ固定されたテーブルが邪魔になって、そこからは人は脱出できそうになかったので、いっそ壊すことにした。

案の定、５回ほど小銭入りビニールを打ち付けたら、ガラスはいい音を立てて割れ、芦川達の脱出口を作った
「早く逃げましょう！えーっと…名前わかんないけどっ！」

いまだに固まっている少女の肩を力強く叩き、こちらに気づかせようとする
しかし、少女は心ここにあらず、といった面持ちだ。今度は片を揺らしながら語りかける
「早く逃げようって！なんかっていうかかなりヤバイよ！」
「茨乃　蒼」
少女が立ち上がり、大男のほうへ歩いていく
「は？え、ちょまっ！」
「茨乃蒼それがボクの名前」
芦川の思考が失速する。
じゃあさっきまで大男が呼んでいたのは、あの可愛い少女のことだったのか？でもなんで？なんでこんなことになってるんだ？てか、なんで俺逃げられないの？足うごかねーの？
さまざまな考えが頭を飛び火する。取り乱してはいないが、実質芦川はパニックだった

「よぉ、茨乃ォ。こそこそ逃げるのはやめたかァ？」
「関係ない人まで殺すなんて…キミは畜生以下だね」
「フン！その生意気な口も今日ここまでじゃ」
いつの間にか、少女―――茨乃が大男の前に立ちはだかっていた。距離にしておよそ2メートル
「いいよ…逃げるのはやめにする。やめてキミを殺す」
茨乃は大男を睨みつけ、ヘッドフォンを頭にかける。殺す、というのは冗談ではなさそうだが、少し雰囲気が異様だ。
「はァ？　殺されんのはおまえじゃぁぁぁ！！」
間髪いれずに大男がガントレットが付いた腕で殴りつけるため、大きく一歩で茨乃の目前まで迫るが、　茨乃もあわせるようにバックステップで大きく後ろに跳び、ヘッドホンの再生ボタンを押す
「パーティータイムの始まりだよ！！」
茨乃が啖呵を切ると、茨乃の両手が光に包まれる。光が収まると、

彼女の両手には大型の黒い二挺の拳銃が握られていた。小柄な少女には似合わない、映画やドラマの中にしか出てこない、標的の肉を削ぎ射抜く武器だ。
茨乃は着地すると、攻撃を回避され足が止まった大男に向け、拳銃を乱射する。二挺の拳銃はまるでピアノの音のように止まる事無く、火薬の炸裂する音を出しながら弾丸を吐き出す。
大男も慌てて座席の影にかくれるが、腕にかすったらしく、血が吹き出る。
「やるのぉ茨乃！　防弾コートを突き破るとは！　だが俺はこの程度ではないぞォ！」
大男は座席の影からミサイルのように飛び出し、茨乃にむけ拳を振るう
「ふぁっ…」
茨乃はすぐさま撃たずにヘッドホンに手を掛け、素早く曲送りのボタンを押す。するとまた光が茨乃の手を包み、すぐ消えうせる。彼女の手に握られていたのは先ほどの二挺の拳銃ではなく一挺のショットガンだった。
「っきゅー！」
大男にショットガンを向け引き金を引く。茨乃の懐まで迫っていた大男は至近距離での射撃を喰らい、大きく後ろに吹き飛ぶ。
「まだまだ行くよぅ！」
茨乃は再びヘッドホンに手をかけ曲送りをする。また手が光に包まれショットガンが姿を消した。変わりに彼女の手に握られていたのはアサルトカービン――――攻撃や制圧が得意なライフルが握られていた
「しっつこいんだって、キミたちはぁぁぁ！」
茨乃が引き金を引くと、まるでドラムがリズムを刻むように同じ感覚で、ライフルから弾丸が発射され、吹き飛ばされて倒れる大男の体に打ち込まれる。
大男は弾丸が撃ち込まれるたびに、体を痙攣させていたが、やが

て動かなくなった。
おそらく……
「死んだ…」
石のように固まっていた芦川の口が開く。
窓から逃げられたのに、彼は動けなかった。本能的に逃げることも無く、茨乃の戦いに見とれてしまっていたのだ。

だけど、本当にあの大男を殺してしまった…成人男性の頭を平気で潰すような大男を。銃器を使ったとは一人で。さっきまでハンバーガーを無邪気に食べていた彼女が…
「逃げてなかったんだ」
茨乃がいまだに逃げていない芦川に気づき、芦川のいるほうに歩いてくる。他の客はもう全員逃げたのか店内には茨乃と芦川、そして大男の死体がいるだけだった。
「ごめんね…変なことに巻き込んで…忘れてって言えれば良いんだけど…」
なに都合のいいこと言ってるんだ！忘れられるわけ無いだろ！こんな出来事！と、芦川は叫ぼうと思ったが口が動かない。恐怖心からだ。茨乃はまだ手にライフルを持っている
「あ…」
自分がまだライフルを持っていることに気づいた茨乃は頭からヘッドホンを外す。すると、ライフルがすうっと消えてしまった。一体どういうからくりになっているのかは、芦川には見当も付かない
「ともかくキミはここを離れて！面倒ごとになるま――」
茨乃は逃げるよう芦川に促すが、最後までは言えなかった。先ほどまで大男が装備していた「ガントレット」が茨乃を殴って吹き飛ばしたからだ
「がはっ！」
茨乃は口の端から血を流しながら、壁に叩きつけられる。
「まったく…手間かけさせやがって…」

突然、男の声がした。
そう、死体となった――――死体のように見えた大男から発せられた声だった。
男はゆっくりと起き上がり、手をかざす。するとさきほど茨乃を吹き飛ばしたガントレッドが大男の方へするすると戻っていき、再び装着された。
「しぶといなぁ…」
茨乃は震える手でヘッドホンに手を伸ばし、音楽再生ボタンを押すが、何も起こらない。さきほどのように拳銃やショットガンが出てくることは無い。
「うそ…壊れちゃった？」
何度も何度もボタンを押すが、何も起こらない
「はっはっは！運の尽きだな茨乃ォ！」
男はゆらりと立ち上がり、茨乃に一歩づつ近づく。確実に一歩一歩。

その様子を、芦川は見て思う。
今一人の少女が男に殺されようとしている。誰も手助けしてくれない。
強いて言うなら、自分が助けることが出来る立場にいる。
でもなんの役にも立たないかもしれない
いっそ、何も見なかったことにして破ったガラスから逃げることだって可能だ
でもそれでいいのか？

あの時
自分のときは誰かに助けを求めたのに
誰かが助けようとしている場面で

逃げるのか？

それだけは…

「絶対にいやだぁぁぁ！！」

芦川は半泣きで大男と茨乃の間に入り、両手を広げる。茨乃をかばうように

「そりゃ散々あれだけ撃たれりゃ誰だって怒るよ！でももうやめてあげなよ！もうこの子戦えそうに無いじゃん！」

「そこをどけな、小僧」

大男が距離を詰めるが、芦川は動かない

「嫌だ！なんで二人が戦ってんのか知らないけど嫌だ！第一なんで店長っぽい人殺したんだよお前！」

「どかんと、お前ごと茨乃を殺す」

「ことわるっつってんだろ！ホモ野郎！」

足は震えが止まらず、顔は涙と鼻水でぐしゃぐしゃ、切った啖呵もどこか弱々しい。だがそこからは絶対に動かなかった。

「そうか…お前いくつだ？」

「１６だ！」

さきほど店長を殺したときのように、大男は聞いてくる。おそらく殺しにくるであろうことは芦川にも予想が付いた。

「そうか…骨はたしょうあるようだが残念だ、１６年の人生お疲れさんっ！」

大男が走りながらこちらに迫る

時間がゆっくりと流れる

ここで死ぬのか…

赤の他人の、わけのわからない女の子を庇って俺は

芦川の耳に音楽が聞こえる。天使の吹くラッパに聞こえた。自分にもお迎えが来たのかもしれない。が、それは天使のラッパなどではなく携帯電話の着信音だった。

（こんなときになんだ？…多分狗飼だな…）

死ぬ間際に聞こえたのが電話の着信音とは、笑える

芦川はゆっくりと目を閉じた

目を開く。そこは謎の大男が襲撃したファーストフード店ではなくただただ真っ暗な空間だった。
（これがあの世か…）
直感的に芦川はそう思ったが突然、さまざまな音が周りで鳴り響き始めた
芦川はその鳴り響く音たちのあまりの煩さに耳を塞ぐ。
（ここは地獄か？！）
流石に天国ではなさそうだ。こちらを祝福している感じがまるで無い。
しかし、芦川はその氾濫する音の中に、一定のリズムで鳴らされる音があるのに気づく
ドラムだ。ドラムの叩く音が聞こえる
他にもないかと、暴走する音の集団のなかから必死で調和の取れた音を探す。

ベース
キーボード
ギター
シンセサイザー
氾濫する音の中で、唯一同じメロディを、調和の取れた音を発していた
そして、最後。
己の不幸に嘆くことなく、傷だらけになっても立ち上がる。そんな力強い歌声が芦川の耳に届いた。その歌声は、組み合わさった楽器たちの奏でる音楽は、芦川の耳にメッセージを送る

『さぁ、掴み取れ』
『己の壁を破壊しろ』
『空の色を変え』
『絶望を希望に変えろ！』
『さぁその手で掴め！』

突然、芦川の目の前に太陽のように明るい光が現れる。
（これを…掴み取る？掴み取れば…変われる？）
芦川は耳を塞いでいた手を目一杯伸ばし、光を手にしようとする
容赦なく調律の取れていない、混沌とした音たちが芦川の耳を襲う
だが、耳は塞がない！必死に手を伸ばし、光を

「掴む！」

「ああ？」
大男は奇妙な感覚に迷いを感じる。やわらかい肉質のものを殴ったはずなのに、何故か金属を殴ったような感覚だったからだ
「…！お前ぇ…」
「言っただろ…嫌だって…」
大男が放った拳は

芦川の腕から伸びる片刃の仕込み剣――――アームブレードで受け止められていた

暗く湿った場所、普通の世界に住む者たちにはおそらく一生縁がない場所
そこに木箱に腰を掛け、外套で素顔を隠し楽譜を読む者の姿が
彼、彼女かは分からないただ「ソレ」は立ち上がり呟く

「ようやく君達に会えそうだ、楽しみだよ」

一組の男女が大きな塔の上から町を見下ろす
大男が着ていた黒衣と同じものをを纏って
「あはっ！これこれ！この時を待っていましたの！」
「あんたは趣味が悪い……」
「はぁ？この下にいる『ゴミ』が必死になる姿とかを想像すると笑えてきません？」
「どうだろうね…」
会話の調子ではただの冗談のようにしか聞こえない
ただし、二人とも笑っていた
狂気を含ませて、おぞましく笑う

駅の人ごみを縫うように進みながら、長髪の少女が耳掛け式のヘッドフォンを外す
そのヘッドフォンからは、これからは嫌というほど聴くであろう音楽が流れていた
「たどり着くは絶望か、安らぎか……」
寂しそうに彼女は呟くが、目は獣のソレに見紛うほど輝いていた
「安らぎなど、私が望むべきものではないのだろうけどな」
彼女は肩をすくめて人ごみの中に消えていった

「聞いちゃいなかったが……まさかてめぇだったのはのぅ」
ファーストフード店「ＤＡＭＤＡＭバーガー」店内、大男は芦川から離れて、身震いする
「……」

芦川は大男を睨み付けながら、片刃のついた右腕を、前に突き出し構える
「まぁ、ええ。こっちのほうが都合がいい……ハッ！！」
大男は拳を天井に向ける。するとガントレットがロケットパンチのように飛び出し、天井を突き破って、大穴を開ける。
「またな！坊主！次に会うときはてめぇを殺す！」
「……なんどでも来てみろよ…また追い返してやる…」
静かな口調で芦川が言葉を発すると、大男は鼻で笑い地面を蹴る。男は先ほど自分が開けた巨大な穴から外に飛び出し、サイレンが鳴る方とは反対に、駆けて逃げていった。

「……終わった、のか？」
芦川は自分の右腕を見る。しかしそこには先ほどまで芦川のみを守ってくれた刃は無かった。
「なんなんだよ…もう…」
ふっと力が抜け、芦川の体が崩れ落ちそうになる。
「よっとっと」
が、何かが芦川の体を支えた。
芦川が庇おうとした少女だ。ヘッドホンをつけ、銃を華麗に扱う少女
「重いねぇ、キミ」
彼女はゆっくりと芦川を座らせ、向かいに立った笑顔で手を差し伸べた
「ようこそ！『ボク達の世界』へ！」

ｒａｃｋ！

Ｔｏ　ｂｅ　ｎｅｘｔ　Ｔ

Track2―Inventionen for No.4 D minor

注意！若干のグロ表現、とあるけど今回はそういうのはありません！

前回までのあらすじ

目つきは悪くそのうえ態度の悪い、その実チキンな高校生芦川真は友人、狗飼結城と会うためにファーストフード店で待ち合わせた彼を待っていた。

しばらくたっても狗飼に現れず、混んでいて席に座れなかった少女、茨乃に狗飼の席を譲ってしまう。

その直後、茨乃を追ってきたと思われる大男が、店の店長を客の前で殺害、パニックになる店内。

そんななか茨乃は拳銃を手にし、大男に立ち向かうも追い詰められる

それを見ていた芦川は、突如自分の右腕から武器を発現させ、大男から茨乃を守ったのだった……

Track2―Inventionen for No.4 D minor

授業終了を知らせるチャイムが鳴る。芦川は目に隈を蓄えながら、かろうじて書き上げた数学のノートを閉じて机に突っ伏した
眠れなかったのだ。決して気になるあの子への届かぬ思いに悶々したり、夜の街でファンキーな青年たちと踊り明かしたわけでもない

前の日に起きた「ＤＡＮＤＡＮバーガー」での惨劇。
金属の篭手をつけた大男と二挺の拳銃を扱う少女、茨乃の暴力のぶつけ合い
そして突如として現れたアームブレード
大男を撃退したあと、茨乃に声をかけられたがどうしていいのか分からず、パニックになり思わずその場から全速力で逃げてしまった。その時の芦川はタガが外れていたのか、陸上部の面々にすら勝てそうな速度で自宅まで帰った
ただ自宅に戻っても多くのことがありすぎて、気持ちの整理がつかず食事ものどを通らず、睡眠は一睡もできずにいたのだった

もちろん翌日のコンディションは最悪。今終わった数学の授業中もいつ倒れそうになるか分からなかった
しかし次は鬼軍曹、脇田先生の社会科の授業だ。居眠りをしようものなら、今度こそ鉄拳制裁が行われてしまう。それを少しでも回避するため、休み時間だけでも寝ようと、机に突っ伏したまま、芦川は目を閉じるのだが――

「おい！　真、生きてるか！？」

その睡眠を完慮無きまでに邪魔しようとするかのように、ガラっとドアが開かれ、同年代の男子の声が教室に響く
芦川は顔を上げて、その声の人物を半分開いていない目で見る
さらさらの髪、平均よりも高い身長、おしゃれに気崩した制服、整った顔立ちはそこらのアイドルともいい勝負。肩には学校指定の鞄をかけ、手にはクラシックギターが入っていると思われるギターケースを持った少年。彼こそ昨日「ＤＡＮＤＡＮバーガー」に芦川を呼び出した張本人、狗飼　結城だ
「狗飼……」
「よかったよ！　学校に来てたんだね！」
それよりお前遅刻だよ、と芦川は言いそうになったが、慌てふためく様子が面白いのでからかうことにした
「……体に大きな傷が出来た」
「？！　…まさか昨日連絡取れなくなったのって……」
「病院にいた」
嘘です、自宅にいました。携帯は鞄に入れっぱなしでした
「お、オレのせいで芦川は……っ！　一生消えることのない傷を……っ！」
「……くっ」
笑いをこらえるのに必死です。本当にありがとうございました
「……って待てよ、そんなに大きな傷なら病院にいるはずじゃ……」
「……くくっ……くくくっ」
「って笑ってるし！あしかわぁ！騙したなこのー！」
「のはっ！　離せ！苦しい！苦しい！」
狗飼が芦川の後ろに回り、首に手をかけ締め上げる
「喰らえっ！　『友情と裏切りのサクリファイスロック』！！」
「技名なげぇ！　ギブギブ、悪かったって！」
「……まったく、本当に心配したんだよ？」
狗飼はやさしい笑顔になって、首から手を離す。その笑顔を芦川ではなく女の子に向けていたら、どこまでモテていただろうか

「でもまことときゅん、お詫びに奴隷みたいに足くらいは舐めるよ？」
あと黙れば完璧

授業開始のチャイムが鳴り、おのおのが席に着く。普段サボり気味の狗飼も、今日は自分の席に座って、教科書を広げていた。
果たしてこの一時間、ぶっ倒れずにキチンと受けられるだろうか。脇田からも首を絞められたら勘弁ならない
しかしその心配は杞憂に終わった。教室のドアを開け入ってきたのは、教務主任の爺さん先生だった
「えー脇田先生は風邪を引いてしまったので、授業の代わりにＤＶＤを見ることになりました…感想をノートに書いて、後で提出してください」
教務主任がのろのろと教室に備え付きのテレビにＤＶＤを入れ始めた
脇田先生は多分風邪ではない。彼女は男にフられると、仮病を使い休む傾向がある。一番長いときで一週間だった。今回はいったいどれくらいの休むのだろう。あとで狗飼と賭けよう
自習でないのは残念だが、少なくとも一時間まるまる眠れそうだ。感想はあとで誰かに見せてもらい文体を変えて出せばよい。どうせ、ただの教育用ＤＶＤなのだ
そう思って早速机に顔をうずめ眠ろうとした。が、再生が始まったＤＶＤのタイトル画面を見たとき芦川は眠気が吹き飛んだ。一瞬で

『復興――七石市ガス災害から１０年』
タイトルが筆で書いたようなフォントで出てくる。フェードアウトした後それなりの大きさの田んぼと住宅街、ほんのちょっとのビルで構成された町が映し出される
『これは１０年前の七石市です。近代的な建物がありながら、緑が

多い町でした』
田で仕事をする農家の人や、太陽に照らされる木々。そこを飛び交う鳥たち、しかし、一瞬画面が光に包まれそれらの映像は広大な焼け野原の映像に変わった
『しかし、その美しい町はこうなってしまいました。そう、七石地底ガス爆発です』
廃墟となった遊園地がテレビの画面に映し出される。原形をとどめていないジェットコースターのコース、屋根と壁が吹き飛んだお化け屋敷、大きくひしゃげた観覧車。
『この遊園地、ガス爆発前は休日前に家族が訪れ笑顔を見せる場所でした。しかし、その笑顔溢れる遊園地が爆心地になるとは誰も、考えもしませんでした』

芦川は無理やり、机に突っ伏す。
気にするな、気にするな、これは教育用の映像だ、俺とは関係ないんだ。と芦川は自分に言い聞かせながら、居眠りに沈み込もうと目を閉じる。でも全然眠れない。さっきまで死ぬほど眠かったのに
「ぐぅ……」
席の周りを見渡す。みな鬼教師の急な不在に喜び、ＤＶＤなんぞはろくに見ていない
はぁ、とひとつ芦川はため息をつき、ポケットの中の音楽プレーヤーに手を伸ばそうとした瞬間、
「っ！」
がしゃん！という音と共に狗飼が倒れる。すぐに教務主任が狗飼のそばによってきた
「き、君大丈夫？」
「す、すいません……ちょっと体調が悪くて……」
体調の不良を訴える狗飼の顔は青白く、いかにも病人といった感じだ。さきほどまであんなに元気だったのにどうしたのだろうか

「辛いなら保健室に行っても良いんだよ？　誰かに付き添ってもらって」
「じゃあ、すいません……芦川、肩貸してくれないか？」
「え、あ、了解。腕まわせ」
突然の申し出に少し戸惑ったが、親友（一応）の頼みだ、断れない。それにこのＤＶＤが流れていない場所にほんの少しでも行ければよかった。狗飼の腕を首にまわしてゆっくりと立ち上がり、足だけで器用に教室のドアをスライドさせる
「じゃ、先生、こいつ連れて行きます」
「んー頼んだよ、芦川君」
若干、ほっとしながら芦川は狗飼と共に教室をあとにした

「……よし、こんなもんで良いんじゃないかな」
あと少しで保健室につく、というところで狗飼は芦川から離れた
「はぁ？　お前何言ってんの？　具合悪いんだろ？」
「ふふーふ、オレのどこが具合が悪いって？」
狗飼の顔色は先ほどまでのグロッキー感などどこにもなく、健康そのもののように見えた。いや違う
「お前……バックレやがったな？」
「いまさら気づいたの？　まことたん」
「たん言うな」
どうやら、健康体の体を体調不良に偽装したようだ。どのような方法で、あの時顔色を変えたかは分からないが、大方息をかなり止めたり、腕をゴムで縛ったりしたのではないかと芦川は予想した
「さて、適当にブラブラしつつ時間潰そうか」
「いや、お前は良いけど、俺はただの付き添いでだな……」
「もーまことたんまじめ腐っちゃってー。まことたんもあのＤＶＤ見るのいやだったんだろー？」
芦川の顔が強張る。確かにあのＤＶＤをこれから見続けるのは苦

痛だった。目の前で一緒にサボるのを期待している狗飼は本当に芦川を理科してくれているようだった
「分かった、付き合うよ……この一時間だけな？　あとたんはやめろ」
「さっすがまことときゅん！」
「きゅんも駄目だ！」

二人がサボり場所に選んだのは非常用階段の踊り場だった。災害時の避難用なので外に出ており、秋の空気が心地よかった。
芦川はここへ来る前に学校にある自動販売機で買ったコーラの缶を開け、一口あおる。空気のカプセルが舌の上ではじける感覚が堪らない
狗飼は新発売の乳酸菌飲料に果敢に挑戦し、今は「うげぇ」とか「まことときゅんこれまずいー」と、唸っている。どうやら外れだったようだ
「しかしアレだよね、クラスの連中のあの他人行儀むかつくよねぇ」
踊り場の壁に寄りかかりながら、狗飼が顔をしかめる
「しょうがねぇよ、あいつらの親御さん達のおかげでこの町は存続できたんだから」
「ここまで様変わりしちゃったけどね」
狗飼は、学校の外を指差す。芦川がそちらを向くと、見渡す限りのビルが立ち並ぶ都市がそこにあった。
緑なんてどこにもない、東京や、大阪などにも負けず劣らずの近代都市がそこにはあった

さきほどのＤＶＤでも説明があったが、この「七石市」は一度すべてが灰になった
高濃度のガスが遊園地「セブンスストーンランド」の地下から噴出し、わずかな火によって大爆発。爆風と炎は市全体を覆い、数時

間後には市は壊滅、市民の８２％が死亡した。
　最初、ガスがまた爆発する恐れがある、という見解で七石市を立ち入り禁止地域に指定しようという動きもあったが、何故か政府が方針転換。「復興」という名目で、新しく都市が作られた次第だ。七石市の有力者が圧力をかけた、なんていう噂も流れたが当時の七石市いそんな大物はいなかった、というか居たとしても爆発で死んでいたんじゃないかと芦川は思う
　なにはともあれ、約５年の歳月をかけて次世代の都市に生まれ変わった七石市は、初めのほうこそ「ガス災害がまた起こるのでは」と不安がられたが、これを好機と見た企業や、流行に敏感な若者達。さらに政府の援助もあって、今日も人口を増やし続け発展を続けている。
人口の多くは、爆発後都市になったのを理由に引っ越してきた人達だが、芦川と狗飼はもともとの住民の生き残りだ
「なんて言いますか、うまく言えないけど、疎外感みたいなのは感じるよ」
「俺たちが気にしすぎても、しょうがないんだけどな」
　芦川も狗飼もあまりこの災害のことは思い出したくなかった。

「ありゃりゃ、災害後に来たアテクシは邪魔者でしたか～」
　下の階段からよく通る女性の声が聞こえる。芦川は気だるげにコーラを飲みながらそちらを向く
　階段を登ってきたのは、学校指定の制服とブレザーを着て、肩にエレキギターのケースを担いだ友人、北条カナだった
　北条と芦川達はひょんなことから仲良くなり、よく三人で遊ぶ過ごす仲になった
　彼女もこの時点でだいぶ遅刻だが、彼女にはそれ相応の理由があったりする…がここではあえて説明はしない
「おー邪魔だ、邪魔だ！　オレと真の友情育みタイムを邪魔すんなこのー」

「もう、お前喋るなよ……」
狗飼は持っていた乳酸菌飲料の缶を置きファイティングポーズを取る
「あ、なにこれ新発売のやつ？」
「スルーしないでよ！　オレの涙で砂漠に花が咲いちゃうよ？！」
北条は狗飼をスルーし、先ほどまで狗飼がまずいまずいと言いながら飲んでいた乳酸菌飲料に手を伸ばし、一口飲む
「うげぇ……まっず……ワンワンこんなのが好きなの？」
「好きじゃないやい！　あとワンワンいうな」
「狗飼→犬飼い→犬→ワンワンって事か？」
「ううん、うるさいから」
「二人とも酷いってヴァ！」
狗飼は涙目になりながら、乳酸菌飲料を奪い返し二人から離れてチビチビ飲み始めた
「まっ、邪魔と言われても消えるつもりは毛頭ありません」
北条はへらりと笑って芦川の隣に立ち、柵に寄りかかる
「消えないでくれ、ただでさえ友達が少ないんだ」
「にゃはは、それはそれは……もーらいっ」
「あ！　ちょ、返せ！」
北条は一瞬の隙を突いて、芦川の持っていたコーラを奪い取り飲み始めた
「くーっ、やっぱ美味しいッスね！」
「あ、あ、あのなぁ！　それは俺が口つけて飲んだやつでだな？」
「別にいいよ、友達なんだから。きにしなーいきにしない」
たじたじになる芦川をよそ目に北条はコーラを飲み続ける。女性に耐性無しの芦川にはこれだけで心拍数はかなり上がる
「ケッ、このビッチが！　オレの芦川の飲んだコーラを飲もうとするとは！」
いつの間に復活していたのか、二人の間に狗飼が割って入ってきた
「うわっ？！　ビッチ言うか、このワンワン！」

「だーかーらー！　ワンワン言うな、そのコーラよこしやがれですぅ！」
「悔しかったら取ってごらんなさーい！」
「ええい！挑発するか、このメス！食らいやがれ！、超必殺わんわんアタック！」
「お前ら狭い踊り場で暴れるな！　あと自分からワンワン言ってどうする！」
「まけるかっ！　北条キーック！！」
「ちょ！　待て俺にあたる！狗飼に当て――ぐへっ」
北条の蹴りが芦川にクリーンヒットし、芦川が踊り場から、階段を転げ落ちる
騒がしく騒音にしか聞こえない芦川たちの声、でも何年かたったらこれもオルゴールの音みたいに綺麗な思い出になるのだろう。それならこの喧騒も続いて欲しいな……
歳似合わずそんなことを考えながら、芦川はゴロゴロと階段から転がり続け、柵に激突して気絶した

「事件現場に行こうよ芦川！」
放課後、帰ろうとした芦川に狗飼が話しかけてきた
「事件現場？」
興味が沸いたのか、北条も近くに来た
「お前の頭の中がすでに事件現場だよ」
「まことときゅん酷いよぉ……」
変なものによく首を突っ込む狗飼だ。今回もなにをしようとしているか、容易に想像がついた
「もしかして……『ＤＡＮＤＡＮバーガー』？」
「その通り！」
狗飼は手をたたいて笑顔になる。対照的に芦川と北条の顔は曇った
「うーん……ニュースで見て気になったから、見てみたいワンワン

の気持ちもわかるけど……」
「そういう俺達みたいな野次馬で、事故にあった人が心を痛めたり、警察の捜査の邪魔になるようじゃ駄目だろ」
「ぐぬぬ……」
言い返せずに狗飼はうなる
できれば芦川はそこには行きたくなかった。そこへ行くとまた自分の腕から変な武器が出るのではないかと、不安でしょうがない
「ちぇー……でもさぁ？　人が結構いたのにそのときの状況が把握できてない、ってのが不思議じゃね？」
「あーそれはちょっと不思議かも」
狗飼の言う通り、テレビや新聞では目撃証言どころか、派手に暴れた大男や、それに対して拳銃で戦った茨乃についてまったく報道されなかった。あんなに目撃者もいたのに何も報じられないというのはかなり不気味だ
不意に北条が芦川に尋ねる
「そういえば真はあの時『ＤＡＮＤＡＮバーガー』にいたんだよね？」
「あ、ああ居たよ。でも、急に騒ぎが起きて、逃げるのに必死で……」
「そっかー……そえなら仕方ないね……ハイ、ワンワンあたしも見に行くー」
「今の会話からどうやったらそうなるんだよ、おい」
「だって気になるじゃないですかー。ワンワンあたしは良いよ。今日は予定ないし」
「さすが北条、話がわっかるぅ！　さて……後は芦川だけだぞ？」
狗飼が蛇のように芦川の首に腕を回してきた
本当にできることなら行きたくない。ただ北条が行くとなると話は別だ。狗飼と北条は単体だとそれほどでもないが、そろってしまえば最後。何をやらかすかわからない
以前三人で海に出かけたときも二人は、勝手に漁船に乗り込んで

沖合いに出る、という暴挙に出てなぜか芦川まで謝るという事態に陥った
「……わかったよ、ちょっとだけな？」
しぶしぶと頷き、荷物を持って芦川は立ち上がる
「うむ、それで良い。じゃ、いきますか！」
「おー！」
犯人は犯行現場に戻る、なんてことわざがある
（俺は犯人じゃないけど……）
肩をすくめて、ノリノリで教室を出て行く狗飼と北条に置いていかれぬよう、芦川は早足で教室から立ち去った

『ＤＡＮＤＡＮバーガー』の周りは、刑事ドラマで出てくる黄色い立ち入り禁止のテープと、ブルーシートで覆われていた。外から中の様子を窺い知ることはできそうにない
「ちぇ、ここまで来たのになんにも見れないのかぁ」
「残念だねぇ」
狗飼と北条は至極残念そうだったが、芦川は内心ほっとした
『ＤＡＮＤＡＮバーガー』の周りには芦川たちのような野次馬は大勢いたが、芦川が見る限り、きのうの大男は見当たらなかった
彼もことわざ通りに犯行現場に戻っていたら、証拠を消すために自分も殺されるのではないかと、来るまでずっと怯えていた。
ともすれば、その大男がいないうちにここを離れるのが良い、芦川は切り出す
「な、なにもなかったんだし帰んないか？　なんなら狗飼の路上ライブとかでも」
「お、まことときゅん！オレのギター聴きたいの？」
狗飼の興味は、違うところに向かせられた。問題は北条だ。実は北条は狗飼と音楽の趣味がかなり違い、狗飼の路上ライブと称したクラシックギターの弾き語りもあまり好きではない

「えーそれだったら、みんなでカラオケとかの方がイイー」
案の定、北条は顔をしかめたがこれでいい。これでいい
「はっ！　わかってないなぁ！　七石のデパペペと呼ばれたオレの音楽を否定するだなんて！」
「デパペペは二人じゃなかったっけ？　どっちにしろあたし、あの曲調は好きじゃないや」
「言ったなー！　このバカのひとつロック覚え！」
「馬鹿にしたね？！　今ロックの神様を馬鹿にしたねっワンワン！？」
「ロックの神様ってなんですかー？　ジミヘンが十字架背負いながらアーメンハレルヤなんですかぁ～？」
芦川の予想通り、ふたりはコントのような喧嘩を始める。そうだ、このまま言い争いを加速ささて、ここから離れればいい。芦川は内心ほくそ笑む。が、予想外なことが起きた
「ほら、お前らここで喧嘩してても邪魔になるだろ……場所をせめて移そう――」
「うーん……ボクはロックもフォークも好きだよっ！」
「はいぃ？！」
綺麗なソプラノの声が芦川の後ろから聞こえる。芦川は嫌な予感を胸に抱きつつ振り返った
「やっほ、昨日ぶり」
そこには、昨日目の前に見える『ＤＡＮＤＡＮバーガー』で大男と拳銃で戦った少女――茨乃　蒼が首にかけたヘッドホンからＵＶＥＲｗｏｒｌｄの『ＤＩＳＣＯＲＤ』を音漏れさせながら笑顔で立っていた

「どういうことなのっ？！　まことときゅん！！」
狗飼がテーブルの向かい側から体を乗り出してくる。それを狗飼

の隣に座っている北条が無理やり席に戻した
　芦川達がいるのは、学校から少しはなれた場所にある、全国チェーンのピザ店に来ていた。サイズやトッピングを自由に選べて、かつ宅配ピザ店に比べ値段が格段に安く、最近人気が出ている。今日は近所のライバル店、『ＤＡＮＤＡＮバーガー』が営業停止になったこともあり、そこそこ見せも盛況だ。そのピザ店の二回の四人がけようのテーブルに、芦川たちは陣取っていた
『ＤＡＮＤＡＮバーガー』で再び茨乃と再開したときに、狗飼と北条に気づかれ「そのこ知り合い？」と聞かれ、適当にごまかそうとしたところ
「うん！　昨日友達になったんだ！」
　と茨乃が言ってしまい、場所を変えて追求されるに至った。当事者である茨乃は、芦川の隣で「なにも気にしてません」というような感じでチーズと黒胡椒がたくさんかかった『スペシャルマグナムピザ』を2ピース分くらいをまとめて頬張っている。
「でも人付き合い苦手ーとか言いながら私たち以外の、ってか面識無い女の子と芦川が仲良くなるのも珍しいよねー」
　北条がふにゃっとした表情で、向かいに座るピザを食べ続ける茨乃を見る。その視線に茨乃も気づいたのかピザを食べるのを一度やめ、北条の方を見る
「あ、食べる？　えーっと……」
「北条、北条カナだよー。貴女の隣の芦川のフレンドー」
「よろしくカナちゃん！　ボクは茨乃　蒼、同じく芦川　真君の友達だよ！」
　芦川は茨乃に名前を教えていなかったが、狗飼と北条の言動で名前を知り、それらしく振舞った。笑顔で北条にピザを半分差出、再びピザを食べガールズトークを始める茨乃を見て諜報員とかに向いてそう、と芦川は思った
「芦川？！　聞いてる？！」
「うるせぇ、聞いてるよ……昨日お前を待ってる間に相席になった

んだよ」
「相席？！」
狗飼が夫の浮気現場を追求するようなオーラを纏った時に、火に油をさすように、茨乃が話に入ってきて
「ボクが席埋まってて困ってるときに、ここ良いですよーって真君が言ってくれたんだ！」
　キラキラ笑いながら嬉しそうに話す茨乃とは対照的に、狗飼の顔は次第に曇っていった
「このアマ……オレの芦川を……」
「ホント、ワンワンは芦川のことになるとムキになるよねー……えいっ！」
「どふはっ？！」
　今にも茨乃に掴み掛かりそうな狗飼を北条が綺麗な左ストレートで吹き飛ばし、静止させた。北条、グッジョブ
「ところで、お二人の馴れ初めは？」
　ムクリと狗飼がすぐにおきて、手でマイクを持つようにして茨乃に迫る。チッ回復の早い奴め
「えへへー真君には、昨日『ＤＡＮＤＡＮバーガー』でパニックになっちゃってるときに、逃げるのを手伝ってくれたんだ！」
「いや、そこまじめに答えちゃ駄目だ、茨乃さん」
「芦川！　脱独身おめでとう！」
「違うっての！」
　三文コントも交えながら、特に問題もなく四人でピザを囲みながらグダグダと過ごした。途中、北条が「茨乃さんって学校どこー？」と聞き、茨乃は顔を若干引きつらせながら「バイトして働いてるんだー」と言っていたのを芦川は見逃さなかった
　午後６時を回ったあたり、北条が立ち上がった
「じゃ、あたしはこのへんでー。今日打ち合わせあるからー。茨乃さんまた遊んでねー」
「お、そうか。じゃあまた明日ー」

「うん！　カナちゃんまた遊ぼうぜー！」
「またね！　ジャップロッカー！」
「ワンワンは黙ってればかっこいいのになぁ」
北条は芦川顔を見合わせ、肩をすくめた。芦川に至っては両手を上げてお手上げのポーズをとった
北条が店から去った後、ふいに茨乃が口を開く
「ねぇねぇ。カナちゃんが『打ち合わせ』って言ってたけど、なんの打ち合わせ？」
「んー……さあねーオレも知らない」
ぶっきらぼうに狗飼が答える。彼も気だるげに立ち上がってギターを持つ
「じゃ、オレも帰るよ。明日は学校に顔出す予定」
「午後からとか言うなよ？」
「さっすが、芦川。オレのことをよく知っていらっしゃる」
「冗談」
狗飼も芦川と短い会話を終えたらさっさと店を出て行ってしまった
「あっはっは……ボクもしかして狗飼君には嫌われてるのかなぁ？」
狗飼が見えなくなったころに、茨乃が芦川に聞いてきた
「ああ、気を悪くしちゃったらごめんなさい。あいつ以外に人付き合い苦手なところあるんです」
「……」
きちんと芦川は答えたが、茨乃は不満そうな顔で芦川を眺めはじめた
「な、なんでしょう……？」
「うーん……できればカナちゃんや狗飼君みたいに、くだけた感じで話してほしいなーって」
茨乃は少し不機嫌そうに視線を外し、残っていたオレンジジュースを飲み干した
芦川は少しためらった後に口を開く。別にタメ口に抵抗があったわけではない。これから茨乃に質問しようとしている事を、本当に

聞いても良いのだろうか、と考えていたのだ。が、ここで何も知らない、では済まされないような気がした。だから口を開いて尋ねる
「じゃあ『茨乃』、昨日起こったことについて、どうしてああなったのか、何故君はあの大男に襲われたのか、それを教えてほしいんだ」
それを聞いた途端茨乃は今までの子供のような笑顔や、クルクルと変わる表情を消してうつむく。芦川もすぐには追及せずじっと待つ
そうして一分たったかたたないか、というあたりで茨乃が顔を上げ立ち上がる
「わかったよ、ボクの知っていることを全部話すよ。場所を移そっか」

芦川と茨乃はとっぷり日が暮れた緑化公園のベンチに腰を下ろしていた
この緑化公園は、あまりにも都市化が進みすぎて緑が少ない。自然の緑も必要、という市民の声を反映して、町のど真ん中に作られた公園だ
ただ公園というにはかなり広く、かなりの数の木も植えられている
この公園を基点として、町は東西南北に分けられ、芦川達の通う高校は「東」に区分される
しかし、公園に場所を移したものの、茨乃はなかなか話をしようとしなかった。いい加減話してもらおうか、と芦川が口を開きそうになったあたりで茨乃が重い口を開いた
「事の発端は１０年前のガス爆発災害だったんだ……いや、あの爆発はガスなんかじゃなかったんだよ」
「はぁ？」
「うん、信じられないと思うけど、最後まで聞いてほしいんだ」
茨乃はベンチから立ち上がると、首にかけていた音楽プレーヤーと一体になったヘッドホンから、狗飼の好きそうなデパペペの『２

声のインヴェンション』を流し始める
「１０年前、爆発が起きた遊園地、『セブンストーンランド』の地下にはある研究施設があったんだ。極秘のね」
「極秘の研究施設……大きな音を出す研究施設は、隠すのに手間取る……でもアトラクションとか歓声でそれ以上に大きな音が出たり、もともと住宅密集地から離れている遊園地は格好の隠れ蓑だったと」
「ざっつらいと、真君正解だよ。その目論見どおりその施設は誰からも発見されることなく、研究を続けられることができた」
話を聞きながら芦川は頭を抱えた。なんだか踏み入っちゃいけない領域に自分は入り込んでしまったようだ
普通ならあったばかりの女の子にこんな話をされても鼻で笑う程度だが、今回はその前にいろいろありすぎて、こんな話も真実に聞こえてくる。
茨乃は話を続けた
「そこでは誰から指示されていたか分からないけど、ある『武器』を開発していたんだ。それは持ち運びが簡単で誰にでも扱えるものだった」
「ウイルスとか……誰にでも撃てる小型の核ミサイルとか？」
「ううん、もっとボク達の日常に溶け込んでいているもの、だよ」
芦川はそれが何か分からずに、首をかしげる。自分たちの生活に溶け込んでいるもの？しいて言うなら食べ物やテレビか
なかなか答えが見つからない芦川を見かねてか、茨乃がコツコツと自分のヘッドホンを突いた。
芦川はそれを見て、その武器がどんなものかを察した。背筋に冷たいものが伝うような感覚を芦川は感じる
「その研究施設では『音』、しいて言うなら『音楽』を武器にする研究が行われていたんだ」
芦川はうなだれる。悪い予感が当たってしまった。確かに音楽は日常生活にすっかり溶け込んでいる。ある意味根幹とも言っていい。そんなものが兵器や武器に転用される、なんてことは考えられなか

った。
「話を続けるね？　でもその研究は、その『音楽』を『武器』に変える実験の失敗でストップしたんだ、それが……」
「七石市ガス爆発災害……」
「そうだよ、一般には『災害』ってなってるけど、あれは立派な『人災』だったんだよ」
　芦川は感じたことのない恐怖感を感じた。もし茨乃の言うことが事実であれば、政府やマスコミは嘘を言っていたことになる。もっとも政府が関与していない極秘の研究だったのなら、政府にも分かるはずもないが
　しかし、ある疑問が芦川の頭の中に浮かんだ。素直にその疑問を質問してみる
「でも、そこから茨乃が狙われる、ってことにどうやったらなるのか分からないんだ」
　芦川の中で最も有力な仮説は、この秘密を彼女が知ってそれの隠蔽のために追われている、といったものが有力だ
ただ、芦川と同じ年齢、もしくはそれより下っぽいのにそんな年齢の子供が、国家レベルな感じの出来事を知るのは難しいと思われた
「まだ話しは終わってないの！　……確かに『武器』を作る過程でこの街を焼け野原にすることになってしまったんだけど、実は実験は成功してたんだよ。『完全』に成功というわけではなかったんだけど」
　そういうと茨乃は、ヘッドホンから流れる音楽の音量を芦川にも聞こえるぐらいに上げた
　茨乃は手を肩の高さまで上げると、目を閉じる
　すると、茨乃の上げた手を覆い隠すように光が茨乃の手にまといつく。そして開眼すると、光が粒子のようになって砕け散るのと同時に、その手には大男と戦う際に使用した拳銃が握られていた
　芦川が見る限り、まるで魔法のようにしか見えなかった
「ボクはこの能力を『ウェポン』って呼んでる。あの爆発災害の後、

七石市の生き残った人の極々少数に、この『ウェポン』が宿ったの。昨日ボクたちを襲ったあの大男のガントレット――篭手も『ウェポン』なんだ」
芦川の中の疑問がひとつづつ解消される。もしあの大男の装着していた篭手が、そういうトンデモ武器だったら、あのひとりでに動き出す、篭手の説明できる

ここまで話を聞くと、また別の疑問が出てきた。芦川が昨日、大男から身を守るために出したあの武器は何だったのだろうか
「もしかして……あの時俺が出したあの剣みたいなやつも」
「うん、あれもウェポン」
やっぱりね、と芦川は予想が当たったことに半ばうんざり。だが、どこか嬉しいような気持ちになる。なぜかは自分でも分からないが、多分「自分専用の武器」みたいな感じで男心を揺さぶられたのだろう
茨乃は手を軽く振る。するとまた魔法のように手を光が覆い、光が消えうせると拳銃はどこにもなくなっていた
「どうやったら出せるようになるんだ？」
芦川は純粋に聞きたくて質問する。茨乃は久しぶりにひまわりのように輝く笑顔を見せて「いいよ！」と言った。笑ってるほうが可愛いと芦川は思ったが、口に出していうほど芦川は度胸がない
「やりかたは簡単、まず音楽を聴きます。ジャンルはどんなのでも良い、ただし自分の歌声は効果がなかったよ。今はボクのヘッドホンの音大きくしてるから、それを意識して聞いて」
「お、おう。音楽を意識な？」
芦川は流れている音楽に目を瞑って意識を集中させる
「ガチガチになって集中するのもアリだけど、少なくとも『あ、今音楽が流れているんだなー』って音楽を認識できればそれでオッケー！　ここまでは良い？」
茨乃が聞いてきたので、芦川は無言で親指を立てて「オッケー」

の意を示す
「音楽を聴き始めたら、自分の武器をイメージするんだ。真君なら手首に固定される剣『アームブレード』だね。ほかの武器をイメージしても出ないから注意！　じゃあ、武器をイメージできたら「出ろ！」って――」
「出ろ！！」
茨乃がいい終わらないうちに、叫ぶ
すると、一瞬で芦川の右手首におよそ４０～５０センチはあると思われる、片刃の剣が固定されて出現した
「えと……別に「出ろ！」って言わなくても、考えるだけでオッケーだよ！」
若干苦笑いで言う茨乃、芦川は少し恥ずかしくなってうつむいた。だが、茨乃はすかさずフォローする
「でもすごく飲み込みが早いと思うよ！　ボクなんか最初はキチンと弾が入ってない拳銃とか出てきてたから……」
「へ、へぇ……」
芦川は少し調子を取り戻し自分の手首についた『ウェポン』、アームブレードを眺める。よく見なくても切れ味がよさそうに見えた
「さて、注意しなきゃいけないのが、これは音楽が聞こえているときにしか使えないって事」
茨乃が音楽を止めると、芦川の手首にあったアームブレードは、砕け、解けていくように消えてしまった
「あ……じゃあ、音楽が止まっていて、かつ相手がまだ音楽を聴いていたらアウトって事？」
「そうだよ。実は大男と戦ったとき、僕のヘッドホンのバッテリーが切れたんだよ。だから相当ピンチだったんだ。でも真君が携帯電話の着信メロディを『音楽』と認識して、ウォポンを使えるようになったのは凄くラッキーだったんだ！　本当に助かっちゃったよ、ありがとっ！」
「え？！　うわっちょ！」

茨乃がぎゅっと座っていた芦川に笑顔で抱きついた。抱き疲れると分かるが、茨乃は線が細く、豊満な体系ではないため、本当にボーイッシュだ。だが、微妙に胸にふくらみがあり、それは芦川の体にも触れ、確実に芦川の脳回路をショートさせかけていた

茨乃はがっちりとだきついて離れそうにもなく、案の定女性耐性なしの芦川は顔が真っ赤になる。なんとかして話題を作り、茨乃を離さなければと芦川の残った理性が囁いた

「あ、あのさ、まだ茨乃が昨日の大男に教われた理由、聞いてないんだけど……」

「ああ！　ボクとしたことがすっかり忘れてたよ！」

茨乃はひょいっと芦川から離れる。芦川はほっとしたような、どこか惜しいような奇妙な感覚を味わった。気を取り直して、茨乃の話を聞こうとする

「実はボク達以外にもウェポンを使う人たちがいてね、そいつらが――」

「そこからは、俺が説明してやろう」

突然、公園の暗闇から、声がした。年は芦川達と同じぐらいの声だ。茨乃はすぐにヘッドホンから音楽を鳴らし、二挺拳銃を出現させ暗闇に向ける

「そこにいるのは誰っ？！」

茨乃はさきほどの笑顔を険しい表情に変え、拳銃を構え続ける

すると、暗闇から少年がゆっくり出てきた。

芦川達を襲った大男と同じ、学ランのような黒いコートを着ているが、そこから見える腕は木の枝のように細く、その顔はひどくやせこけていた

しかし、彼はそんな貧相な体に似合わぬ得物を『片手』でもちあげ、肩に担いでいた。

ガツン！とその得物が地面に振り下ろされる。鋼鉄でできていると思われるそれは、彼の身の丈と同じぐらいで、刃の部分にびっし

りと人間の『歯』が生えている『大剣』だった
「わが名は信詩、お前たちを葬りにきた」
彼が怪しく笑い、大剣をこちらに向け構えたのを見た芦川は、自分の日常が崩れ去るのを感じた

Ｔｏ　ｂｅ

ｎｅｘｔ　Ｔｒａｃｋ！

Ｔｒａｃｋ３－Ｌｏｖｅ　ｏｒ　Ｌｉｅｓ（前書き）

※前回までのあらすじ
再び『ＤＡＮＤＡＮバーガー』で遭遇した芦川と茨乃
二人は狗飼や北条と共に、楽しい時間を過ごす
芦川はその後茨乃に音楽を聴いている間だけ使える武器『ウェポン』と彼らが住む『七石市』を襲った災害『七石ガス爆発災害』がウェポンを作るための実験の結果だということを知らされる
そんな中、夜の公園に信詩と名乗るウェポン使いが現れ「お前たちを葬る」と宣告してきた……

Track3―Love or Lies

「にゃーはっはっはっ！　『お前達を葬りに来た』だってさ！　なにそれ、中二病？！」

得体の知れない相手を前に、急に茨乃は腹を抱えて笑い出す。芦川と信詩と名乗った少年はお互いに顔を見合わせる

「こいつ……ふざけてるのか？」

「悪い、この娘これが地なんだ」

いきなり敵と思しき、少年と和やかな雰囲気になってしまった。しかし、その緊張を破るかのように銃声が鳴り響き、信詩の頬を弾丸がかすめる

弾丸は茨乃の持つ二挺拳銃から撃たれたものだった

「あーあ、外しちゃった」

先ほどまで敵を馬鹿にしていた調子はどこかに消え、茨乃は拳銃を構えて敵を再び見据えていた

あわせずらいなぁ、と感じながらも芦川はポケットの中に入っている音楽プレーヤーに手を伸ばした。大剣を持った信詩とそれほど離れていないので、ここでイヤホンをつけ、音楽を流すという動作をしているうちに、あの巨大で不気味な剣に潰されるのは目に見えている。ただ茨乃の銃だけではあの剣を崩せそうにもなく、逆に近づかれたら受け止められずに切り伏せられるだろう

と、なると後は逃亡、これが一番生き延びる確立が高そうだ。少なくとも馬鹿正直に戦うよりは

「もしかして、考えてること同じかなぁ？」

茨乃は視線を信詩に向けたまま芦川に笑いかける。芦川も頷き一歩後ろに下がった、と思わせ、地面から土をすくい上げ信詩の顔に投げつける

「うひゃっ？！」

先ほどまでのクールな口調を崩し、目を覆った。流石に大きな剣

を担いだ状態では、すぐに防御に移れなかったようだ
「グッジョブ！　ボーイ！」
茨乃が叫ぶ。それを合図として芦川は信詩から離れるように駆け出す。一応、追いつかれたとき対抗できるよう、音楽プレーヤーを取り出しイヤホンを耳につける
「このまま人の多いところまで突っ走ろう！茨の……あれ？」
芦川が走りながら振り返ると、そこに茨乃の姿は見えなかった。まだ彼女は、一応後退しつつも二挺拳銃を信詩に向けて乱射していた
「ちょ！　戦うのか？！」
「もちろんボーイ！　相手、もろに目に砂入ったから、しばらくの間は的だよ！」
茨乃の言うとおり、信詩は大剣を手放し蛇行するように逃げ回っていた。考えてることはまるで違ったようだ
「なにやってんだよ！　今のうち逃げろって！」
茨乃の横まで戻り肩をつかむ。が、茨乃は冷たくそれをふるい落とし、拳銃を打ち続ける
「逃げたいなら良いよ、別に止めないさ。元々巻き込んじゃった感じだしね！」
「……っ！」
そんな風に言うなよ、自分の意気地無し加減が強調されるようで悔しかった
「貴様らぁ！　なめた真似をぉ！！」
信詩は視界が復活したらしく、再び大剣を発現させて茨乃と芦川の方へ向かってきた。
茨乃が撃ち続けるが、巨大な剣を盾のように構えながら向かってくるため、銃弾が跳ね返され効果がなさそうだった
「うらぁぁぁぁっ！！」
「あー！　もう！　分かったよ！戦うさ！ほっとけねぇもん！」
信詩が大剣を振りかざす。ええい、ままよ！と芦川は決心を固め、それに向かって走り出す

それにあわせて茨乃の銃撃がやんだ。畜生、あいつ狙ってたな、と毒づきながら芦川は音楽プレーヤーの再生ボタンを押して念じる
――来いっ！　ウェポン！

芦川は右腕に片刃のブレードを発現させ、信詩の大剣をガードする
「なっ？！　俺の『デッドソード』を防ぐとはっ？！」
「ずいぶんとカッコいい名前じゃないっすか……っ！」
とはいえ、大剣自体にかなり重さがあり、防いでいる右腕を左手で押さえながら、体全体で支えなければ、すぐ押しつぶされそうだった
「茨乃！　決めてくれ！」
「ライト！　マイバディ！」
その隙に茨乃は信詩の横に回り、二挺拳銃をピアノを演奏するようにリズム良く乱射する
「ちっ！」
信詩は芦川と交えていた大剣を振り払い、芦川を吹き飛ばすと同時にその動きを利用して茨乃の銃撃を回避する
「ゲッサム！　クソギークの割にはちょこまかとっ！」
「茨乃、お前口悪いっての！」
仮にも女の子とは思えぬようなスラングを吐いた茨乃に文句を言いつつ、芦川は立ち上がって、再びブレードを構える
信詩は間髪要れずに、芦川に向かって一直線に走り、大剣を大きく横に薙ぐ
「ぐっ……がっ！」
芦川はとっさにブレードで体を庇うが、勢いに押され大きく吹っ飛ぶ
地面に激突し転がりながら芦川は咳き込み、何とか立ち上がろうとするが吹き飛ばされた時に体を痛めたか、うまく立ち上がることができない
「ちくしょう……普段から運動しないのが祟ったか……」

「安心しろ、すぐに楽にしてやるさ……」
いつの間にか信詩は芦川のすぐ近くまで迫っていた。その口元は笑っていたが、どちらかというと「歪んでいた」のほうが正しい気がする
芦川は這って逃げようとするが、足を信詩に踏みつけられて動けなくなってしまった
「っつ！！　おい……人の事踏みつけちゃ駄目だって、学校で教わらなかったの？」
芦川は必死に強がって見せるが、その手は震えていて、目も泳いでいた。こんな状況に立たされてびびらないヤツの方がおかしい、と自分に言い聞かせるだけで精一杯だった
「さらばだ、力を持たぬものよ……また来世で――」
「させるかぁ！！」
信詩が剣を振り上げた直後、茨乃の雄たけびと共に何かが芦川の足を踏みつけていた信詩の足に突き刺さる
「がぁぁぁぁ？！」
信詩は芦川から離れ、自分の足を庇うようにうずくまる。芦川は茨乃の声をしたほうを見ながら起き上がる
茨乃が持っていたのは二挺拳銃ではなく、水中用と思われる小型の銛打ち機だった。そう、信詩に打ち込まれたのは「銛」だった
確か大男の時も茨乃のウェポンはライフルやショットガンのような違う形の銃に変化したのを芦川は見た
銛撃ち機も無理やりな考え方をすれば水中用銃、とも言えなくもない
「グッジョブ、茨乃助かった……」
「ううん！　助けるの遅くてごめん……でもボクたち初めてにしては連携が上手くいってるね！」
「同感だな……さて、この中二君をどうしましょう、茨乃先輩」
流石に刺さった銛を抜くことは信詩には出来ず、いまだその場でうめいていることしか出来ないようだった。しかし、信詩は顔を上

げ、狂ったように笑い始める。実際、芦川達は信詩が狂ったのかと思った
「はーっはっはっはっは！！　馬鹿がっ！　これからが恐怖のはじまりだよ……」
「はぁ？　なに言ってんだ？」
芦川は先ほど足を踏まれたときの怒りもあいまって、険しい顔つきで右腕のアームブレードを信詩の首元に突きつけた
「こいっ！　屍共よっ！」
「だから何を言って――」
少し変に芦川は思ったが、ときすでに遅し。芦川の足を何かが「掴む」
「真……それ……」
「ひぃっ？！」
芦川は慌てながらその足にまとわりついた『何か』を振りほどいた
芦川の足を掴んでいたのは動く死体。ファンタジーや映画の中のものでしかないはずの
――ゾンビだった

信詩がゆっくりと立ち上がる。否、自力ではなく二人の『ゾンビ』が彼の体を支えていた
「おいおい……マジかよ……」
「自分の目が信じられないか？　力なきものよ」
信詩の言うとおり、信じられなかった。まさかゾンビなんてものを相手が使えるとは。だが、茨乃の銃がコロコロ変わったりする現象や、大男の宙を浮いてひとりでに攻撃する篭手なんかがあるのだ、ゾンビくらいいてもおかしくないと芦川は無理やり納得する
「真っ！　周り！」
「はっ！　いまさら気づいても遅いぞ、銃使いの女！」
芦川と茨乃はあたりを見渡す。公園の茂みや、ちょっとした影からぞろぞろとゾンビが這い出てくる。その数ざっと５０は居そうだ。

ゾンビは芦川たちを確実に包囲していく
その包囲網の中にまぎれるように、信詩はゾンビに支えながら後退する
「はっはっは！　これが俺のウェポンの能力『死肉の行進』だ。俺は自分のウェポンで殺した人間を生ける屍として行使できる能力だ」
「殺した……人間？」
芦川の中で恐怖とはまた別の感情が芽生え始める
怒りだ。信詩の能力が彼自身の言うとおりであれば、信詩は芦川達と戦うために、おそらく前もってゾンビ用にと大量に人を殺していたのだろう
それも多分無関係の人たちを
「この……てめぇ！！」
「真っ！　怒るのは後にしよっ！まずはこいつらをなんとかしなくちゃ！」
茨乃がヘッドホンの曲を二曲分曲送りし、水中用銛撃ち機からライフルへウェポンを変化させ迫り来るゾンビ達をフルオート連射で遠ざけようとしていた
芦川も自分のイヤホンから流れている音楽に集中し、アームブレードをしっかりと発現させると近づこうとするゾンビを切り伏せるブレードは想像以上の切れ味で、のそのそと動くゾンビの首を切り落とした
「な、なんかすげぇぞ、俺のウェポン……いけるっ！」
芦川は戦意をあげたようで、力強くブレードを振るう
しかし芦川には剣術の経験などまったくなく、ただブレードのついた腕を振り回すような恰好となり、すぐに体力の限界がきはじめた茨乃の射撃もあたりはするものの、死体に銃弾を撃ち込んでいるようなものなので、ゾンビ達は一瞬止まっただけですぐに動き出してしまう
「力無きものどもよ、そろそろ諦めて死を受け入れたらどうだ？」
「お断りだよっ、ファッキンギーク！」

茨乃は近づいてきたゾンビを蹴り飛ばして、ほかのゾンビと衝突させ、時間を稼ぐ
芦川も必死にアームブレードを振るうが、包囲網は狭まるばかり。さらにゾンビは切り伏せても切り伏せても湧き出てくる。どれほどの人がこのために殺されたのか見当もつかない
「茨乃……ちょっと俺限界かも……」
「いっそ、蒼でも良いよ……ボクもさっきから真の事呼び捨てにしちゃってるし……」
「りょーかい……で、蒼。どうするよ？」
茨乃の服はゾンビにつかみやぶられ、ところどころ破れていた。芦川も、ゾンビ達の体に残っていた血の返り血をあび、体中血だらけだった
「さて……そろそろ、フィナーレだ……」
ゾンビ達の向こうのほうから、信詩の声が聞こえる
芦川は音楽プレーヤーを停止させ、アームブレードを『収納』した
（もう駄目だ……）
芦川はうなだれながら圧倒的な戦力差に絶望する
「終わりだな……やれ」
信詩が合図をすると、ゾンビ達が芦川達めがけて一斉に飛び掛ってくる
芦川はすべてを諦め、目を瞑った
「まだ終わってたまるかぁぁ！！」
ゾンビ達が一斉に芦川と茨乃に飛び掛ったとき時、可愛らしくも迫力のあるという矛盾していると言われてもおかしくなさそうな声が響き渡る
それは茨乃のソプラノのような声だった
茨乃は、素早くヘッドホンの曲送りボタンを何回も押す。すると、大きな筒のようなものが茨乃の肩に乗せられ、茨乃はそれをそのまま担いだ
「え？」

「え？」
疑問の「え？」は芦川と信詩から発せられた言葉だった
茨乃が構えたのは、戦場で戦車や建造物などを破壊する際に兵士が使う武器、ロケットランチャーっだった
「吹き飛べファッキーン！！」
茨乃は叫んだ後に、迫り来るゾンビ達に対してロケットランチャーの引き金を引く
が、もちろんそれは離れた目標に撃つ用のものであり、近距離で迫るゾンビにあたれば茨乃ごと吹き飛びかねない
「蒼っ！」
芦川がそう叫んだときには、発射されたロケット弾がゾンビにあたり、爆発した

ロケット弾の爆発のせいであたりを煙が覆う、信詩は煙を吸わないようにコートで口元を押さえながら煙が晴れるのを待った
近距離でロケットランチャーを撃てば、撃った本人も吹き飛ぶのは信詩にも分かりきったことだった。これでゾンビの数もだいぶ減ってしまったが、自滅してくれたのならばそれで良い
信詩は携帯電話を取り出し、ある人物に電話をかけようとアドレス帳を開き、電話をかけようとする、が、直前で思いとどまった
「ちょ、蒼押すなっ！転んじまう！」
「早く行ってよ！　うわぁ？！なんか踏んだぁ？！」
自滅したと思っていた芦川と茨乃の声が煙の中から聞こえたのだ
「くっ！　屍共、やつらを捕らえろ！」
「うわっ？！　見つかっちゃった？！」
それを最後に、彼らは喋らなくなり変わりに走って遠のく音が聞こえた
ゾンビは先ほどの爆発で大半がもう使い物にならなくなっていたようで、芦川たちを捕縛できなかった
煙が晴れた時にはもうすでに芦川たちはそこには居なかった

「ふっ、だが良い……もうお前たちはこの公園からは逃げられないさ……」
信詩は怪しく笑った後、生き残ったゾンビに支えられつつ、芦川達を追い始めた

「……やっぱどこも囲まれてるか」
芦川は茂みから顔をのぞかせて、公園の周りの様子を伺った
公園の入り口や、その周りはゾンビが周回しており見つからずに逃げ出すのは難しそうだった。また、暗いところで見ればゾンビはただゆっくり歩く不気味な人、と言ったところなので通行人を公園から遠ざけるのにも一役買っていた
「に、してもだ。ロケットランチャーはないだろ、ロケットランチャーは」
「えへへ〜」
茨乃は頬を書きながら照れた。いや、褒めてないっての
本来であれば茨乃のロケットランチャーの爆風で二人とも粉みじんになっていたはずだったが、芦川がすんでのところで茨乃を押し倒して体勢を低くし、ロケットランチャーの砲口が少しずれ、二人はどうにか生き延びることが出来た
芦川は音楽プレーヤーをいったん止めて、地面に腰を下ろしここまでの状況を整理する
場所はこの七石市の中心にあり、市で一番大きい緑化公園。木や二人が隠れているような茂みも数はあるが、隠れるのにも限界はある
ゾンビが公園の周り巡回しているため無理に脱出しようとすればおそらく気づかれる。朝まで隠れてやり過ごすのも、この公園の敷地内だけでやり過ごすのは不可能、よって却下
残った選択肢は信詩を倒し、彼のウェポンを無力化することぐらいだ。だが、またあのゾンビ軍団に迫られたら今度こそ芦川たちが死にかねない
「うわー……パーカーボロボロ……気に入ってたのにー」

真剣に考える芦川とは対照的に茨乃は、ゾンビとの戦闘でボロボロになった自分のパーカーを気にしていた
「しょうがないなぁ、脱ぐかな」
「ぶっ？！」
急に何を言い出すんだこの子は。芦川の思考が一気にピンク色に染まる
「こっ、こんなところでぬいじゃ駄目だろっ！」
「えーだって邪魔じゃん、ボロボロになったパーカーなんか」
「あ、そうですよねー……」
芦川は頭を抱える。やりなれていない喧嘩――というよりは殺し合いだが――の後だ。頭が混乱してテンパっているようだった。ぶんぶんと頭をふるって雑念を振り払う
「あ、真！　パーカーにスニッカーズ入ってたよ！　はんぶんこして食べようよ！」
茨乃が脱いだパーカーに入れていたスニッカーズを発見したようで、ニコニコ笑いながら
「……蒼って天然って言われたことない？」
芦川は先ほどからのあまりのマイペースさ加減に、少しうんざりしたのが半分、やつあたり半分で皮肉を吐いてみる
すると茨乃は一瞬驚いたような顔になったあとに、少し困ったように笑った
「あははーわかんないなぁ。記憶がないから、元々の自分の性格もわかんないんだよー」
芦川の表情が固まった。信詩に追い詰められたときに救ってくれたのは彼女だった。自分だけ逃げようとしてた時も、彼女は芦川を責めなかった。
もしかしたら今までの能天気な振る舞いも、芦川がパニックにならないためだったのかもしれない
「……」
「ほえっ？　ああ、そんなブルーな顔にならないでよっ！　かっこ

いいお顔が台無しだよー」
「いや……そのごめん」
「ほえっ？　あ、そうだなんでボクがあいつらに追われてるかまだ説明してなかったね」
　芦川の嫌味はあまり気にしていないようで、茨乃はすぐにいつもの調子を取り戻す
「実は一ヶ月前くらいからかなぁ、それまでずっとあの大男や、中二病ゾンビ君達に捕まってたんだー」
「捕まってた？！」
「うん、ただ捕まるまでの記憶がなくてね？　起きたときにはあいつらのアジトにいましたっ！みたいな」
　茨乃はニカッっと笑ってスニッカーズを半分に折り、どっちが大きいかを見定めながら続ける
「んで、大男とかに気づかれないように、こっそりこっそり逃げてきたの！　その時にあいつらのアジトにあったお金と、自分の記憶の手がかりになるかなー？と思ってウェポンの資料とか持ち出したんだ！おかげで追われる身になっちゃったけど！」
　茨乃はスニッカーズから目を離し、まるで「凄いでしょ、褒めて褒めて」と言わんばかりの視線を芦川にぶつけてきた
「あ、スニッカーズは小さいほうで良いぞ。じゃあいつどこであいつらに捕まったかも忘れちゃったんだ」
「うん、恥ずかしながら」
　茨乃は少し頬を赤らめつつ、正直に少し小さく割れたスニッカーズを芦川に差し出し、芦川もそれを受け取った
「ホント最初は不安だったよー。本当に全部忘れちゃってるんだもん。ボクが一体どこの誰で、どういうところに住んでいてどういうものが好きか。そういうの全部分からないんだもん」
「そりゃ、不安にならない人のほうが少ないだろ」
　茨乃のこの元気なところは、そういうことを不安に感じている自

分を隠すためなんじゃないか、と芦川はスニッカーズを齧りながら思案する
「それからはあの大男や中二病、あとなんか蜘蛛みたいな女の人とかがボクを追ってきたんだ。ボクはあいつらのことを『チーム』って呼んでる。あいつら同じ服着てるし、なにより連携しているみたいなんだ。北に逃げたらそこに敵が居て、逃げるように南に向かったら挟み撃ち、なんてこともあったんだよ」
茨乃は忌々しそうに話す。芦川も大男と信詩の他にもまだ茨乃や自分を狙う敵が居ることを知り、顔が険しくなる
「で、あいつらから奪ったお金もなくなり始めて、困ったなーって時にあのハンバーガー屋さんで真と会った」
「大男も、だけどな」
茨乃は「ほんとあいついらない子ー」と苦笑いしてスニッカーズを齧って、あまり噛まずに飲み込んだ
「これは多分推測だけど、チームはウェポン使いの力を狙っているんだよ」
「そりゃ、こんな武器があれば世界とまでは行かないけど、国一つは相手に出来そうだもんなぁ。このウェポン」
茨乃は頷いて続ける
「だけど分からないんだよ、ウェポンは万能だけどそれなら説得とか洗脳で仲間にすればいいのにボク達を殺そうとしている」
「あの大剣野郎から聞けると思うか？」
茨乃は苦笑いしながら、首を横に振る。「無理」ということだろう。多分彼女は試したことがあるのだろう
「てゆーかごめんね、本当に巻き込んじゃって」
茨乃は芦川の方を見ずに続ける
「別に俺は……」
「さっきも、戦わずに逃げてたら良かったのかもしれないのにさ。ボク真が仲間になってなんでも出来る気がしたんだよ。でも、結局

これだもん。本当にごめん」
茨乃の声はいつにもましてションボリしているように聞こえた。
芦川も茨乃のかおをみないようにそっぽを向く。こういう時気の利いたセリフでも言えればいいのだが、芦川には無理そうだった
少し沈黙が続く。芦川は沈黙が一時間にも二時間にも感じられた。実際は数分というところなのに
ふと茨乃がなにかに気づく
「あわっ！　ヤバイヤバイ！　バッテリーなくなったら大変だぁ！」
どうやら彼女は音楽プレーヤーの電源を入れっぱなしだったようで、すぐにヘッドホンについた停止ボタンを押す
その一連の行動を見て、芦川の頭の中であるアイデアが思い浮かんだ。今、芦川たちが信詩に打ち勝つためのアイデアだ。ただ成功する確証はないかなり博打なアイデアだが、今隠れているこの状況よりはマシだ
早速芦川は茨乃に提案する
「なぁ、蒼。信詩もウェポン使いなら音楽を聴いてなきゃあの大剣やゾンビは使えないよな？」
「ふぇ？　あ、うん。暗くてよく見えなかったけど、多分あいつも耳にイヤホンつけて音楽プレーヤーとかケータイで音楽聴きながら戦ってると思うよ」
芦川は頷く、それならばこちらにも勝機が見えてくる。迫り来るゾンビですっかり失念していた
物量では信詩のほうが圧倒的なのは間違いないが、それ以外はあまり芦川達と条件は変わらなかったのだ
「なぁ蒼、そういえばさっきお金ないって言ったよな」
「う、うん言ったよ？」
芦川は立ち上がって、音楽プレーヤーを取り出した
「作戦がある、もし上手くいったらいいバイト先、紹介するよ」
芦川は耳にイヤホンをつけ公園の中央へ向かうように、ゆうゆう

と歩く
　そばに茨乃はいない。傍から見れば自殺行為に見え、二人を捜索していた信詩にもそう見えた
「おい、力なきもの。銃使いはどうした？」
　芦川は振り返る。そこには信詩がゾンビに支えられつつ立っていた。応急手当でもしたのだろうか、血は出ているが足に刺さっていた銛はなくなっている
「お前なんか一人で十分そうだからな、逃がした」
　少し声を震わせながら芦川は答える。ちらりと信詩の耳元を気づかれないよう見る。茨乃の言った通り、カナル式のイヤホンを装着しており、イヤホンのコードは信詩のコートのポケットまで続いていた
「ふっ、彼女は公園の外を巡回している屍に見つかり、喰われているところだろう……」
「んなわけねぇよ」
　芦川は信詩のほうににじり寄る
「誰かを傷つけて、その傷つけたものを利用するようなやつなんかに、蒼は負ないよ。会ったばっかだけど、それは分かる」
　芦川は先ほどの震えた声とは違い、しっかりとした声調で信詩に語りかける。目には炎すら宿っていそうだった
「戯言を……世の中力だ！　概念で勝てるほど、この世は弱者に甘くない」
　信詩の後方からゾンビ達が這って迫ってくる。夜の公園の薄暗さで不気味さが倍増している
「あーいや、その数は卑怯だと思う……」
「数も力のうちのひとつだ、弱者」
　信詩の声を合図にするように、ゾンビ達が芦川のほうへ向かって
「駆け出す」
「えっ？　ちょ走れるのかよぉ！」
　芦川は戦わずに、一目散に逃げ出す

流石に大量のゾンビ相手に、消耗した状態で一人で戦うのは自殺行為だった
「あいつ……なにを考えているんだ？」
その芦川の行動の異様さには信詩も気づき始めていた。あまりにも脈絡がなさ過ぎる
先ほどまであんなに連携していた二人が、離れて行動しているのも不可解だ
「罠かもな……ん？」
イヤホンに繋がっている信詩の携帯がバイブレーションで震える。信詩の携帯電話は普段鳴らない。友人が居ないからだ。だが今電話をかけてきた人は別、強いて言うなら上司と言ったところだ
信詩はイヤホンをつけたまま、会話に入る
「も、もしもしリーダーか？」
『やぁ、信詩。今日も月は君を照らしていてくれているかい？』
電話からは優しくもあり、神秘的な声が聞こえてくる。信詩の言動は少なからず、この電話の向こう側の人物の影響がある
「ええ、リーダー。今日も力と希望ある私に月は輝いてくれます」
『そうか、それは良かった……でもその割にはまだ仕事が終わっていないようだね』
信詩は絶句する。確かに茨乃や芦川と戦い始めてから一時間以上たっている。その前にも戦うためのゾンビ『作り』でかなり時間を使っている。そろそろ終わらせなければ、電話の向こう側の相手はさらに苛立つはずだ
「ま、待ってくれリーダー、今一人追い詰めている。そいつだけでも今すぐ片付ける」
『……そうか、じゃあ頑張ってくれ。君を応援するよ』
それだけ言うと、電話は切れた。信詩はほっと息をついた
口調こそ優しいものの、この電話は『早く終わらせろ』という脅しでもある。例え罠でももう宣言してしまった以上は行くしかない
そろそろ足も痛みが引いてきた。信詩はゾンビの支えから離れ、

芦川が逃げたほうへ足を引きずりながら向かった

「ちっ……やっぱ無謀だったか」

芦川は公園の隅の水のみ場までゾンビ集団に追い詰められていた。近くには公衆トイレがあり、そこに立てこもるという選択肢もあったが、あえてそれはしなかった

ゾンビ達が包囲網を狭めてくる。その目に生気はなかったが、迫力はあった

「うへぇ、これトラウマになりそうだ」

せめて、パニックにならないようにと茨乃のようにコミカルな態度を取ってみるが、恐怖心は消えずに、膝はお笑い番組でも見たかのように笑っている。いっそ寒いギャグでも言えば止まるだろうか

「よくあがいたな、力なきものよ！」

ゾンビ達が道を開け、そこを大剣を持った信詩が足を引きずりながら近づいてくる

「足、ボロボロなのによく頑張るな」

「当たり前だ、力あるものは傷ついても立ち上がる」

信詩は歩みを止める。大剣で芦川を斬り殺せる範囲に入ったからだ

「よく頑張ったのはお前のほうだ、力無きもの。この俺を相手にしてここまで生き残ったのはお前が初めてだ」

「そりゃどーも」

「最後に何か言いたいことはあるか？」

信詩は大剣を両手で持って振りかざす。振り下ろされれば芦川は頭からバックリ割れて死ぬことになる

芦川は俯き、小さく口を開く

「……お前こそ頑張ったんじゃね？」

「は？」

芦川はここぞとばかりに良い笑顔で顔を上げ、指を銃の形にして信詩に向ける

「蒼、ＢＡＮＧ！！」

「Ａｌｌ　ｒｉｇｈｔ！　ｍｙ　ｂｕｄｄｙ！！」
それを合図に茨乃が公衆トイレの中から出てきて、先ほど使ったロケットランチャーのウェポンを構え『地面』に向けて発射した
ロケット弾は公園のやわらかい地面をめくり上げ、その下にあるコンクリートにあたって炸裂し、さらに下にある『水道管』を破壊した
破壊した水道管が飲み水か下水かは分からないが、そこから勢いよく噴出す『水』は芦川や彼を囲むゾンビ達、そしてう信詩を飲み込んだ

「故障させる？」
「うん、俺たちはある意味イーブンだったのを忘れてた」
数分前、ゾンビや信詩達から隠れていたときに芦川は提案した
「あのゾンビも、細い腕でも扱える大剣型ウェポンも脅威だってのはわかる。でもその大元は『音楽』なんだ。だったらそれを止めればいい」
芦川は一時停止になっていた音楽プレーヤーの電源を止めた。茨乃が落ち着いた芦川の様子とは対照的におろおろしながら芦川に尋ねる
「そんな簡単に言うけど結構それ難しいって……相手にとっても音楽プレーヤーは命綱なんだよ、そうそう簡単に壊しにはいけないって」
「じゃあ、俺も巻き添えにしたら？　と考えるんだ」
芦川は地面に公園の簡単な見取り図を書く、その中でひとつ大きく丸を書く
「公園のはしっこに公衆トイレと水飲み場があるんだ。まぁ、どんな公園にも水飲み場はあるだろ？　ここまであいつらをおびき寄せる。隅っこに追い詰めさせたと見せかけるんだ」
「お、おびき寄せてもゾンビだけで中二病はこないかもよ？」
「いいや、絶対に来る。あいつはそういうやつだ。自分が強い主人

公でありたい、そういう願望があるんだ、あいつには」
　芦川は断言する。少なくとも死体の確認にはくるはずだし、なにより独りよがりで顕示欲の強い信詩なら来るだろう、というのが芦川の考えだった
「続けるよ、で俺が信詩の前に出て時間を稼ぐから、その間に蒼は気づかれないように公衆トイレで待ち伏せしててくれ」
「う、うんそれから？」
　芦川は先ほど書いた見取り図に、公衆トイレと水飲み場とを一本の線で結ぶ
「トイレと水飲み場があるって事はそこには少なからず『水道』があるわけだ。これをさっきのロケットランチャーで地面ごとふっ飛ばせば、すごい量の水が出ると思う、それこそ『機械が壊せる』ぐらいの量のを。その水に俺ごとあいつを巻き込んであいつのケータイかプレーヤーかは分からないけど、音楽の大本を破壊する」
「で、でもそれじゃあ真の音楽プレーヤーも壊しちゃうよ？」
「ああ、だから攻撃役は任せた」
　女の子に攻撃役を任せるのは気が引けるが、囮にさせるよりは良いはずだ
　芦川は電源を切った自分の音楽プレーヤーを茨乃に握らせた
「え？　あ、これ……」
「これ、父さんの形見なんだわ。だから出来れば壊したくないわけ、古い機種だから修理も出来ないわけだし」
「駄目だよ！　ウェポンなしであいつの前にいくのは！　壊れるの嫌だったらボクのヘッドホンでも――」
　芦川は口元だけ笑って首を横に降り、小さく「頼む」と言った
「ウェポンが無くても走ることはできる。親からもらったこの足が今俺の使える最強の『ウェポン』だよ」
　芦川は準備体操をするように伸びる。内心めちゃくちゃ怖い。今にも逃げ出したい気分だ。

だけど、記憶もなしに得体のしれない相手と戦う少女が居るくらいだ。彼女が今まで一人でつらい思いや怖い思いをしてきたのなら、誰かがその半分でも背負ってあげても良いんじゃないか。今はそれをやるのは自分なんだ、と芦川は自分を奮い立たせる
お人好しっていうんだろうなぁ、と芦川は心の中で呟いた
「バイト先！」
「え？」
茨乃が涙目になりながら芦川に指を突きつける
「絶対紹介してねっ！　死んで教えられませんっ！てのは無しだよっ！」
「そっちこそ、プレーヤー無くさないでくれよ？」
いつもと調子が逆転したように、芦川はニッと笑ったあと茂みから飛び出した

「くそっくそっ！　動け！　動けよ！」
犬のように体を震わせて、水を少しでも乾かそうとした芦川が最初に見たのは、必死に携帯電話のボタンを押す信詩の姿だった
どうやら芦川の読み通りに、彼の音楽の元は潰すことが出来たようだ
周りを囲んでいたゾンビたちも信詩のウェポンが使えなくなったからか、ただの死体になって周りに倒れるばかりだった
「終わりだ、もう」
芦川は呟くように信詩に語りかけたが、信詩の方は聞く耳持たずでうわ言を言いながら動かない携帯電話をずっと操作している
「嫌だ……死にたくないしにたくないしにたくないしにたくないしにたくないしにたくないしにたくない」
「お、おい落ち着け。まだお前には聞きたいことが」
芦川がパニックになっている信詩に近づこうと歩みを進めると、信詩はコートのポケットから何か鈍く光るものを取り出した
ナイフだ。小ぶりだが人を刺し殺すには十分なナイフを信詩は持

っていた
「俺は死にたくない！！　お前が！　お前が代わりにしねよぉぉぉ！！」
信詩はその場でナイフをめちゃくちゃに振り回す。とても近づけそうになく、芦川は足を止めた
「信詩お前……」
発狂する信詩に芦川は哀れみすら感じ始めた。このまま優しい言葉でもかければもしかしたら仲間になってくれるのではないか
「な、なにも命まではとらないって、話を――」
「お前の、お前のせいだぁぁぁぁ！！」
芦川は信詩に言葉をかけたが、先ほどと同じで聞く耳を持たない。それどころかナイフを構えて芦川の方に走り出してきた
「ちょ、とまれ！　やめろ！」
「うわぁぁぁぁぁ！！」
芦川は避けようとするが足がなぜか動かない
理由は分かっている、リアリティがあるからだ
今まではゲームや小説にしか出てこないような大剣やゾンビが相手だったから、ある程度心の中で割り切れていたのだろう。だがナイフは、ただなんでも無いナイフをもった人間が叫びながらこちらに走ってくる
日常生活では有り得ないが、今までの出来事に比べれば日常により近く、恐怖をより一層感じさせて、体の動きを鈍らせていた
（あ、やべぇ……こわ、足動かないぞ）
せめて、体を守るように腕を前に掲げるのが精一杯だった
信詩とナイフが芦川の体に迫る。
あと１５センチ
１０センチ
９センチ

5センチ

2センパン

ナイフがあとほんの数センチまで迫ったところで、乾いた音が鳴り響きナイフの接近が止まる

芦川が盾にするようにしていた腕から目を開くと、ナイフを持ったまま硬直している信詩がいた。鬼のような形相で、まるで一時停止しているかのように硬直していた。

「なんだ……？」

信詩は口元から血を流しながら、ポロリとナイフを地面に落とす

「なんで……こんな……」

そう言うと信詩はその場に崩れ落ち、立っている芦川のほうを見る

「殺さないって言ったじゃないか……お前も、嘘吐きなのか……？」

よく見ると信詩の着ているコートの胸のところから血が染み出している

「ボクも出来ればこうはしたくなかったな」

茨乃が拳銃を持って倒れている信詩に近づく。ヘッドホンを頭にしっかり装着して、相手に音楽が聞かれないようにしている。銃口から煙が出ているところを見ると、芦川が刺されそうになったとき、信詩を撃って静止させたというのは容易に想像がついた

「嫌だ……死にたくない……」

信詩は首だけゆっくり動かし、茨乃の方を見る。目は涙で溢れ命乞いをしているようにも見える

が、そんな信詩を見る茨乃の目は冷たいものだった。茨乃は倒れている信詩の脇に立つと拳銃の銃口をまっすぐ信詩の頭に向ける

「多分、君が殺して作ったゾンビも同じ事を考えたと思うよ」

そう冷たく言い放つと茨乃は拳銃の引き金を引いた

「これ、返すね」
しばらく静寂が続いた後、茨乃は自分のウェポンを消して芦川から預かった音楽プレーヤーを差し出した
「あ、ありがとな」
芦川はそれを受け取ると、それを少し強引にポケットにねじ込んだ
「あはは……ボク、人殺しになっちゃった」
力なく茨乃は笑う。自分の行ったことの嫌悪感か、しゃがみこんで顔を隠す
「前回は店の中の人、今回は俺を助けるためだった」
芦川は必死にフォローしようとする。が、どうやってもフォロー仕切れない。悪人とはいえ、人を殺した罪悪感は拭いきれるものじゃない
「真を巻き込んじゃったし、ボクが居なければハンバーガー屋さんでも人は死ななかったはずなんだ……ボクさえ」
「そんな事言わないでくれよ」
芦川は言葉を搾り出す。アニメの主人公なら一言「甘えた事言うな！」と叫んで、ヒロインを励ますのだろうが、芦川は自分にそんな資格はないような気がした
だから、せめて出来ることを
「まだ、バイト先も紹介してないし、そもそも蒼が居なかったら俺はウェポンも使えなくて、あいつらに殺されていたかもしれない」
蒼がゆっくりと顔を上げる。その目は必死に涙をこらえていて、指で突けば今にも決壊しそうなほどだった
「なんか言うの恥ずかしいけど割と大事なんだよ、蒼がさ。まだ会って二日しかたってないけど、狗飼達とも一緒にだべったりしたし、そのなんだ？　もう友達だと思うんだ。だから、その居なければとか言われるとなんか寂しい」
すごく独りよがりな持論だが、今の芦川にはこれが精一杯だった
もうどうにでもなぁれ、心の中で呟き芦川が目を閉じると、何か胸に衝撃があった

茨乃が立ち上がって芦川に抱きついたのだ。茨乃は芦川の胸に顔をうずめて必死に声を押し殺しながら泣いていた
覚悟はしていた、だがいざ直面すると胃が重くなるような感覚に襲われる。
芦川は自分が非日常に足を踏み入れ、もう戻れないことを知った。だけど、その中でも救えるなにかがあるのなら
抱きつく茨乃の頭を撫でながら、芦川は自分に気合を入れ直した

「彼は死んじゃったか……」
フードを被った少年が暗い路地に差し込む月を見上げながら呟く。彼の顔はフードで隠れ、完全には見えない
その脇には小学生ぐらいの男の子が携帯ゲーム機で遊んでいた
「の、割にはむごいことをよねぇ、貴方も」
路地のさらに暗いところから、髪が恐ろしく長い女が出てくる。歳にして２０歳直前といったところか。彼女は茨乃が言うところの『チーム』の人間が来ている黒いコートを着ていた
フードの少年の脇に居た男の子がその女に気づくと、怯えた表情になりフードの少年の陰に大急ぎで隠れた。その様子を見た女は大きく舌打ちをする
「黒栖（くろす）、そんな風に言うことないじゃないか。信詩はどちらにしても死んでもらう予定だったじゃないか」
フードの少年は怯えた男の子の頭を安心させるように、頭をなでる
「ウェポンを集約して、ひとつの武器にする……それは分かるの、だけどねぇ」
黒栖と呼ばれた髪の長い女は忌々しそうにフードの少年を見る
「信詩は黒栖、おぬしのお気に入りだったからのぉ」
路地に窮屈そうにしながら大男が入ってくる。『ＤＡＮＤＡＮバーガー』で茨乃を襲撃した大男だった
「神崎、お疲れ。彼女には会えたかい？」

「おう、嫌な顔しておったが、弟の名前をちらつかせたら喜んでやるといっておったぞ」
大男の名前は神崎というらしい。彼は不器用に笑いながらフードの少年に自分の仕事を報告する
「で、リーダーこれからどうすんの？」
黒栖はイライラしつつ、フードの少年――リーダーに支持を催促する
リーダーはフードから口元だけ覗かせ、優しく微笑む
「急がなくてもいいよ、事は思い通りに進んでいる」
フードの少年はフードをゆっくり外す。しかし月が雲に隠れ、その顔は暗闇に隠された
「君たちにまた会いたいな、蒼に真君」

Ｔｏ　ｂｅ　ｎｅｘｔ　Ｔｒａｃｋ！！

Track4－Tom　punks（前書き）

※ラノベっぽい文章注意
※一章が長めです

・前回までのあらすじ
夜の公園でウェポン使いの集まり『チーム』のメンバー信詩（しんじ）に襲撃された芦川と茨乃。一度は彼の死者を操るウェポンの能力に圧倒されるが、それを打開し、彼を倒すまでに至った。だが、それは戦いの始まりでしかなくて……

Track4 ―Tom punks

諸兄はきっと三つ指ついて自分を迎えてくれる若妻、のようなものにあこがれている人も居ると思う。
だが宣言しよう、実際いたら反応に困る。素直には喜べない
「おっかえり真っ、ボクにする？ボクにする？それともボ――」
芦川は無言でドアを閉める
芦川が住んでいるのは芦川や狗飼、北条が通う学校から1キロほど離れたところにあるボロアパートだ。
ただボロとは言えど風呂はついているし、トイレも共同ではない。ただ日当たりが悪く、得たいの知れない何かが『出る』という噂もあいまって、若者に人気の町にしては安い家賃になっている
芦川は学費と生活費、家賃のおよそ70％を親戚からもらいながら『一人』で暮らしていた
そう過去系だ。芦川は再びアパートの玄関を開ける
「うーひどいと思うよー」
「やかましい、あんなパフォーマンスはラノベの中だけで十分なんです」
芦川は中でむくれている茨乃を尻目に、アパートの自分の部屋に入り、ドアを閉める
廊下にキッチンがあり、その後ろにトイレと風呂がある。その奥に人が三人も入ったら満員になってしまいそうなリビングがあり、二年くらい貯金して買ったテレビとフリーマーケットで買った小さいテーブルが置いてある。それが芦川の部屋の全てだった。ここに五年芦川は住んでいる
「そうだ、バイトの面接どうだった？」
芦川は制服のブレザーをハンガーにかけ、壁に刺してある釘にかける
「ちょっとーそういうのもやるってばー」

「自分でやってこそ、なんです。で、どうだった？」
茨乃はちょっとの間むくれていたがすぐに笑顔になる
「親方即決だったよ！　『あいつが薦めるなら大丈夫だろ』って！」
「食品扱う仕事してるならもうちょいちゃんと管理しようぜぇ！？」
芦川は今ここにいない元上司に叫んだ

時間は一週間前、信詩との戦いの後に遡る。公園の騒ぎにかなり遅く気づいた警察のパトカーや
ら、野次馬やらを押しのけるように公園を離れた芦川と茨乃
芦川の勧めで近くにあったファーストフード店に入り、少し落ち着くことにした
芦川はびしょぬれになったブレザーを脱ぐ。水を盛大に被ったおかげで、こびりついた血は取れたが、風邪を引きそうだった
「ふぃーカプセルホテル開いてるかな……最悪ネカフェでもいいかな……」
コーラを飲みながら茨乃がぼやいた。彼女は記憶喪失で、かつウエポン使いのチームから逃亡中の
身、更にチームから奪った資金も尽きかけ。ろくなところには泊まれないことが伺い知れる
「あの……それで提案なんだが」
「ほえー」
茨乃は脱力し、テーブルに顎を乗せ芦川のほうを生気のない目で見る
芦川はしばらく押し黙っていたが、勇気を振り絞るように口を開く
「バ、バイト先紹介するって約束したし、その給料入って部屋借りられるくらいになるまで俺の部屋来ていいぞ、狭いけど」
芦川はちらりと茨乃の方を見る。案の定、唖然とした表情を茨乃は浮かべていた
うっわ、やっちまったうっへぇ、芦川は頭を抱える。これは引かれた確実に引かれた。「キモッ！　いきなりそれはないよ！この犯罪

者予備軍！」みたいな罵倒も甘んじて受けようじゃないか、なぁ全俺。そう思いつつ、涙をうっすら目元に浮かべたときだった
「いいの？！　本当？！」
茨乃がテーブルから乗り出すように聞いてきた。芦川は少し身を引く
「あ、うん。蒼が嫌じゃなければの話だけど……」
「ヤッフー！　屋根のあるところで寝れるー！」
そこまで喜ぶか、と内心呟いたが芦川は思い出す。彼女は普通の女の子じゃなかった
自分の命を狙う敵に拳銃をぶっ放し、口汚い外国のスラングを吐くような子だった事を

ファーストフード店から出た後、茨乃が荷物を入れていたコインロッカーに寄って、荷物を全て持ってから、芦川のアパートの部屋に帰った
「はー！安心して寝転べるって幸せだねーまことー」
蒼は荷物の入ったボストンバッグを下ろすと、狭い部屋でごろごろ転がる。普通あったばかりの男の人の家で安心して寝転ぶ人はいないんですよ、と言いかけたのを芦川は飲み込んだ
「でもさー真親切すぎるよー、この後が怖いくらいだー」
自覚はあるんだ、と思いつつびしょぬれになったブレザーを洗濯籠に押し込む
「まぁ、昔色々あってさ。それからはなるべく人に親切にって心がけてる」
これは本当の事だった。茨乃は「ふーん」と言うと急に正座になって
「えー慣れないところもあると思うけど、よろしくねっ」
と、にっこり笑いながら首を傾けた
芦川は顔を真っ赤にしながら茨乃の方を見ないようにした。この先平常心を保ちながら生活できるだろうか。芦川は心に不安を残し

つつ、茨乃との生活を始めたのだった

「カモンカモン、誘惑のない遊びなんかつまらないから～」
小さい台所で芦川は歌を歌いつつ野菜をきざみ、フライパンに落とした後肉と一緒に炒める
一人暮らし生活が長いため料理も上手く、かつインスタント食品よりも安く作れる自信が彼にはあった
「料理も手伝わせてくれたっていいのにー」
壁に寄りかかりながら茨乃がむくれながら料理の様子を見てくる
「キッチンは俺のテリトリーだから、ああでもそろそろ箸とか並べたりしてくれると助かる」
「イエスマム！」
「口を開くときははじめと終わりにサーをつけなっ！」
「サーイエスマム、サー！」
茨乃は二人分の箸と水が入ったコップ、リビングまでトテトテと運ぶ。戻ってきたと思ったら、炊飯器から二人分のご飯をよそって、またリビングに運んでいった。最初こそ不安があったが、二人の共同生活は思ったよりも上手くいっていた
芦川は皿に野菜炒めを盛り付け、茨乃の待つリビングに運んでいく
「今日のディナーは特売の豚肉の野菜炒めになります」
「イエー！　今日もご飯が食べられることをファッキンクライストジーザスに感謝！」
「「いただきます！」」
二人で同じ皿の野菜炒めをつまみながらご飯をかきこむ
「美味しいよ、真！　マザファカーブッダも思わずお父さん掘っちゃうくらいに！」
「それはそれは、でも食事中にスラングはやめようなー」
茨乃は遠慮なしに野菜炒めを口に運ぶ。その様子はどちらかというと少女、というよりは小学生くらいの、育ち盛りの男の子と言ったところだ。そういう所もあるから、芦川は変に意識することもな

く生活できているように感じる。それに――
「あ！　ちょ、俺の分も残せよお前！」
「サー箸を止めているほうが悪いのですサー！」
「それはもうやめていいから！」
おかずの量は半減するが、賑やかなのがなにより芦川には嬉しかった

だが、そんな生活でも芦川がまだ戸惑うことがひとつある
「真、今日先にお風呂入っていいー？」
「え、あ、うん良いぜ」
「ヤッフー！じゃあ先はいりますねー！」
茨乃はジャージと下着を持って風呂場に駆けていった
そう、茨乃と住み始めてからこの時間が。芦川にはこの時間が何より苦痛、いや正確には煩悩の時間となった
「あーいかんいかん、余計なことを考えるな、芦川　真！」
芦川は座禅を組んでじっと耐える。己の左肩辺りから聞こえる「覗いちゃえＹＯ！」「バレなきゃオッケー！」という悪魔の囁きを必死で押しのける
風呂場のほうからサカナクションの「ネイティブダンサー」を歌う茨乃の声と水音が聞こえてくる。なぜだか非常に生々しい
茨乃はあまり女らしい、という体格ではなかったがその裸体を想像すれば、芦川の頭がオーバーヒートするには充分だった
「ま……まこ……まことー！」
「は、はいっ？！」
いつの間にか茨乃は風呂から上がっていて、ジャージ姿で芦川の背後に立っていた。まだ髪は微妙に濡れている。が、芦川は彼女がキチンと髪を乾かしたり、普通の女の子のように手入れしているところを見たことがない。そんな感じだから毎朝「頭がメルトダウナー！」と寝癖だらけで起きる
「うわぁ？！　びっくりさせちゃった？　えと、お風呂あいたよー」

「あ、あうん。じゃあ俺入るわ……」
芦川はぎこちない動作でパジャマを持って風呂場へ向かう

芦川は湯船にどっぷりと浸かる
信詩との戦いから一週間、その後は特に敵の襲来もなく、のんびりと過ごしていた。まるで何もなかったかのように
数日間は芦川も家の近くに敵が来ていないか、と神経を張り巡らせたがそんなことはなく新聞の勧誘がしつこいくらいだった
だが、茨乃の話ではまだ信詩達ウェポン使いの『チーム』に人がいるらしく、いつ襲われてもおかしくはないらしいとの事だった。茨乃が前に捕まっていたアジトはもうもぬけの殻らしく、チームに攻め入ることは出来ないらしい。
もっとも攻め入ったとしても、たった二人では返り討ちが関の山だろうが。かといって警察に言っても信用してもらえないことは確実だった
先日の信詩との戦いの後では、緑化公園におびただしい数の死体が転がっている状況になり案の定警察も出動したが、テレビ等では「数百人規模のネットで呼びかけられた自殺ＯＦＦ」ということで片付けられていた。いくらなんでももうちょっと捜査するだろ、とは考えたが思えばもう警察がどうこうできる問題ではない、もはや国家とか政府とかのレベルのお話だったのを失念していた
そもそも数百人の死体（しかも斬られたり、銃で撃たれている死体の）が転がる状況から犯人を捜せ、というのは無理難題だ
今回の件も国の中の誰かが隠蔽しようとしていたら、そう考えると恐ろしいものに首を突っ込んだなぁ、と芦川は肝を冷やす
かといって自分からはどうすることも出来ない。ただ事態が変わるのを待つしかない、というのがもどかしかった
ふと、芦川は思い出す
（そういえばこの湯船、蒼が入った後なんだよな……）

そう考えてしまったが最後、芦川の顔が真っ赤になる。意識しないようにしていたのに真面目なことを考えていた反動でついつい、邪まな妄想に走ってしまう
「まことー」
「は、はいっ？！」
風呂の曇りガラスのドアの向こうから茨乃の声が聞こえる
「今からテレビで『地球最後の女、ディレクターズカット版』があるんだけど見ても良い？」
どうやら茨乃はテレビで放送する映画を見たいようだった。特に問題はないので許可する
「ああ、良いけど……」
「ありがとー！」
茨乃は嬉しそうにその場から離れていった。芦川は自分に対し、あきれたように呟く
「ぜんぜんこの生活なじめてないじゃん、俺」

言葉で言い表せないほどに、体が熱い
何とか目を開けて、横転した車から這い出る
ほかにも気にかけることがあった筈だったが、自分の体を案じるように本能のようなものが彼を突き動かす
だが、目に入ったのは地獄のような光景だった。赤く染まる空、燃え広がる炎、そして形を失っていく自分達の町
周囲は逃げ惑う人々の怒号と悲鳴で溢れていた
「……真？」
自分が先ほど這い出た車の中に、自分を呼ぶ声がする。父親だ
「おとうさん！　……っ」
なかなか動かない体を必死に動かし、這って車の運転席の窓まで移動する

「ははっ……いやぁ遊園地まだやってるかなぁ……」
父はうわ言のように呟く。真には涙を必死にこらえつつ、首を横に振ることしかできなかった
父はゆっくり助手席に目を向けた後、苦笑いする
「困ったなぁ……真、お母さんとお父さん、ちょっと動けそうにないんだ」
父は額から血を流しつつ、なんとか右手を動かし、何かを取り出して真に差し出す
「ほれ……今日遊園地いけなかったお詫びだ」
真は父が差し出したそれを手に取る。それは父が使っていた音楽プレーヤーだった。ホイール式の2年前のモデルの音楽プレーヤー
「とうさん、早く車からでようよぅ」
「遊園地ごめんな……ごめんな……」
父はそれだけを壊れたレコードのように繰り返し呟く
何とかしなければ、何とかして父をひっくり返った車から出してあげなければ
真は傷む体を必死に使って立ち上がり、運転席のドアを開けようとする。だが、開かない。車の一部がひしゃげていて、ドアが開かなくなっているのだ
子供の力ではどうにもすることが出来ない
「だれか……だれか手伝ってください！」
真は声を張り上げて、助けを求める。だが、真の周りで逃げ回っている人々の耳には届かない
「おとうさんが出られないんです！　たすけてください！」
何回か叫んで、何人かはこちらの声に気づき立ち止まったが、すぐに走り去ってしまった。当たり前だ、今真の周りにいる人々も自分が逃げるのに必死なのだから
「だれかっ！　だれか助けてくださぁぁぁぁぃ！」
あらん限りの声で真が叫んだ瞬間、真の体が突如吹き飛んだ。爆風にあおられたのだ

真は消えいく意識の中で爆発し、炎に覆われる父達の乗った車の姿を捉え、そして意識を手放した

「……っ！！」

芦川は布団から飛び起きて、あたりを見渡す。照明を消した自分の部屋だ。町は燃えても居ないし、死に掛けの父が乗っている車も見当たらない。先ほどの地獄絵図のような光景は夢のようだった。ガス爆発災害直後の自分と父、それが夢になって現れた

横には予備の布団に寝ている茨乃がいる。とはいっても、掛け布団がかかっておらず、とても寝相が悪い。まるで少年のような寝姿だ

時計を見ると時刻は午前三時だった。茨乃と映画を見て１１時くらいに寝てからまだそんなに時間はたっていなかった

（なんて夢を見てるんだ、俺……ゲームの主人公じゃねぇんだから……）

芦川はもぞもぞと布団に入りなおし、目を閉じる。が、先ほどの夢を思い出すとなかなか寝付けない。しぶしぶ枕元に置いてあった、父からもらった音楽プレーヤーを手にとりランダムで適当に曲を流す。先頭に来たのは宇多田ヒカルの『Ｄｅｖｉｌ　Ｉｎｓｉｄｅ』だ

父のお気に入りのアーティストだったのを覚えている

（なんか最近こんな夢ばっかだな……）

先日教室で居眠りした際も、爆発災害に巻き込まれる直前の思い出が夢になった

芦川は音楽のボリュームをあげた。嫌な夢に上書きするように

「あーあいいなぁ。ボクもいきたーい」

「行ったところで退屈だろ、多分」

芦川は玄関で靴を履きながら、ぶっきらぼうに答える

茨乃はここに来てから学校に行きたがっているが、こればっかり

はどうしようもない。どんなに頬を膨らまされても連れて行けないものは連れて行けない
「てか、今日から早速バイトだろ？」
それを言われた茨乃はタコのように膨らませた頬を、穴が開いた風船のようにしぼませニコニコとした表情に戻る
「あ、そだねーボクにもやることあった！　頑張るよ！」
茨乃はヘッドホンから音楽を流しながらクルリと周り、ガッツポーズを決める
本当に大丈夫か？と芦川はなかば不安になったが、こうみえても彼女が色々考えていたり、しっかりものだということはこの一週間でよく理解していたつもりだった
「じゃ、いってきます、鍵は合鍵使って締めておいてくれ。バイト頑張れよ」
「おー！　真も学校頑張ってね！！」
芦川は家を出るときに少しだけ振り返った。そこで目に入ってしまったものは、ドアの閉まろうとする隙間から寂しそうにこちらを見る茨乃の顔だった
（とりあえず、出来ることありそうだな）
芦川は昨日までの考えを少し改め、学校に早く着けるように走り出した

芦川が少し早めに学校に行って、真っ先に向かったのがコンピューター室だった。普段生徒への開放はされていないが、芦川は『家庭の事情』という名目で先生からコンピューター室の鍵をもぎ取ることに成功した
早速適当な一台を起動させ、自分のＩＤとパスワードを入れインターネットブラウザをスタートさせる
「まずは、あいつの名前からかな」
そこからお気に入りに入っている検索サイトで『茨乃　蒼　捜索願』と打ち込み検索ボタンを押す

だが、ヒットしたのはわずか数件で、一応そのページも閲覧してはみたが、芦川の知っている茨乃に関する情報ではなかった
普通彼女ぐらいの年の女の子が行方不明になれば、親、友達、バイト先などから捜索願が警察に出されていそうなものだが、当てが外れた
「捜索願がでてないのか……じゃあこれなら」
続けて『茨乃　蒼　家出　プロフ』と検索してみる。彼女が記憶を失う前、普通の女子高生であれば、携帯電話のプロフィールSNSあたりには登録してそうだし、急に居なくなれば友達がその手のサイトで話題にするだろうと芦川は考えた
ところが今度はヒットすらせずに『該当ページなし』とむなしく表示されるに至った。その後も何回か違う言葉で試していったが
「だーっ！　何もでてこねぇ！」
ほかの教室よりも座り心地の良い椅子に、思い切りもたれかかる
結局めぼしい情報は見つけることが出来なかった。少なくともインターネットの中には彼女を探す人や、彼女がどこで何をしていた、という痕跡はなかったという事だ。あと考えられる手段は
「実際に足を使って探す、か」
ネットでは話題にならなくても、現実世界で人が居なくなればそれ相応に話題にはなるはずだ。ただ七石市は都会であるためにそういう話は腐るほどあり、その中から茨乃の情報を引っ張り出すのは苦労しそうだ
その手の与太話、噂か路上ライブをよくやる狗飼が詳しそうだが、既に茨乃と狗飼は会っていて、事実関係を誤魔化すのに苦労しそうだ
（そういえば……）
ふと気になって、キーボードに指を走らせる
「ウェポン……七石っと」
これまで一切世の中に出てこなかった「音楽武器」ウェポン、でもネットの大海原にだったら、その片鱗くらいはあるのでは？と芦川は考えた

（最近は政府とかの機密がネットにアップされてたりするって、狗飼言ってたしな……）
半ばお遊びだが、出てきたら面白そうだ。芦川は検索ボタンをクリックする
すぐに検索結果は出た。わずか１４件のヒット
（でもやっぱり少しはヒットするのか）
興味本位でその結果の中で一番上にあったページをクリックしてみる。どうやら小説投稿のコミュニティサイトのようで、そのサイトに投稿されたの長編小説一部だったようだ
「閲覧数１……ってことは俺がはじめて読む人って事か」
どうやら人気の無い小説のようで、サイト内ランキングの項目も６５２４５位、と高くは無いようだった
とりあえずスクロールして読み進めてみる

『「きゃわぁ！（；＞＿＜）ノ」そのとき生意気なあの女が日本の剣をぶんぶんふってきたの！！しんぢられない！！あたしはひょひょひょいってよけてＶサイん（＾＾）ｖ』

「これは酷い」
それ以上の感想が出てこなかった。芦川自身に小説の書き方などは分からないし、投稿サイトの作品なら文が砕けててもしょうがない、と思えるがここまで砕けると論外のような気がした
「やっふー、まことん朝から調べものディスかー？」
狗飼がいつの間にかコンピューター室に入ってきていた。相変わらず重そうなギターケースを片手にヘラヘラ笑っている
「お前、なんでここいるの？」
普段サボりで出席のギリギリの狗飼がこんなに早い時間に学校にいること自体が珍しかった。何か企みでもあるのか、と芦川は勘繰る
「いやーまことんの匂いを嗅ぎ付けま――」
「聞いた俺が馬鹿だった」

狗飼が気分屋な事を芦川は失念していた。いかんいかんと頭を振るう
「で、なに見てたんだお？」
狗飼が芦川の後ろから覗き込むように、パソコンのディスプレイを覗き込む
「うっは、なんだこれ。小説に顔文字はないべー」
「それは俺も同感。なんか調べ物してたら変なのヒットして、これが出た」
狗飼はすぐに離れてうんうんと頷き、壁に寄りかかって座りながらギターを取り出し始めた
芦川は少し意外そうに狗飼の方を見て聞く
「何調べてるんだー？とかは聞かねぇんだ」
狗飼は視線を自分のギターに向けたまま、少し笑って答える
「聞いてほしかったかい？　あ、俺もまことんに聞きたいことがあったんだ」
「ノーコメント」
「聞く前からクエスチョン禁止令ですか？！」
狗飼の聞きたいことなんて長い付き合いでなんとなく分かるようになってしまった。多分、茨乃について聞きたいのだろう
「あのヘッドホンかけたボクッ娘――」
「ダウト」
「用法が違うと思うけど、以心伝心ってことで結城嬉しい」
きもちわりぃ、と小さく呟いてから芦川はブラウザを閉じ、パソコンを終了させる
「てかさぁ、ただでさえオレとまことんは女友達少ないんだから、あういう変わった子でも大事にするべきだと思うんだよね」
「あいつは別に変わった奴じゃないよ、普通だ」
「ダウト、ただでさえ友達は少ないのに友達思いなのは、まことんの良いところでもあり悪いところでもある」
狗飼のニヤニヤ顔を見たときに「嵌められた」と気づくには少し

遅すぎた
「なーあー、ぶっちゃけあのボクっ娘の事ねらってるんでしょー？
まことーん」
狗飼が立ち上がりくねくねと芦川に近づく
「うるさい、後お前ほんとっっっうに人の呼び方安定しねぇな！」
この間までは『まことときゅん』、いまは『まことん』と来た
芦川はしっしと手で追い払う狗飼を払う、がそんなことではやめない狗飼であることも芦川は重々知っていた。次の面倒な質問にどう切り返すか考えた
「デート誘えば？」
「は？」
考えたが質問が唐突過ぎて答えられなかった。回避失敗
「だーかーらーデート遊びにでも誘いなよ。せっかくのチャンスなんだから活かさなきゃ損だって！」
損、と言われても一緒に住んでるからなぁ。芦川は悟られないように心の中でぼやく。とはいえよく考えてみれば彼女もバイト以外は実質テレビくらいしかない部屋にずっとひとりで居て退屈な筈だ

『あーあいいなぁ。ボクもいきたーい』

朝の茨乃の一言を思い出す。普段から小学生男児みたいに快活だから、彼女も自分たちと同じくらいの年齢の女の子だということを忘れがちになっていた
あの言葉はちょっとしたＳＯＳだったのかもしれない。だとすれば、狗飼の提案も案外良いかもしれないと芦川は思い始めた
「前向きに検討してみよう、今度の週末とか」
「え？」
今度の疑問符は芦川ではなく、狗飼から出たものだった。狗飼の方を見ると鳩が豆鉄砲を食らったような顔でこちらを見ていた
「なんだよ、お前が提案したんだろ」

狗飼はギターを少しかき鳴らしニッっと笑う
「いや、気にしないでよ。頑張ってね！」
「へんなやつ」
芦川は苦笑いしつつ、自分の荷物を持ってコンピューター室から出よう出口に近づく。
「待ってよまことーん」と狗飼も慌てて来るかと芦川は考えたが、狗飼はギターに夢中のようでこちらには目もくれない。芦川はそのままドアを開けると、その音で気づいたように狗飼が顔を上げた
「あ、北条はこれから収録とかで忙しくなるからこれなくなるってさ」
それだけ狗飼は再びクラシックギターを愛でる様に弾き始めた
りょーかい、と小さく呟いて芦川は廊下に出て、コンピューター室を後にする
廊下を歩く芦川の背後からは、狗飼の弾くギターの音が泣くように響いていた

七石市の地下にある、もう廃業してしまったプールバー跡地、棚が空のカウンターや置きっ放しのビリヤード台などがあり、わずかに照明がついている
そこには茨乃が『チーム』と呼ぶ二人の男女『黒栖』『神崎』と一週間前、彼らの『リーダー』になついていた小学校低学年ぐらいの男の子が居た。
――ただし男の子の方は手錠を右手首につけられ、もう片方を柱に固定され拘束されている。顔や腕には痣や火傷の跡があり、暴行を受けているのを顕著に表していた
突然、古びたビリヤード台に座っていた黒栖が、黒く長い髪を揺らしながら立ち上がる。今日の彼女はチームが着る黒いコートではなく、ゴシックな雰囲気の黒いドレスだった
「やったぁ！　ほらほら神崎！　私の小説に読者がついたわぁ！！

初めての読者よ！」
黒栖はきゃっきゃきゃっきゃとはしゃぎながら、携帯電話の画面をカウンター席に座って雑誌を読んでいた神崎に突き出す
「ふん、きっと間違ってクリックでもしたんじゃろ。誰が好き好んでお前の落書きなぞ見るか」
神埼は呆れたように笑い、そっぽを向く
「わかってないわねぇ！　少しでも興味をもってもらえれば私はそれでいいのよ！」
「顔文字だらけの落書きを見てしまえば、興味も半減じゃろうな」
「これが今流行の文体なのよぉ……」
会話だけ聞いてれば普通の青年達のやりとりだ。小説書きが趣味の女性と、それを茶化す体育会系の男性
だが、拘束されている男の子が出すうめき声が、そんな二人の会話を異常で。狂気的なものにしていた
黒栖がふと男の子からする音の方に気がつく。すると彼女の顔は今までの上機嫌な笑顔から、醜悪な程に表情を歪めていった
「ぼうやぁ？　なぁに逃げようとしているの？」
今まで、自分の手首についた手錠を外そうと試行錯誤していた男の子が、黒栖からかけられたこえに気づく。するとこちらは黒栖とは正反対に、子兎のような怯えた顔に見る見る変わっていった
「ご、ごめんなさいごめんなさいごめんなさいもうしませんから、ごめんなさいごめんなさい」
男の子は動くのをやめ、うずくまる様にその場で座ったまま頭を下げる
が、その頭を黒栖は思い切り蹴りつけた、男の子は「ぎゃっ」と短く悲鳴をあげながら頭を抱えて、丸くうずくまる
「これだからホントガキって嫌いっ！　ぺちゃくちゃうるさいし、言うことは聞かないし！」
「ぺちゃくちゃうるさいのは黒栖、お前もじゃろうが」
神崎は興味が無さそうだが、一応突っ込んだ。だが黒栖もそれは

あまり気にせず、うずくまる男の子をけり続ける
「た……す……たすけ……っ……おねえちゃガハッ！！」
強く黒栖が蹴り上げたため、男の子は最後まで言葉を発せずに、口から血を吐いて咳き込む
「お姉ちゃんの事は呼ばない約束だったわよねぇ？　……いい加減ウザイのよぉ！！」
黒栖はより強く男の子を蹴り付ける。男の子は少し後ろへ飛び、動かなくなったが息はしているようでわずかに肩が動いていた
「あんまりやり過ぎて、殺してしまったら元も子もないじゃろうに……」
瀕死の男の子を神崎は少しだけ見たが、すぐに雑誌へ目線を戻す。助ける、ということ自体しないようだ
肩を震わせながら荒く息をする黒栖は、握っていた携帯電話の着信音がなっていることに気づく。表示は『リーダー』となっていた黒栖は通話ボタンを押して電話に出る
「あ、リーダー？どうしたの？」
リーダーという単語を聞いてか、神崎も黒栖の方へ顔を向ける。また新しい仕事だろうか、と勘繰る
黒栖は短く何度か相槌を打った後に「それじゃあ、また」と言って電話を切った
「どうじゃった？」
電話を切った瞬間、神埼が身を乗り出すように聞いてきた
「お仕事の話よ。でもざぁんねぇん、貴方は今回おるすばーん♪」
しかめっつらになる神崎をよそ目に、黒栖は嬉しそうに続ける
「しかもぉ、リーダーと一緒にお仕事よぉ？　何着て行こうかしらぁ」
彼女は早速、その「仕事」の日に着ていく服を選ぶために携帯電話を使って服を買い始める。先ほどまで執拗に蹴っていた男の子のことはもう頭に無いようだ
しかめっつらをやめ、どこか諦めたような表情になった神埼が呟く

「本当に、わしらは狂っているな」

夕暮れ時、学校が終わった芦川はまっすぐ家には帰らず、ある場所に向かっていた

元自分の勤務地で、今は茨乃に紹介したお店だ。すぐに目的地に着いたようで、芦川は足を止めた

寿司屋『鮫島』。周りの建物に押される様に存在し、看板もこじんまりとしているため、隠れ家的な様相の寿司屋さんだ

学校から少し離れてはいるが、芦川の自宅からだとかなり近い場所にあり、芦川がバイトをしていた時はかなり通いやすかった

店の戸に掛けてある看板はまだ「準備中」となっているが、芦川は構わずに戸をあけた

（別に寿司食いにきたわけじゃないしな）

店のなかを見渡す。座席はカウンターのみ、その向こうで親方が寿司を握ってバイトがその他色々な事をする。店の内装は和風テイストで、水が流れる置物などが所々置かれている。この店の店長、というか親方の趣味だ

その狭い店内で、掃除をテキパキこなす茨乃を見つけるのは難しくはなかった

「うぇ？　あれ、真？！」

「よ、冷やかしに来た」

少しあわてる茨乃はすこし内股気味になる。彼女は普段のズボンにシャツ、パーカー等のボーイッシュな服装ではなく、ねじり鉢巻に、（おそらく改造と思われる）紺色のミニスカハッピを着ていた。ハッピの背には「鮫」と書いてあり、普段余り露出しない足彼女の顔と同じくは白くて、かつ全国何万はいるかと思われる女子高生が羨むような均整の取れた細さだった

「あ、あのっ！　まだ準備中ですので、開店までもう少々お待ちくださいっ」

茨乃は慣れない口調でマニュアルどおりに時間外に来た芦川に対

し応対し、頭を綺麗に下げる。やはりちゃんと出来ていたようだ
「ああ、わりぃわりぃ、ちょっと気になったから寄っただけだよすぐに帰――」
「おお、芦川君またウチで働いてくれるのかな？」
芦川が後ずさりし、店を出ようとしたところでドンと人にぶつかる
「あはは……親方……」
芦川が振り返ると背が高く、壮年期に入ったような外見の男性が立っていた。この「鮫島」の店長、鮫島　勉だ。
茨乃と同じくねじり鉢巻を額に巻いているが、着ているハッピの色は黒で、改造でもなんでもなく普通のハッピだ。もちろん背中の『鮫』は健在
「やめたかと思えば、今度は女の子を紹介してくるし、お前もわからねぇやつだなぁ」
鮫島親方は握りこぶしで芦川の胸を軽く叩く
「いや……まぁ色々ありまして」
単に給料が安かったから辞めたのは、ここでは言わない。店も繁盛するときの方が少なく、普段はかなり暇なバイトだった
「まぁ、いいや。茨乃ちゃん、滅茶苦茶覚えも良いし、ガッツもありそうだから」
「えへへー」
横で茨乃が照れてはにかむ
芦川は何か思い出したように手を叩き、鮫島親方に「耳貸してください」と小声で要求する。親方の方も応えるように、彼の顔の高さまで顔を近づけた
「あのミニスカハッピ、前までなかったッスよね。どうしたんすか」
芦川が茨乃には聞こえぬよう質問する。すると鮫島親方は誇ったようにドヤ顔になり、茨乃の方を見ながら小声で答える
「いやぁ、あっちのほうがお客さん受けするかなぁ、と思って。後は俺の趣味」

いい笑顔で親方はグーサイン。それとは真逆に芦川はげんなり顔。そりゃバイトも来ないわけだ、と心中で呟く
「そうですか……ああ、後今日あいつ何時に帰れます？」
芦川は二人が会話している間に、仕事に戻った茨乃を指差す
「ああ、今日は仕事覚えてもらうだけだったし、そろそろ帰すよ。給料日前だから、お客さんも入らないだろうし」
「んじゃ、店の前で待っててもいいですかね？」
続けて質問すると親方は「チッチッチッ」と舌打ちして、芦川に肩を掛ける
「いやぁ、せっかくだからなんか作るよ？　俺からのサービスって事で！」
「……あいつの給料から天引きとか、そういう予感がします」
「ったく、いつの間にそんなに水臭くなったんだ？　バイト居なくて混んだときとか大変だったんだわ。だから感謝って事で」
芦川は少し思案するが、芦川の胃袋から大きい「ぐぅ」という音が鳴り、考えを改めた
「じゃあ、お願いします。いいすか、絶対無しッスよ？」
「わーってるって。その代わり、またバイトしたい子紹介してな、おーいあっちゃん。今日は終わりで良いよー芦川の驕りで寿司食ってけー」
上手いなぁ、と芦川は思う。バイトの紹介という宣伝と芦川に恩を売る、というのを二つやってのけた。そこに大人のずる賢さのようなものを芦川は感じたが、今は気にしないことにした

「はい、日替わり盛り合わせお待ちっ」
カウンターに座った茨乃と芦川の前に、６種類程のネタの寿司が乗った皿が二つ出される
芦川の右隣に座る茨乃の服装は、カジュアルなパンツとシャツ、ジャケットで首には毎度お馴染みプレーヤー一体型ヘッドホンを掛けていた

「おおー良いの？　真の驕りで。結構高いんだよ？」
茨乃は寿司を見た後に芦川に視線を移し、彼の懐具合を心配した。本当は親方の驕りなのだけれど
「うん、大丈夫。食っても良いよ」
「やたー！いただきますっ！」
許可するや否や茨乃は箸を使わず手で寿司を取り、醤油をつけずに食べる
「にゃはーう、おいしいよぅー」
至極幸せそうな顔で食べるので、こちらも笑みになってしまいそうになる。芦川も自分の皿にある寿司を箸を使って食べ始める
さて、本当なら自宅で夕食の後にでも言おうと思ったのだが、こんな形で夕食になってしまったので、今ここで言っても構わないだろう
「あのさ、蒼」
「ふぁふぃ？」
既に三個目の寿司を口いっぱいに頬張った茨乃が、芦川の方を見る。飲み込んでからで良いぞ、と付け加えたくなった
「あのさ、もしよければ週末遊びに行かないか？　あ、いや、嫌だったら別に良いけど…」
最後の方は若干尻すぼみになってしまった。
茨乃は口に入っていたものを飲み込むと、ニコッと笑って答える
「うん！　良いよ！実はボクも行きたい場所とかあったんだ！」
思ったよりもすんなりとオッケーを貰えた。「家でゴロゴロしてたーい」と言われたら、少し落ち込んでいたかもしれない
芦川が心の中でガッツポーズをとると、カウンターの影で親方もガッツポーズを取っていた。何をしているんだいい年して
「たのしみだなー真とお出かけ」
足を少し揺らし、微笑みながら残った寿司に手をつけ始める
いつも一人で寂しく、何もやることがない週末は芦川はあまり好きではなかったが、ほんの少し、週末を好きになれた気がする。今

週末が待ち遠しい

To be next Track!!

Ｔｒａｃｋ５－Ｔｗｏ　Ａｓ　Ｏｎｅ（前書き）

※ラノベっぽい文章注意
※長めの文になっております

・前回までのあらすじ
信詩の襲撃から一週間。芦川と茨乃はともに暮らし始め、二人は日常生活へ戻りつつあった。そんな中芦川はインターネットで茨乃について調べ始めるが、収穫はゼロそんな中、芦川は茨乃と週末に遊びに行く約束を取りつけた。
一方茨乃と芦川を狙う『チーム』が水面下で活動を再開し始めるのだった

Track5－Two As One

週末
一週間の終わりで次の週に向け英気を養い、休養を取る土曜、日曜日の事を日本では一般的にこう呼ぶ
今日はその『週末』その中の土曜日だった
「フフーフ、今日は色々付き合ってもらうよー」
芦川の横をムフフと笑いながら茨乃が歩く。今日の彼女の服装ははは白のパンクシャツにネクタイ、黒のズボンにチェーン、そしていつものヘッドホンを首からかけている
ボーイッシュかつスタイリッシュな茨乃には男女関係なく見惚れるところがあり、先程から茨乃を見て振り返るものが何人か居る
因みに何か誤解でもされたのか、リュックを背負ったやせ気味の男性に
「りあじゅうしね！」
と芦川は呟かれた。どういう意味かは分からないので、今度狗飼あたりに聞いてみようと思う
「にしても、人多いな……」
芦川はあたりを見渡す
人、人、人、人！人しか見えない
「駅前だもん、人が多いのは当たり前だって！」
「いや、まぁそうだけどな。なんか押しつぶされそうで」
芦川と茨乃は七石市の中心部に位置する『七石駅』の駅前にやってきた。数日前、芦川は茨乃と週末に遊びに行く約束をして、今日がその日というわけだ
時刻は午前9時ちょっと前、それなのに駅前は人でごった返していた
茨乃は一応女の子のようで、服装や髪型（とは言っても髪は短めだから、バリエーションは少ないのだが）に気合を入れているようだが、芦川はいつも家で着ているシャツにパーカー、ジーンズと洒

落っ気の「しゃ」の字もない服装だった
（はたから見れば豚に小判ってところなのかもな……）
次に遊びに行くときはもう少し身なりを整えよう、と芦川は心に固く誓った
「そういえば、行きたいところがあるって言ってたよな？　どこなんだ？」
芦川が尋ねると茨乃は「フッフッフ」と笑って歩きながら、チケットのようなものを芦川に突き出した
「じゃんじゃかじゃーん！　駅前映画館の映画ゆうたいけーん！」
茨乃は突き出した手に確かに「シアターマーズ駅前店、優待券」と書かれたチケットを二枚持っていた。芦川は一枚取って見てみる
七石駅前の映画館で有効期間内なら好きな映画をひとつ見られる、というチケットらしい。
「どうしたんだ？　これ、普通に生活してりゃ貰わないだろ」
芦川は首を傾げるが、彼女がどこからこの優待券を入手したか大体の見当がついていた
「鮫島の親方からー。バイト終わって帰ろうとしたときにね『デートにいくならコイツを持っていきな、あおちゃん！』って言われて渡された」
「やっぱりそうかい……」
鮫島で遊びに行かないか？と茨乃に持ちかけたとき、茨乃が了承してれくれた直後、それまで何も言わずに黙々と仕事をしていた親方が
『おお、デートじゃんそれ。あおちゃんモテモテー』
と芦川達を囃し立てたのを思い出す。年齢の割りにやる事が子供じみているのだ、あの人は
「そういえばこれってデートに入るのかなー？」
茨乃がくるっとターンするように芦川の左側から右側に移動し、首をかしげる。本当によく動く子だ
「いや、言わないと思うぞ、ただ遊びに来ただけだし」

芦川はデート、と聞いて一瞬顔がニヤつきそうになるが、しかめっ面に無理やり移行し
動揺を悟られないようにする
だが、突如腕に絡みついた感覚が、そんな芦川のしかめっ面の顔を一気に驚きの表情に変える
「何をしてるんだ、君は」
「抱きついてるんだよっ、腕に」
茨乃が右腕に、自分の両手を絡めていた。よく恋人がやるアレだ
芦川が一度も体験したことのない領域のお話、芦川の顔が分かりやすく耳まで真っ赤になってきた
「……離れてくれませんかね」
「だが断るよっ！」
速攻で断られた。茨乃にどういう意図があるかは分からない。だが、この擬似恋人体験を味わえていられるのなら文句は言うまい、と芦川は下心を前面にそれ以上の追求はしなかった
「……ところで蒼？」
「なぁに？　マイデューティー」
「さっきからどんどん加速していってませんか？」
歩く早さが、だ
茨乃が腕に絡みついたあたりからどんどん歩調が早くなり、今は若干茨乃に引っ張られているような感じになっている
「きのせいきのせいっ！　ほら早く行かないいい席とか取られちゃうよ！」
「やっぱり急いでるんじゃないかお前！」
ついに早歩きになり、芦川が突っ込んだころには駆け足にスピードアップしていた
「さぁーって、若者の町の薄暗いシアターにライドオンするよ！」
「ちょ、まった走るな、せめて腕をはな――そげぶっ！」
腕をつかまれたまま引っ張られているので芦川は茨乃について行けず、足をもつれさせ大きく転んだ

しかし、茨乃は片手で芦川の腕をつかんだまま走り続ける
「あつっ！顔がっ、腹がっ！　蒼ストップ！　走ぐばはっ！」
芦川はまるで引き回しの刑にでも処されているかのように、走る茨乃に引っ張られる。顔とひざがコンクリートの地面と擦れて痛い
「盗んだチャリではしりだすぅ～♪」
「走る前に俺を離してぇぇぇ！！」
結局、芦川は映画館に着くまで茨乃の（本人は自覚なしだが）『七石駅前引き回しの刑』に処される事となった

「いい席が取れたねっ、真っ」
「そーですね……」
映画館から芦川と茨乃が出てきた。茨乃の全力疾走により、ほかの誰よりも映画館に入ることができ良い席を予約することに成功はしたが、早く来すぎて劇場が会場する時間までかなり空きが出来てしまった
そのため、それまでどこかで暇を潰そうと一度二人は映画館から出てきたのだが
「……」
茨乃があたりをキョロキョロ見渡す。なにか探しているのだろうか
「どっか行きたいところでもあるの？」
芦川が尋ねると茨乃はハッっと芦川のほうに向き直り、恥ずかしそうに俯いて上目遣いで芦川を見る
「げ、ゲームセンターにいきたいなぁ……と」
「ああ、ゲームセンターなら近くにあったはずだから……行く？」
茨乃はズボンのポケットに手を突っ込んで、はにかみながら頷く
芦川はそれを見ると「ついてきな」と言って少し先を歩く。そんなに恥ずかしい事だろうかと芦川は思う。茨乃くらいの年齢ならゲームセンターに行くのは別段変なところはないし、金銭的にもまだ茨乃にはゲーセンでゲームをやるくらいの余裕はあった筈だ
ふと、芦川は自分のパーカーを何かがつかむ――というよりは「

つまむ」というような感じがして立ち止まって振り返る
「あ、えへへ……」
振り返ると茨乃がパーカーの端を指でつまんでいた。まるではぐれないように親鳥の後に続く雛鳥のような弱々しさだ
（さっきまでの威勢の良さはどうしたんだよ……）
芦川は彼女を振り払わずに、そしてはぐれないようにゆっくりとゲームセンターまで歩いた

ゲームセンターに入った芦川の耳を各ゲーム機から流れる爆音と、流行のガールズロックグループ「アルタイル」の曲が容赦なく突き刺してくる
「アルタイル」は一年前に女子高生四人で構成され、世に出たバンドグループでここ最近は街の至る所で流れている。ゲームセンターでも流れている事を鑑みると、相当流行っているのだろう
もっとも狗飼は「ナンセンス！！ありえない！　音楽への冒涜だ！」とあまり好きではないようで、この流行も好ましくないようだった
茨乃も曲に気づいたらしく芦川のパーカーから手を離し、店内のBGMに耳を傾ける
「最近この人たちの曲、いろんなところで流れるねーボク結構好きだよー」
「歌もいいけど、メンバー全員女のロックバンドってのも、日本じゃ珍しくなってきたから、注目されるのかもな」
それに女性のみのグループにも関わらず、アイドルのように媚びる事が無く、常にサバサバとした感じが彼女達の人気を上げているのでは、というのが芦川の推測だった
「はーあー、なんかこういうバンドの人たちが、自分のためだけに曲とか作ってくれたり、自分一人のために演奏してくれたらなーとか、よく思ゆ」
「思ゆってなんだ思ゆって。まぁそれは同感だ」
そんな取り止めの無い会話をしながら二人はゲームセンターの中

を練り歩く
ふと、芦川が歩みを止めた
「ふにゅ？　真これやるのー？」
茨乃が芦川の背からゲームを覗き込む。音符が表示される画面の前に電子ドラムセットのような筐体がドン、と置いてあるゲーム
いわゆる「音ゲー」のドラム版の前で芦川は、歩くのを止めたのだ
「あーうん、ちょっとやっていってもいいか？」
「勿論、ボク後ろで見てるねっ」
芦川は「あんま期待はしないでくれ」と苦笑しながら百円玉を筐体に入れ、ドラムセット型のコントローラーの前に座ってスティックを握る
ランダムモードを選択するとすぐに曲が始まる。譜面はＺｅｂｒａｈｅａｄの『ｈｉｓ　ｗｏｒｌｄ』だ。ノリは良いがテンポが速く、難易度は高めの曲だが――
「ヘイ」
そっけなく気合を入れた後、芦川はドラムセットを乱打し始める
否、乱打ではない。きちんと譜面通り叩いている。だが、傍から見るともうなにをしているのか分からないほどスピーディーにビートを刻んでいた
後ろで見ていた茨乃は口を半分開けてポカン、とするばかりでその叩きっぷりにはついていけないようだった
「っと！　こんなもんか」
ゲームが終了し筐体にスコアが表示される。フルスコア、パーフェクトだった
「す……」
ずっと後ろで見ていた茨乃が言葉を搾り出すように発する
「す？」
「凄いよ！　真凄い！　こんな特技あったの知らなかったよ！　なんで教えてくれなかったの？！」
「いや、聞かれちゃいないし言う必要も無いだろ」

芦川はスティックを元の位置に戻し、ドラムセットから離れる。
茨乃が突っ込んできそうなの手で静止しつつ続ける
「中学の時、吹奏学部にいてさ。そこで覚えた」
「はー意外だなぁ。てっきりサッカーとかやってるものかと思ったよ」
「運動は苦手……今でも苦手だけど。それに楽器は学校が貸してくれるから吹奏学部は金が掛からないんだ」
茨乃はなるほど、と手を打った後すぐに考え込む
「うーん……ここまで活躍されちゃうと、こうボクもこうカッコイイところ真に見せたいなぁ」
可愛い、の間違いじゃないの？と突っ込みたくなる衝動を芦川は何とか抑えた
急に、ゲームセンターの一画の人だかりから歓声が上がる
「なんだろ、アレ」
芦川は興味を示し、何があるのかと背伸びをして人の壁の向こうに何があるのか見ようとする
「あ、もしかしてダンラパかも！」
「ダンラパ？」
茨乃が芦川の手を取り「見たほうが早いよ」と言って、人だかりの方へ引っ張っていく
出来立てホヤホヤのトラウマ『七石駅前引き回しの刑』を彷彿とさせたさたが、今回はさすがに茨乃も走らなかった

「なんだこれ」
芦川の初見の感想はこれだった
「どう？　なんか新しいでしょ」
茨乃が自分のことを自慢するかのように胸を張る
芦川と茨乃の前には少し変わったアーケードゲームの筐体が鎮座していた
約2．5メートル四方の正方形のステージにが二つ、並べてあり

その間に画面とコイン投入口がついているスピーカーが置いてある
ステージは人が乗るとライトアップされ、足を置いた場所が光るようになっていた
だが、それほど派手でもなく、ただ場所だけとってしまいそうなゲーム筐体にしか見えなかった
「これはダンシングラッパー、略してダンラパ。今滅茶苦茶人気のゲームだよっ」
彼女が説明をし始めると二人組みの男女がスピーカーに１００円を投入し、スピーカーの脇に置いてあるインカムを装着する
「あのインカムはマイクで歌声がアレで大きくなるの」
「歌声？　もしかしてこれ歌うのか？」
先ほど茨乃が『新しい』と言っていたが、歌って遊ぶゲームは確かに新しい
だが茨乃は「チッチ」と舌を打ち、首を振って否定する
「半分正解だよ、でもこのゲーム歌うだけじゃなくて踊ったりもするんだよっ！」
「はぁ？！　踊るぅ？」
「うーん口で説明するより見てみたほうが早いよ」
二人が話しているうちに、先ほどの男女は二つあるステージにそれぞれ乗って、何かを待ち始める。するとまもなく中央のスピーカーからドンドンドン、とバスドラムのビートが鳴り始め、テクノポップスのような曲調の音楽が流れ始めた
だがスピーカーについている画面は『１Ｐ　０ｐｏｉｎｔ　２Ｐ　０ｐｏｉｎｔ』点数だけを表示し、ほかは何も表示しない
普通の音ゲーなら、何かゲームに関係のあるものが表示されるはずなのに
『ｏｋ！！　Ｐｌａｙｅｒ１　ｓｔａｒｔ！！』
スピーカーからＤＪ風の音声が流れると、急に男の方がステージで踊り始める
男はステップを踏み、時々「ハッ！」やら「カマンッ！」等、よ

く分からない台詞を入れつつ踊り続ける
『ｓｔｏｐ！　Ｙｏｕ　ａｒｅ　ｇｒｅａｔ！！　ｏｋ！　Ｐｌｅｙｅｒ２　ｓｔａｒｔ！！』
スピーカーからまた音声が流れると男のほうは踊りをやめ、今度は女の方に集まった人々の目が向く
「キミとであえーたきせきーに。私の伝えきれぬほどのありがとう♪」
しかし女の方は派手には踊らず、手を多少動かしながら歌うだけだった
歌が終わると中央の画面に点数が表示された
『Ｐ１　２６０ｐｏｉｎｔ　Ｐ２　１５０ｐｏｉｎｔ』
若干男のほうの点数が上だったようである
「もしかして……歌と踊りで点数競ってるのか？」
「その通りだよ真！」
茨乃が説明するには、この音楽ゲームにはお手本のようなものが無く、基本の音楽以外は流れずに後はプレイヤーがアドリブで踊ったり、歌ったりして点数を稼ぐらしい
「なんか点数の基準曖昧だな……」
「うん、ボクもそう思う。でも踊りが滅茶苦茶上手い人とか歌が上手な人とかがやると１ラウンドで１，０００点は稼いだりするんだよ」
先ほどの男女ペアの１ラウンドの点数が１００台だとすると、その高得点を出したプレイヤーは一体どんな踊りや歌を皆の前で披露したのか、芦川には想像出来なかった
どうやら先ほどの勝負は男のほうが踊りで点数を稼ぎ、女の方に打ち勝った
芦川や他の見物人も「テクノポップスで『出会いをありがとう』はねーだろ」と、女の方の敗北を予想していたのだが
「ねぇねぇ、真」

「断る」
茨乃が芦川の服の袖を引っ張って何かを言おうとしたが、芦川は即却下、手を振り払う
「まだボク何も言ってないのに！」
「言わなくてもわかるっつーの。どうせ一緒にコレやろうとか言うんだろ？」
芦川は目の前にある「ダンラパ」を指差す。すると茨乃は顔に手を当て、信じられないというような顔で芦川を見る
「す、凄い……なんで分かったの？　もしかして、真ってドラムが叩けるエスパー？」
「ウェポン使いに凄い、って言われてもなぁ」
短い付き合いではあるが、茨乃の考えそうなことが最近芦川にも分かるようになってきた。多分このゲームセンターに連れてきたのもコレが目的だろう
（悪いな、蒼……流石にこんなに人が集まる中、歌ったり踊ったりする胆力は俺にはねぇや……）
「ねぇ、まことーやろうよー。これ二人でやるやつだから、ボク今まで出来なかったんだよ……」
茨乃は上目遣いで芦川をじっと見る。その目は出会った時と変わらずに青く、透き通っていて気を抜くとその目に引き込まれそうだった
「い……」
「い？」
芦川の中途半端に発せられた声に、茨乃は首をかしげる
「い、一回だけだ！　ワンプレイやったら終わりだからな！」
芦川はやけになって、茨乃にひとさし指を突きつける。すると茨乃の顔は見る見る笑顔に変わり、芦川に飛びついた
「ふふー！　流石真ー！」
「ええい！　暑苦しい！離れろ！」
頼む。それ以上密着されると、色々と誤魔化せないから

そしてまた芦川の背後から「りあじゅうばくはつしろ」とわけの分からない呪文が発せられた

芦川と茨乃は『ダンラパ』のステージの上に立って、音楽が流れ始めるのを待った

「言っとくけど、やるからには負けないよ」

スピーカーの向こう側から茨乃が芦川を挑発してくる

「お手柔らかに頼む」

対して手をひらひらさせながら芦川は、挑発を受け流す

ステージの周りは先ほどと同じように野次馬が続々と集まってきた。芦川は緊張を抑えるように何回か深呼吸する

もし芦川が勝ちに行くとしたら、踊りはある程度あきらめた方がいいかもしれない。大男との戦いや信詩との戦いでは茨乃はロケットランチャーを担いだり、ゾンビ相手に格闘するなど、全国の体系に悩める女性が怨恨で殺しに掛かられそうなほどスリム（胸は無いが）な体で、想像もできないアクションを見せ付けてきた

ダンスにはセンスが問われるが、やはり体力が基本だ。運動が苦手な芦川では手も足も出せまい。芦川が勝負を出来るとすれば歌になる

『ｏｋ！　Ｐｌｅｙｅｒ１　ｓｔａｒｔ！！』

少しパンチの効いたロックがスピーカーから流れ始める。それにあわせて１Ｐステージの茨乃にスポットライトが当てられる

茨乃は右手の人差し指を上に高く上げたあと、華麗にステップを踏み始め歌いだした

「オーケイ？　ゲッタシングエブリワン！　アイムインザハウス！　トデイ、ルッカーダンスアンドミュージック　モアスタイリッシュ！ヘーイカマン！」

英語かよっ！しかもでたらめじゃねぇかっ！

だが芦川たちの周りに集まるオーディエンスは、少女の歌うエセ英語のラップに乗せられテンションＭＡＸだ

ここで芦川一人がダサいパフォーマンスをしてしまったら、晒し者（この時点で酷い晒し者だが）になってしまう
（ちくしょう……こうなったらどうにでもなれ！）
『ｏｋ！　Ｐｌｅｙｅｒ２　ｓｔａｒｔ！！』
芦川のプレイの番になった。芦川をピックアップするようにライトが光、横のステージで茨乃が期待を込めたまなざしでこちらを見てくる
芦川は身構えた後、力強く音楽に身を任せ踊り始めた

「いやー楽しかったー！」
「……ああ」
デジャビュだなぁ、この光景と芦川は呟いて、茨乃とゲームセンターを出る
結果は惨敗。歌いながら踊る、というのは体力を相当損耗するもので芦川の最後の方はもう足がろくに動いてくれなかった
一方茨乃はとてもスタイリッシュなパフォーマンスを披露しオーディエンスを沸かせ、店内ハイスコアを更新するに至った。少女の皮を被った本場生まれのダンサーじゃないかと芦川は本気で思う
「あ……」
茨乃が顔を上にあげる。それを皮切りに、空から水滴が落ちてきた
雨だ、それも結構強めで、雲も切れ間が見えない。通り雨では無さそうだ
「あちゃー……曇りって言ってから大丈夫かと思ったけど……」
芦川は茨乃の方を見る。彼女の今の服装は決して厚着とは言えず、雨に当たれば風邪を引いてしまいそうだ
「よし、ちょっと１００均で傘買ってくる」
芦川はパーカーのフードを被って走り出す。バイトも始めたばかりなのに風邪でも引かせたら大変だ
それに芦川も楽しみにはしていたが、茨乃もこの週末を楽しみにしていたようで、昨日なんか「たのしみだねったのしみだねっ」と

寝るまで言っていた
　そんなに楽しみにしていたのなら、芦川はあまり嫌な思いはさせたくない
「あ、待っ――」
　茨乃が何か言いかけた気はしたが、芦川は気にせず駆け出した

「あ？」
　十数分後、芦川は買ってきた安物の傘を差しながらゲームセンターの前に戻ったが、茨乃の姿は見えなかった
（待ちきれなくなって映画館まで行ったか……？）
　茨乃のことだ、映画が楽しみで芦川を置いていったのかもしれない
　芦川は映画館まで足を運ぶ。しかしそこにも茨乃の姿は無かった
（ちくしょう……あいつ何処に行ったんだよ……）
　他にも駅の中、ゲームセンターの付近も探し回ったが何処にも見当たらない
「まさかとは思うけど……」
　先に帰った、という考えが芦川の脳内をヒンヤリ包み込む。まさか、彼女に限ってとは思うが……
「まてまてまてまて、よく考えろ俺、アイツが行きそうなところだ……アイツが行きそうなところを考えろ」
　だが必死に考えても彼女が行きそうな場所が思いつかない。精々音楽好きな彼女の性格を考慮してＣＤショップといったところか
　途方にくれる芦川がうなだれたときに、ポケットの中に入っている携帯電話が振動しはじめた。まさか、と思い芦川は急いで携帯電話を取り出す
　だが、表示画面は北条となっていた。そもそも茨乃は携帯電話を持っていないので、連絡が取れるわけが無い。芦川はそれでも少し期待をしてしまった
　そんな考えの自分にうんざりしつつ、芦川は電話に出る
「もしもし……」

『もしもしーあおちゃんはあずかったー』
「は？」
今北条は「蒼と言ったのだろうか。芦川は自分の耳を疑う
『駅前ビルのスタジオに私と一緒にいるから。迎えに来てあげな？』
北条の言うとおり芦川がスタジオに駆け足で行くと、タオルで頭を拭くびしょ濡れの茨乃とギターケースを持った北条がニヤニヤしながらこちらを見てきた
茨乃に至ってはこちらを見るなり、泣きそうな顔になってしまった
「うっ……まっ……まこっ…まっ……」
「迷子になっちゃってたんだって。傘を買いに行った芦川君を追いかけたら、何処にいるのか分からなくなって。それで私に保護されました」
まともに喋れない茨乃の代わりに北条が状況説明する。買いに行く直前の茨乃の呼び止めを聴いて置けばよかった、と今更ながらに芦川は後悔した
「うぇっ……ごめっ……ごめんなさっ……ボク心細くて……ひぐっ……でもボク……方向音痴だかっ、ぐぅ」
「あー分かった分かった！　こっちこそゴメンな、置いていって」
芦川は茨乃の頭をポンポン、と撫でてやる。それがスイッチのように茨乃はついに涙腺が決壊したかのように泣き始めてしまった
「うぁぁぁぁん！　まこっ……さび、さびしかったぁよぉ！」
芦川は急に泣き始めてしまったのに驚き、茨乃の頭から手を離してしまった
「あー泣かせた泣かせたー」
「だ、だまらっしゃい！」
茶化す北条は、おたおたする芦川の変わりに茨乃に抱きついて頭を落ち着くまで撫でてやる。まるで母親のような行動だった
「まったく、芦川君は女の子置いて行っちゃダメ！　分かった？」
「はい……」

芦川は北条の説教に素直に頷く。あの時ほんの少し止まって「濡れるから待ってて」と言えばこんな事にはならなかっただろう
「そして、あおちゃんも分からない場所に無理に行こうとしない、また迷子になっても私助けて上げられないから」
「ふぁい……」
落ち着いた茨乃も素直に返事をする。その様子を見た北条は満足そうな顔で何回か頷いた後、茨乃から離れ右手をを上へを挙げる
「よし！　それじゃあ気を取り直して遊びに行こう！」
「え、北条も？」
「文句を言える立場かなぁ？　芦川くぅん？」
北条は人差し指で芦川のほっぺをぷにぷに押してくる。今回は何をされても流石に芦川の口からは文句は出なかった
「ボクはノープロブレム！　遊ぶ人は多い方がいいよっ」
すっかり立ち直った茨乃がニコニコしながら手を上げる。北条もそれに合わせて二人仲良くハイタッチ。いつのまにそんなに仲良くなったんだ、お二人方
「まっ、これもいいのか……」
今日の予定を勝手に立て始める茨乃と北条を横目に、芦川は誰に向けて言うのでもなく呟いた

スタジオが入っているビルから外に出ると、雨はやんでいたが曇り空は依然広がっていた。だがそんなことより芦川と茨乃の目を引く人物が、まるで芦川達を待ち受けるかのように立ちはだかっていた
スラリと背が高く、黒く、長い髪は後ろでひとつにまとめてある。切れ目が特徴的で歳は芦川達よりも2、3歳上と言ったところか。狗飼風に言わせれば「日本刀とか剣道の防具が似合いそうな女性」だ
だが、目を引いたのがその女性の着ている服だった
忘れもしない、以前戦った大男や信詩と同じ服装、黒く学ランでもあり、マントのようでもあるコートを着ていた
おそらくこの女性は『チーム』のメンバーだ

「真……」
「分かってる」
茨乃と芦川は短く頷いた後、北条を後ろに隠すように前に出る。北条は何が起こっているのか把握できずにおろおろする
「え？　ふ、ふたりともどうしたの？」
芦川は女性の耳元を注視する。赤い耳掛けタイプのヘッドホンを付けている。もしウェポン使いなら今すぐにでもウェポンを出せる、と言うことだろう。女性が口を開く
「茨乃　蒼君に芦川　真君だな？　安心してくれ後ろにいる君たちの友人には危害は加えない」
凛とした通る声で彼女はまるで、空気すら切り裂きそうだった
彼女はまもなく、ウェポンを発動させる。およそ1メートルはあるであろう長さで、適度な細さ
それはシース（鞘）に納まった現代的な持ち手の日本刀だと、芦川は判断する。マジで日本刀かよ……と芦川は心の中で毒づいた
「え？なにこれ、どっきり？」
「北条！　ここから急いで逃げろ！」
「甘いっ！」
芦川が北条の方を見るや否や、その隙を突くようにチームの女性が芦川めがけて飛び込むように突進してきた。今からでは、とても音楽プレーヤーを出せないっ――！
「真っ！」
茨乃は叫んだ後自分の首に掛けてあるヘッドホンの再生ボタンを押す
すると、ヘッドホンから盛大に曲が「音漏れ」し、その音楽がしっかりと芦川の耳まで届く
「ウェポン！」
「だぁーっ！」
芦川を切り伏せるように抜刀した刀を、芦川はすんでのところで、右腕に出現したアームブレードで防ぎきった

「ちっ！」
芦川が反撃しようとする前にチーム所属の女はバックステップで下がり、距離をとる
次第に通行客が野次馬として集まり始めるが、映画やドラマの何かの撮影だろうと、特に避難するわけでもなく、こちらをチラチラと見るだけである
この状況は非常にまずい、相手は芦川と茨乃以外に手は出さないと言ってきたが敵の言葉ほど疑い深くなるものは無い
自分達だけに注意を向けるように茨乃が挑発をする
「ボク達の名前は知ってるのに、そっちの名前をボク達が知らないのっておかしいんじゃない？」
茨乃は二挺拳銃を出現させ、腕をクロスさせながら構える。芦川も自分の音楽プレーヤーを取り出し、イヤホンを耳に付ける
「私の名か？」
彼女はゆっくりと鞘から刀を抜く。その刀身は光さえも吸収してしまいそうな黒で、刀だと言うのに何一つ写りこまない。その刀を彼女はその場で二、三回振った
「私の名前は陣川(じんかわ)　喜姫(きき)。不本意だが君達の命、頂戴させてもらうよ」
陣川、と名乗った女性が、先ほど抜いた刀をゆっくり鞘に戻す
そして、キンと刀と鞘が当たって音が鳴った瞬間

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

「うわぁ……凄く嫌な予感」
芦川達の後ろから大きな地鳴りのような音が聞こえる
芦川、茨乃、北条がゆっくり振り返ると
先ほどまで自分達が中にいた、スタジオが入っているビルが『切

れていた』

Ｘのような大きな切込みが走り、そしてゆっくりとビルは倒壊していった

Ｔｏ

ｂｅ　ｎｅｘｔ　Ｔｒａｃｋ！！

Track6－Rebirthing（前書き）

※今回は残酷表現があります
※文章長めです

・あらすじ
茨乃との休日を駅前の繁華街で楽しむ芦川。多少のトラブルがありつつも茨乃の様々な面を芦川は見る事になった。途中、北条も混ざり三人で遊ぶ事になったが、そんな中「陣川（じんかわ）」と名乗るウェポン使いの女性が現れる。彼女は触れずに物を切り、ビルすらも『斬って』倒壊させる日本刀ウェポンの使い手だった

Track6－Rebirthing

「ビルを……切った……？」
芦川は振り返った視線の先のものを見て、唖然とする
先ほどまで芦川達がいた１２階建てのビルがゆっくりと崩れていく、周りで見ていた野次馬も事の異常さに気がついたのか、ポカンと崩れ落ちるビルを見た後に
「うわぁぁぁぁ！！！」
「ビルが！ビルが崩れたァァァァァ！」
「やばいってやばいて、流石に！」
各々パニックになってその場から離れるように駆け出す。休日という事もあって逃げる人々の多さは川のようで、流れは川のように大きかった
「うまいね。先にビルを壊してみんなをパニックにして退路を塞ぐ」
茨乃はかろうじてひきつった笑いを浮かべながら、二挺拳銃を陣川に向け直す。茨乃も今すぐ発砲に踏み切りたかったが、もし避けられたり外してしまった場合に関係のない人に当たってしまいそうなことを考えると、茨乃が得意な乱射は出来そうも無かった
「おいおい……マジ勘弁してくださいよ……」
となると、アームブレードという近接武器を扱う芦川が戦うことがベストな感じだが、芦川には目の前で刀を抜こうとしている陣川に勝つ算段が思いつかなかった
「では続けるとしようか」
陣川は表情を変えることなく、険しい顔で芦川達を見据える。全員は逃げられそうに無い
「蒼、北条を逃がしてやってくれ。ここは全力で死守する」
芦川は茨乃を横目で見てお願いする。本当なら北条一人で逃げて欲しいのだが、北条はパニックで動けなさそうだった
「わかったよまこ――「はぁ？　ちょっと待って！なんかドッキリ

でもなさそうだし、意味わかんないんですけど……」
茨乃の返答を遮るように北条は説明を求める。まぁ当然と言えば当然だが、今回ばかりはどうも説明しようが無い
「いやぁ……わりぃ、ちょっと説明が難しい。また次の機会にって事で！」
誤魔化すように芦川は陣川に向かって走り出す
「ちょっと！芦川君！」
「ゴメン！　ボクも後から説明するから！」
「ふぇ？！　あ、あおちゃん？！」
茨乃は北条の手を掴み、引っ張りながら逃げていく
「いいだろう、少年。友人を逃がす度量、気に入った」
陣川が刀を鞘から抜き、高く掲げるように構える。芦川もアームブレードを構えて陣川に向かって突っ込む
「どうにでもなりやがれぇぇぇぇ！」
二人のウェポンがぶつかり合い、火花を散らした

茨乃と北条は倒壊したビルを通り過ぎるように、人のいないところへ、いないところへと逃げていた
「ねぇ、あおちゃん。これっ……わったった、ど、どういう事？」
北条は躓きそうになりながらも、自分の少し先を走る茨乃に問う
二人はいつの間にか雑居ビルが立ち並ぶ区画の、ビルとビルの隙間にいた
日の光が入りそうな場所ではなく、ビルの壁面は泥でどことなく汚れていた
「すごく色々省いて説明すると、ボクと真はあの変なコート着た人たちに狙われるんだ！」
「命を？」
「Ｙｅｓ！　せめてＡｓｓにして欲しかったよ！」
茨乃は突然スラングを吐いたかと思えば、急に止まり回れ右をする。北条も危うく茨乃にぶつかりそうになるが、立ち止まることが

出来た
「ど、ど、ど、どうなさいましたあおちゃん？」
「多分ここまでくればあの人も追ってこないだろうから、ここからはカナっちひとりだけで逃げて欲しいんだ」
「え？　あ、じゃああおちゃんも一緒に逃げないの？」
北条が少し不安そうな表情で茨乃を見るが、茨乃は肩をすくめて力なく笑った
「ごめんね、これ以上巻き込んじゃうと……あはふみゅ」
北条が茨乃の左頬をつまんで引っ張っていた
「はなっ、はーなーひーてー」
茨乃は離して、と言おうと懸命に口を動かすが頬を引っ張られているため上手く発音できない
「もう、完璧巻き込まれてるからあんまし意味無いんだよーあおちゃーん。他人行儀は良くない！」
北条は面白くなったのか、もう片方の頬もつまんで引っ張る
「ふぇー！ひゃっははー！」
「ほへっ！　ふぁふふひは！」
茨乃も負けじと北条の頬を両方ともつまんで引っ張り返す。人がいない路地で何故か少女二人はお互いの意地をかけた引っ張り合いがはじまってしまった

数分後、茨乃と北条は互いに離れ、自分達の引っ張られすぎた頬をさすっていた
「あおちゃん引張りすぎ……」
「カナちゃんこそ……」
茨乃は自分たちが元来た道を見る。北条を巻き込まないようにしたかったが、ここまで意地を張られるとどうしようもない
「ねぇカナちゃん……本当に一人で逃げてくれないの？」
「やだ、だって友達だもん」
北条はキッパリと応える。頬が引っ張りすぎで赤くなっていてか

っこよさは半減していたが、その態度は毅然としていた
「あおちゃんも、芦川君も私にとっては大事な友達なの。その友達が大変なのに私一人現実から逃げられないよ」
「……」
「で、でもよくわかんないけど、命を懸けて戦ってる芦川君やあおちゃんに言わせれば私は『甘い』のかも」
カナは少し笑って誤魔しながら自分の話を締めくくった
「甘くなんかないよ……」
「？」
茨乃の呟くような言葉に北条は首を傾げた。茨乃は俯きながら続ける
「カナちゃんの考えは、多分甘くないんだよ。それが普通だよ。ボク達がちょっとおかしいだけなふぁふぃふぃ！」
「あおちゃんはおかしくないってー」
先ほどのように北条は茨乃の頬を掴んで引っ張る
「それにどんなに変でも友達だから」
北条が優しい笑顔でそう語りかけると、茨乃はハッとしたような表情になり急いで目元を腕で覆う
おそらくうれし泣きだ
「あらら、泣かせちゃった？」
「な、ないっ泣いてないよっ！　ボクそんなに弱虫じゃないし！」
強気になる茨乃だったが、そこが北条の母性本能をくすぐったらしく、ニコニコしながら茨乃が落ち着くまで頭を撫でるのであった
「そういえばさ、蒼ちゃん」
「にゅ。どうしたのカナっち」
「少し静か過ぎない？」
茨乃は顔をひそめる。確かに今自分達がいる場所が路地裏とはいえ、大きなビルがひとつ倒壊したのだ
普通、そんなことがあったなら一体は封鎖され、消防車やパトカーのサイレンで埋め尽くされる筈だ

「……もしかしてっ！」
茨乃は路地を走りぬけ大きな通りに出る
そこには休日を楽しむ人々の姿があった。ビルの大型ビジョンは人気ガールズロックバンド「アルタイル」のＰＶが流れていて、若者達の笑い声があちこちから聞こえる
「これって……」
北条もいつの間にか茨乃の横であっけに取られていた
「……まことが……真が危ないっ！」
茨乃は叫んだ後に、元来た道を走って戻り始めてた

一方、倒壊したビルの前では芦川と陣川が剣を交えていた
「くそっくそっ！」
「どうした少年！　こんなものか！」
だが「交える」と言うよりは、芦川が一方的に陣川の攻撃を受けるような状態になっていた
芦川は大きく後ろに下がり、息を整える
（この女……ウェポンの力抜きでも強いぞ……）
陣川は先ほどビルを破壊するためにウェポンの能力のようなものを使ったと考えられるが、今まで芦川と戦っていた間は純粋に陣川の剣の実力のみで挑みかかられているようだった
（てか、なんか不公平だろっ！）
芦川は内心叫ぶ。芦川が今まで見てきたウェポン使い達のウェポンは、何かしら特徴というか特殊能力みたいなものがあった
茨乃のウェポンには銃を自在に変える能力。信詩は死人をゾンビにする能力。大男は装着しているガントレッドを自在に空中で操る能力
そして今対峙している陣川は原理は不明だが、ビルを切り伏せるほどの力がある
なのに芦川のウェポンだけ特に何がおきるわけでもなく、ただただ『アームブレード』として存在するだけだった

「少年、友人を逃がした度胸は認めよう」
「そいつはどーも」
内心滅茶苦茶後悔していたが、芦川は口に出さなかった
「だが、実力を伴わなければその勇気も水泡のように弾けるばかりだ。努力を怠ったな少年」
陣川は構えを解き、芦川の周りをゆっくりと回るように歩く
（怠るほどの時間は無かった、って言えば怒られるかね……）
芦川は額の汗を左手で拭い、陣川の背後にあるものに注意を向ける
街のいたるところに設置されている赤く長い物体
（消火栓……）
信詩との戦いを思い出す。芦川を含めたウェポン使いは音楽が使えなければウェポンを使うことが出来ない
ならば今回もなんとか不意を突いて、陣川に消火栓からの水流を浴びせかけ彼女の音楽の元を潰すことが出来れば芦川にも勝機が巡ってくるかもしれなかった
（チャンスは一度きり、焦るな……焦るな俺……）
「終わらせる、逃げた少女の方も追いかけなくてね！」
陣川は急に走りだし、芦川に近づくと刀を浅く振る
「うわぁっと！」
芦川は紙一重で避けて逃げるように消火栓めがけて走り出す
「ほほう……ならば」
陣川は芦川を追いかけずにゆっくりと刀を鞘に収める
「？！」
その不可解な行動に疑問を抱きつつも、芦川は走り続ける
（あと……もうちょい！）
芦川が消火栓に手を伸ばせば触れられる距離まで来たところで

がくん！

突然芦川が膝から崩れ落ち、地面に倒れる

「な……ん……」
芦川はなんとか起き上がろうと上半身を起こす
その時芦川の目に映ったのは刀を抜いて、今にも何か切ったような後の姿勢の陣川がいた
「まさか……」
芦川の脳裏に陣川のウェポンで切られたビルが浮かぶ
「刀が……伸びた？」
ふと芦川の手に何か暖かい液体が触れる。手に触れた液体は赤黒く、鉄の臭いがする血だった
「だれの……血なんだ？」
陣川が一度構えをとき、怯えている芦川を見据える。距離的に3メートルは離れているはずなのに、芦川には陣川が近くにいるように感じた
「少年、キミの血だよ」
陣川は再び刀を数度、素振りをする
直後、ぷしゅ！という音と共に芦川の上半身から血が大量に噴出した
「おごえはぁっ！」
芦川は自分でも気持ちがなるような叫び声を上げながら地面に倒れる
（……なんか、やば……）
芦川の視野がどんどん狭まっていく。目が閉じつつあるようだ
（蒼と北条……逃げられたかな……）

……こと、まこと……かわ……あ…かわく……

（やべ、なんか幻聴聞こえてきた……んでもって……眠い）
芦川はついに耐えられなくなったのか、ゆっくり目を閉じ意識を手放した

「真！」
茨乃は血を盛大に傷口より噴出しながら倒れる芦川を見て叫んだ
それに陣川が気づき、刀を一度鞘にしまい茨乃の方を向く
「芦川君！」
北条はなりふり構わず芦川に近寄りゆさぶって、起こそうと試みる
陣川が制止しに来るのではないかと考えられたが、陣川は茨乃にしか興味が無さそうだ
「さて、サムライお姉さん。ボクぼ数少ない友達をこうしてくれた落とし前、キッチリとって貰うよ」
茨乃はヘッドホンを装着すると腕を大きく広げ、左右両方の手に拳銃を出現させる
「謹んでお断りさせてもらうよ、茨乃君」
陣川も刀の持ち手に手を掛け、いつでも抜刀できるよう身構える。その短い動作の中にも隙は感じられなかった
「ＯＫ！Ｌｅｔ’ｓ　ｇｏ！」
茨乃は拳銃をクロスさせ横に走りながら、陣川に拳銃を乱射する
「くっ！」
陣川もそれに合わせて走り刀を抜くが、弾丸の嵐を防ぐことが出来ずに数発当たってしまう
しかし、防弾仕様の黒いコートのおかげか、陣川は目立った怪我はせず健在だ
「はぁっ！」
陣川は一度立ち止まると先ほど芦川の前でやったように、刀を数回茨乃に向けて大きく振る
「よっとと……」
茨乃は一度銃撃をストップし、回避運動を取るように前転をする
すると、先ほどまで茨乃がいた辺りの路上に大きな傷が二本刻まれた
「なるほど、これは怖いっ」
肩を竦めながら再び間合いを取るように茨乃は走り出す。その顔

は純粋に見える笑顔でとても楽しそうに戦っている
「なにものだ？　こいつ」
陣川は顔をしかめる。対峙している敵の少女の不気味さに顔がゆがんだのだ
友人が殺されているのに、その仕草等は今の状況を最大限に楽しんでいるように見える
「ほらほら！　のろのろしてると月まで吹っ飛ぶよ！」
陣川は茨乃の調子に乗せられまい、と挑発もまともには聞かなかったが、次の瞬間陣川は目を見開く
茨乃がヘッドホンの曲送りのボタンを数回押すと二挺拳銃が光に包まれ、もっと長く逞しい銃が一挺、茨乃の手の中に納まった
「スナイパーライフル？」
陣川に銃の知識が無いのか、その銃をそうとしか分析できなかった。と、なると接近戦での戦闘は茨のにとって不利になるであろうとふむ陣川は標準を合わせられないように、右へ左へ体を傾けながら、茨乃に接近する
「無知は罪だよ！　お姉さん！」
それを見て茨乃はニッっと笑った
普通では茨乃のような少女では持てない様な重さの長い銃を軽々と両手で構えると陣川に向け発砲する
「ちっ！」
陣川が回避しようと体を動かすが、左腕を掠ったのかウェポンの鞘の部分を落としてしまう
陣川は鞘は拾わず、茨乃に接近する。だが突然視界が黒く塗り潰され躓いて転んでしまう
「なっ、どういうこと――」
陣川はそこまで言って息を呑んだ
先ほど弾が掠ったと思われるコートの左腕の部分が大きく破れ、血がとめどなく出ていた
血が急に足りなくなって、貧血に近い症状になったのだろう

「まさか……防弾仕様のコートを掠っただけで？」
「それがそうなんだよっ」
茨乃は先ほど陣川を撃った大きな銃を構えたまま、ゆっくりと陣川に近づいていく
「これは対戦車ライフル。出せるかなぁって思ったけど出せたね」
茨乃は近づきながら再びその対戦車ライフルを発砲した
「――っ！！」
放たれた弾丸は出血のショックで動けなくなっている陣川の右脚を掠める
その右腕も左腕同様にコートが破れ、血が噴出し始めた
「これはさ、戦闘機とかと同じ弾が撃てるんだよ。普通人に向けて撃ったらその人木っ端微塵だけど、チームのコートは防弾だからコレくらいで丁度いいねっ」
茨乃は対戦車ライフルを陣川に突きつけながら、楽しそうに笑う
新しいおもちゃを買ってもらった少年のような笑顔
「てゆーか、気づくまでこんなに時間が掛かっちゃうなんて、ボク本当に馬鹿だったよ」
陣川は苦痛に顔をゆがめながら茨乃を見上げる
なんとかして腕を振るい刀で切りつけようとするが、痛みで体がまるで言うことを聞かない
「普通ビルが壊れたらもっとすごい騒ぎになると思うんだ。でも救急車のサイレンどころか野次馬の声すら聞こえないんだよーなんで気づかなかったんだろ」
茨乃は対戦車ライフルの先を陣川の右脚の傷口に思いっきり押し当てる
「うあぁぁっ！」
「痛いよねーそう、今お姉さんが感じてるのはリアルな痛みだよ」
茨乃は蹲る陣川を蹴りつけた。陣川の頭に茨乃の足が当たり、陣川は額から血を流す
「でも、ボク達は今リアルじゃない。というかリアルな世界にはい

ない」
茨乃はここぞとばかりに陣川の頭を踏みつけ、地面に擦り付ける
陣川はなんとか逃げようとするが、茨乃の小さい体では考えられないような力で踏みつけられていて、身動きは取れなかった
「あはっ！　痛そうなお姉さんの顔最高！　でもボクの友達を巻き込んだんだからもっと苦しまなくちゃ！」
北条が自分の後ろで芦川を介抱しながらこちらを見ているのに、それを気にせず茨乃はサドスティックに笑い、大きく踏みつけた
「――っ！――っ！」
陣川はもう声すら出ず、蹴りつけられるたびに体を震わせるだけだった
「ボクがこんなことやってても誰も怒らない、関心を示さない。逆にお姉さんが芦川を切ってもなにも言われない。すごいよこれ……だけど所詮マヤカシなんだよ」
茨乃は足をどかして陣川の耳から耳掛けイヤホンを外す

すると
崩れたビルが
大きく切込みが入れられた地面が何事も無かったかのように元に戻っていき

「はっ？！」
「ひゃっ？！」
芦川が介抱していた北条のそばで目覚め、勢いよく起きた

「？……あれ、てか俺怪我してねぇ？」
芦川は自分の腹部を触る。脂肪があるわけでもなくかといって腹筋も無い自分の体だった。傷ひとつ無い
「って、ビル！　ビルが元に戻ってる？！」
芦川あたりを見渡す。町は変わりない様子だったが芦川達の周り

には人がいなかった。おそらくさきほどのビル崩壊の際に多くの人が逃げたのだろう
「あれ？　でもビルは普通になにもなくて……じゃあなんで人がいねぇんだ？」
「あ、芦川君一回落ち着いて」
北条は苦笑いしながらポンポンと芦川の肩を叩く
「真っ！」
「うぇ？！」
突如茨乃がウェポンを解除して芦川に抱きつく。その手には陣川から取り上げた音楽プレーヤーと耳掛けヘッドホンが握られていた
「まさか……あの人倒したのか？」
茨乃の肩越しに、蹲りながらこちらを鬼のような形相で睨み付けてくる陣川が見える
北条の視線が泳いでいるところを見ると相当酷い痛めつけかたをしたのだろう
「な、なぁちょっと一回離してくれ」
「うぇ？　あ、ゴメンゴメン」
茨乃は立ち上がって芦川から離れ、倒れている陣川を指差す
「あの人のウェポンの能力は多分『フェイク』」
「「フェイク？」」
芦川と北条が同時に首をかしげた
「うん、さっきカナちゃんは見たと思うけど、この先を少し行ったところの通りは人もいっぱいいたんだ」
「ああ、そうだったんだよ。芦川君」
茨乃達が逃げている最中に、静か過ぎることに気づき普段どおりの街の様子を発見することが出来た
「多分自分から見える範囲の人間に幻を、それも感触がある幻を見せられるんだろうね。周りで見ていた野次馬にも幻を見せて、リアリティを増させたんだよ」
芦川は自分の腹部を押さえる。確かに激痛や血が噴出すリアルな

感触を感じていた
　あの痛みが幻だったとは考えにくいかったが事実そうだったようだ
「ビルを壊す幻でボク達を混乱させ、その隙に自慢の剣技でグサリ。多分これが作戦だったんだけど、ボク達が予想以上に冷静に対処してたからかなり焦ったと思うよ」
　芦川は話を聞き終えると、立ち上がって陣川のほうに歩み寄る
「え、真なにしてるの？！」
「いや、大丈夫。ちょっと話を聞くだけだ」
芦川は陣川のそばでしゃがむと、彼女の顔を覗き込む
彼女の顔は靴の跡と血で汚れていた。右脚と左腕からは血が止め処なく流れている
「さーせん、とりあえずこれで我慢してください」
　芦川はパーカーを脱ぐと、それを一番出血が酷そうな陣川の右脚にきつく巻きつける
　陣川はうめき声をもらしたが、出血は多少良くなる
「……な、なにしてるの？　真？」
　茨乃が呆然とした顔で芦川を見ていた
「なにって手当て……」
「真はこの人に殺されかけたんだよっ？！　ダメだよ！こっちも止めを刺さないと！」
「あ、蒼ちゃん落ち着いてってば」
　北条が茨乃を制止させようと肩を掴むが、茨乃はそれを振りほどいて芦川に詰め寄る
「信詩の時も真はそうだったよ！　そんな風に優しくしてたら、いつか殺されちゃうよ！？」
「人ってのはひょいひょい、殺せるようなもんじゃないだろ！　それにこの人からチームの事を聞き出せるかもしれないだろ！」
　芦川も立ち上がり、茨乃のとの距離を詰める
極限まで追い詰められた二人だ。その緊張が途切れて、言い合いになってしまった

「二人とも、喧嘩はやめてほしいなぁ」
突然発せられた無邪気な声にその場にいた全員が振り向いた
そこには黒いコートにフードを被った『チーム』のリーダーがいた。フードで顔は良く見えないが、口元が笑っている事には気づいた
横にはもう一人いる。歳は陣川と同じくらいの女性だ
ゴスなドレスを着て日傘とピクニック用のバスケット持っている
黒く長い髪、というのは陣川と同じだったが、その髪はゴキブリの表面のように油が乗っているように見えた
「あぁら？　陣川さん、今日はボロボロじゃなぁい？」
ゴスドレスの彼女――黒栖は倒れている陣川を嘲笑う
「黒……栖っ！！」
陣川はゆっくりと立ち上がる。まだ左腕からは血が流れ出ていて、それを右腕で押さえる
「蒼……こいつら……」
「うん、『チーム』のメンバー。その一人、黒栖と『リーダー』」
芦川と茨乃も一度喧嘩をやめて、新たに現れた二人に向かい合う
「おや、知っていてくれて光栄だよ、茨乃君」
フードを被った少年と思しき人物が諸手を広げて、茨乃達に近づこうとする
「くるなっ！　動いたら撃つ！」
茨乃がヘッドホンをかけ、二挺拳銃のウェポンをいち早く出現させフードの少年に狙いを定める
この一連の動作はとても速く、芦川も目では追えなかった
「さすがだなぁ、オレ達から逃げながらそんな技術を習得するなんて。やっぱりウェポン使いはそうでなくちゃ」
「キミ達に煮え湯を散々飲まされたからねっ」
黒栖が日傘をクルクル回しながら、横目でフードの少年を見る
「ねぇ、リーダーぁ？私、まどろっこしいのは苦手なの。早く終わ

らせなぁい？」
フードの少年――リーダーは『しょうがない』とばかりに肩を竦める
「ほら、お姉ちゃんに会えるよ。出ておいで」
リーダーがどこかへ呼びかけると、彼の後ろから小学生くらいの男の子が出てくる
以前黒栖の暴力を受けていた男の子だった。顔には大きな傷やあざが出来ているその時のものだろう
「ワタル！！」
突然陣川が叫ぶ
それを見た芦川はすべてを悟った
「ききねぇちゃん……」
男の子はリーダーと陣川を交互に見ながら、何か迷う
「大丈夫、お姉ちゃんに会っておいで」
リーダーは屈んで男の子と同じくらいの目線になると、笑顔の口元だけ見せて安心させるように語り掛ける
「う、うん……」
ワタルと呼ばれた男の子はゆっくりと陣川のほうへ歩き出す
「わ、ワタル……」
陣川の目の端から何か流れ落ちた。おそらく涙だ
（もしかして……あの子を人質に取られていた？）
芦川は彼女が戦いを仕掛けてくる前に言っていた言葉を思い出す
『不本意だが、君達と戦う』
『不本意だが』
『不本意』
「なんか嫌な予感がする」

今までの出来事に呆気に取られていた北条が口を開く
芦川はその意味が分からなかった、だがすぐ思い知る事になる
「ねぇリーダー？」
黒栖が何か催促するようにリーダーを見る
「いいんじゃないかな」
そうリーダーが口にすると、黒栖が手に持っているバスケットを地面に落とした
「動いちゃダメって――」
茨乃が黒栖に銃を向けた瞬間、バスケットからクラシック音楽が流れ始める
陣川がそれを聞いたとたん、ハッとなり叫ぶ
「ワタル、逃げろ！　私のそばに来ちゃダメだ！」
「へ？」
ワタルと呼ばれた男の子が陣川まで1メートルというところで立ち止まる
その時、幾つもの洋剣――レイピアが現れワタルの小さい体に刺さった

突然の出来事に芦川や茨乃、北条は時間が止まったように動かなくなった
それは陣川も同じで、まるで銅像のように、剣が幾つも刺さったワタルを見ていた
「あっはー！　あんた達の顔最高っ！　そろいもそろって馬鹿みたい！」
黒栖が笑いながらパチンと指を鳴らすとワタルから幾つもの剣が抜かれ、ワタルの体からは夥しい血が噴出し陣川の顔にかかる
剣という支えをなくしたワタルの体はその場に崩れ落ちた
「弟君を殺してしまうのはあまり好ましくはなかった」
フードを被ったリーダーが銃を向けている茨乃をチラリと見るような素振りを見せると無抵抗です、とばかりに両手を上げる

「でも、陣川さんのウェポンは一度見破られるともう効果はない。もう芦川君達の暗殺には使えないんだ」
リーダーはコミカルに手を下ろし肩を竦める
悪い事は何もしていません、というその態度は黒栖よりも狂気染みているように芦川は感じた
「うわぁぁぁぁぁぁぁ！！！」
陣川が頭をかきむしりながら叫び、死体になったワタルに近づき雄たけびのような泣き声を上げる
「さて、じゃあオレ達は帰ろうか、黒栖」
「ホント、退屈なお仕事だったわ。リーダーぁ？帰りにご飯くらい奢って？」
一方チームの二人はまるで何もなかったのかのように帰り始めようと、後ろを向く

ドン！

茨乃の拳銃が吼える。その発砲音はいつもより逞しく聞こえた
だが茨乃が放った弾丸チームのリーダー達に対して放たれたものだったが、弾丸は先ほどワタルを刺し殺した剣が集まって盾のようになり、リーダーに当たりそうだった弾丸を直前で弾く
「どうする？　リーダーぁ？」
黒栖が忌々しそうに振り返り、茨乃を睨み付ける
「貴様らぁぁぁぁ！！」
ワタルの亡骸の前で泣いていた陣川が立ち上がり、日本刀のウェポンを出現させる
音楽の元は黒栖がバスケットから流しているクラシック音楽だろう
「そうだなぁ、少し遊んでいっても良いよ？　オレは帰っても良いかな？」
リーダーは振り返らずに歩き続ける
「待て！　腐れ外道ォ！」

陣川が負傷していない右腕で刀を持ち、走る
茨乃に撃たれ脚も負傷しているはずなのに、考えられないような速さで黒栖に迫る
「それって遊びって言うんじゃなくて仕事、よ」
陣川が黒栖に切りかかろうとしたところ、洋剣が出現し黒栖を守るように陣川の刀を受け止める
それを振り払うものの三本新しい洋剣が出てきて、陣川を刺し殺そうと空中を舞う
「そうだ芦川君、茨乃さん。変だと思わないかい？」
思い出したようにリーダーが口を開いた
「陣川さんのフェイクが切れたんだ。その割にはこの辺りに人がいないね」
その言葉に芦川と茨乃がハッと気づく。思い出されるのは信詩がゾンビを作るために行った大量虐殺
「このぉ！」
茨乃が二挺拳銃をリーダーに向け乱射する
だがリーダーは動かないのに弾丸が当たらない
「それじゃ、また今度」
リーダーはそう言うと走って逃げ始める
茨乃がそれを追い始めた
「真っ！　こっちはボクが追うから、そのゴス女を始末して！」
「わ、分かった！」
芦川はリーダーを追う茨乃の背中をチラリと見た後、音楽プレーヤーの再生ボタンを押してアームブレードを出現させる
「陣川さん！」
陣川は三本の剣に攻撃され続け苦戦していた
芦川は援護するようにその内一本をアームブレードで受け止め、吹き飛ばすように払う
「少年！　助かる！」
陣川も残った洋剣二本を刀の峰で折り、無効化させる

「北条！　逃げて――」
芦川が思い出したように叫ぶが、すでに北条の姿は見えなかった
その代わり、ポケットの中の携帯が小さく振動する
芦川がそれを取り出し、開くと
『ごめん！怖いから逃げたｍ（｜　｜）ｍ警察も呼んだから！芦川君たちも逃げて！』
と、北条からメールが来ていた
（多分来ないよ、警察の人）
芦川は携帯電話を再びポケットにしまう
理由は分からないが、警察はこのウェポン使いの戦闘を隠蔽しているところがある。こんかいも当てに出来そうにない
だが気づかないうちに逃げてくれていて良かった。彼女を守りながら戦うのは流石に無理だ
「あらぁ？二人掛かりとは卑怯なんじゃない？」
クスクスと笑いながら黒栖が言う
だが、笑っていた黒栖の顔に液体のようなものが掛かった
唾だ。芦川が唾を黒栖に吐きかけたのだ
「そっくりそのまま返してやる、ファッキンビッチ」
茨乃を真似て中指を立てて、汚いスラングを言ってみる
黒栖の表情はみるみる歪んでいった
「いいわぁ！　ほえ面かかせて上げるからぁ！」
黒栖は日傘を投げ捨てると両手を広げる
それが合図のように、陣川と芦川の周りを５０本以上はありそうな洋剣が空中に現れる
右を見ても剣、左を見ても剣、上も剣。逃げ場はない
「少年――芦川、やるぞ」
陣川が芦川と背中を合わせ、刀を構える
「そこのクソに一泡はかせてやりましょう」
芦川もそれに応え、アームブレードを体の前に掲げる
「それじゃぁ、死になさぁい！」

黒栖が指をパチンと鳴らすと、浮いていた剣が一斉に芦川達に向かって飛んできた

「なんでっ！　なんで当たらないんだよっ！」

茨乃は前方にいるリーダーに対し走りながら発砲するが、どれ一つとしてリーダーにダメージを与えられず、リーダーは止まらない

「オレに茨乃さんの弾は当たらないよ、当たったとしてもオレは倒れない」

リーダーは駅前のガラス張りのビルに逃げ込む

ビルの中は人おらず、静寂さが不気味だった

「もう逃げられないよっ、リーダーさんっ！」

茨乃が二挺拳銃をリーダーに向けて笑う

茨乃の経験では、茨乃以外のウェポン使いのウェポンはすべて近距離武器だ。近づかれなければ勝機は圧倒的に茨乃にある

また、茨乃はしっかりとヘッドホンを付け音楽を聴いているが、リーダーは特に何かを聞いているような素振りはない

ビルの中も音楽どころか人の気配すらしない

（こいつはウェポンを出せないっ！）

いままでチームの人間と何度も戦ってきてこの『リーダー』と戦うのは初めてだったが、何時も通りにやれば撃退できる。茨乃はそう確信した

「ラジオ体操の歌」

「は？」

リーダーが突然ニッコリ笑い右手を高く上げる

「ラジオ体操の歌が終わるまでに君を倒せたらオレの勝ち、逆に終わってもオレが勝てなかったら君の勝ち」

リーダーはそういうと高く上げていた右手で指を鳴らす

するとビルの中で夏の朝定番のあの歌の伴奏が大音量で流れ始める

（えっ……これって……）

その演奏はヘッドホンをつけた茨乃にでされ聞こえるほど大音量

だった。茨乃のヘッドホンから流れるｃａｐｓｕｌｅの『Ｐｌａｙｅｒ』がかき消されるほどの音量だ

『あたーらしい、あっさがきた』

茨乃が呆気に取られているうちにリーダーが走って近づいてくる
茨乃はハッと二挺拳銃を構え、まっすぐに走ってくるリーダー向けて乱射

『きぼーうのあっさーだ』

リーダーは両手をかざす。すると、二挺拳銃から放たれた銃弾がまるで透明の壁に当たったのかのようにひしゃげて、その場に落ちる

『よっろこーびにむねをひーらけ、おおぞーらあーおげー』

（っ！　それなら！）
茨乃はさきほど使用した対戦車ライフルを出そうと曲を送りをしようと、ヘッドホンの曲送りボタンを押す
だが、彼女が持つ拳銃は対戦車ライフルにはならず二挺拳銃のままだ
（なっ！　なんで変わらないのっ？！――まさかっ！）
大音量で流れるラジオ体操の歌で、茨乃のヘッドホンから流れる音楽を『認識』出来ないためか、銃の変化という茨乃のウェポンの能力が使えなくなっている

『らーじおーの、こえにー』

「はぁっ！」
リーダーが戸惑う茨乃の腹部にパンチを入れる

「ぐはっ」
茨乃の体から酸素が無くなり、腹部を押さえてその場にしゃがみこむ

『すっこやーかな、ゆめをー』

「よっと！」
それに止めを刺すように、リーダーが茨乃を蹴り上げる
先ほどの陣川との戦いの再現のようだった
「――ったぁ！」
茨乃は、完全に倒れ込む

『このかおーるかぜーに』

「このっ！」
茨乃は拳銃を構えたまま起き上がろうとするが、リーダーに両腕を押さえられ仰向けに倒される
「っ！　離せ！このっ！」
リーダーは覆いかぶさるように体を茨乃に密着させる

『ひらーけよ　それ』

茨乃は必死に振りほどこうともがくが、体重を乗せられているため小柄な茨乃では脱出は難しかった
リーダーが歌にあわせてカウントダウンを始める

「いーち」

茨乃はフードから覗くリーダーの目が見えた
その目は笑っている口元とは大きく違い、憤怒しているように見

えた
「ひっ」
その目の恐怖に茨乃の体がこわばる
「にーい」
なにをされるのか、どんな攻撃がくるのか茨乃には想像できなかった
「たすけっ、たすけてよっ……まこっ」
恐怖で助けを呼ぶことさえ、今の茨乃にはろくに出来ない
「さん」
リーダーが最後のカウントを終えたとき、伴奏のかわりに茨乃の悲鳴がビルの中を木霊した
「最後！」
芦川が飛んできた洋剣を叩き落すように切り伏せ、踏みつける
先ほど出現した洋剣はすべて陣川と芦川の連携によりすべて跳ね除けられた
「ま、まさかここまでやるなんて……」
黒栖もこの連携には困惑気味で、後ろに後ずさる
「まさかここでトンヅラはさせねえよ」
芦川がアームブレードを突き出す
「ワタルの仇、取らせてもらう」
陣川も日本刀を構え、ゆっくりと黒栖に近づいていく
「悪いけど、あたし負けるのが嫌いなの」
黒栖は地面に置いたバスケットを持つと『空に浮いた』
否、洋剣のウェポンを次々呼び出して、階段のように使って空中を移動しているのだ

「っ！　逃げるなぁぁぁ！」
陣川は日本刀を投げつけて黒栖に当てようとするが黒栖が持つバスケットからの音楽をウェポンの源にしていたため、それが離れていって『認識』できなくなり、陣川のウェポンは霞のように消えた
「すまん……ワタル、仇を……とれなかった」
陣川は開いていたワタルのめを閉じ、その顔の上に飾り気のないハンカチを乗せた
「私の弟だ……やつらに人質に取られて、私が言う事を聞きさえすれば命は取らない、と言う約束だった」
「俺達を殺しにかかったのもそういう理由ですか」
陣川は芦川のほうは見ずに頷く
「許してもらおうとは考えていない。私は唯一の肉親の方が見ず知らずの君達より大切だった。この場で君に斬り殺されても文句は言えない」
不謹慎ではあるがこの人は生まれてくる時代を間違えている、と芦川は思う。ここまで誠実で戦国時代にでも生まれていたら、歴史に名を残しているだろう
「でも、その弟さんの分まで貴女は生きなきゃダメなんじゃないですか？」
芦川の口からは一般的で、使い古された道徳の言葉しか出てこなかった
だが、復讐に走るあまり命を危険にさらしすぎたり、芦川に殺されても抵抗しない、というのはヤケになりすぎだ
「……君の言うとおりだな。私は――――」
陣川が倒れそうになり、芦川がそれを受け止め支える
「っと、怪我してるんですから……」
陣川の体はスリムな外見とは対照的に、運動音痴の芦川では支えるには少し重かった
「すまない……だが私の事より君の相棒……茨乃君が心配だ」

あれだけ痛めつけられたと言うのに、陣川には茨乃を心配する余裕がある辺り、大人の度量を感じる
「茨乃君が追ったリーダーは最強のウェポン使い、少なくとも曲者ぞろいの信詩や黒栖をまとめられるだけの、実力があるはずだ」
確かに強敵ぞろいの『チーム』をまとめる彼が、そう簡単に負けるはずも無いだろう
芦川はゆっくりと陣川を座らせる
「じゃあ、あいつの様子見てきます。また後で」
芦川は茨乃を探しに駆け出していった
「……君のようなものに、涙も見せたくないしね」
芦川が離れていって見えなると陣川は呟き、ワタルの亡骸の横で静かに泣いた

茨乃とリーダーが居そうな所の見当はすぐについた
茨乃の放つ発砲音が芦川と陣川が戦っているときも微かに聞こえた。そしてなにより…
（あのクソでかいラジオ体操の歌……）
芦川達の戦闘中、しっかりと聞き取れるラジオ体操の歌が聞こえていた
もし、この緊張状態の町であんな事をやらかす奴がいたとしたら、間違いなくチームのリーダーだ
（通りすがりの狗飼か……）
芦川は苦笑しながら、目当ての場所に着く
中に図書館と美術館がある、ガラス張りの9階建てのビルだ。茨乃が銃弾を外したのかガラスの一部に穴とひびが入っている
「蒼！　大丈夫か？！」
芦川が自動ドアから中に入ると、鉄の臭いが鼻を突いた
（血か……？　もしかして茨乃がリーダーを倒した？）
だが、それは考えにくかった。陣川は『リーダーは強敵』と言っていたし、なにより茨乃なら戦いが終わったらすぐにぴょこっと出

てきそうなものだ
「まこ……いる……？」
「蒼？！」
微かにだが茨乃の声が芦川の耳には届いた
芦川は辺りを見渡し茨乃を探す、そして茨乃はすぐに見つかった

床に仰向けに倒れ、全身を刃物のようなもので切り刻まれた状態の
茨乃　蒼が

ｔｏ　ｂｅ　ｎｅｘｔ　Ｔｒａｃｋ！！

Track7－Breaking The Habit（前書き）

※長めの文章注意

・前回までのあらすじ

襲ってきた陣川に窮地に追い詰められる芦川。だが茨乃が陣川のウェポンの能力に気づき、ウェポンの特性を活かし近接攻撃の陣川を打ち破る。だがそこに現れたのは『チーム』のウェポン使い黒栖（くろす）とチームのリーダーと思しき人物だった。黒栖は陣川と芦川の連携で撃退するが、茨乃がリーダーとの戦いに敗れ重傷を負う……

Track7－Breaking The Habit

なんでこんな事になっているのかは自分でも良く分からない
強いて言うなら些細な事がきっかけだった

人から言わせれば些細な事じゃない、とのことだったけど自分の中で大事にしたくなかったから、それを軽んじていたんだと思う
だけど、いざ気づいてみるとそれは――

芦川がゆっくりと顔を上げる、無機質な壁
せわしなく動き回る白衣を着た医師や看護師たち
横には北条が座っていて、俯いたまま何も喋らない
芦川と北条は七石総合病院という七石市では一番大きい病院に来ていた
「処置、いつ終わるのかな……」
「いつだろうな」
芦川と北条は処置室、と書かれた部屋の前のベンチに並んで座っていた
茨乃が駅前でチームのリーダーに負傷させられた後、北条が警察に連絡してくれたかどうかは分からないが、すぐに救急車が来て芦川と瀕死の茨乃を乗せこの七石病院まで来た
パニックになった芦川は北条と狗飼に連絡、二人はすぐに駆けつけてきてくれた
「おーい、ジュースを買ってきたぞよー」
その狗飼がペットボトル飲料を三つ抱え、待合室の方から戻ってくる
「あ、わり……」
「フフーフ、今日は特別に２４０円で売ってあげるぞよ」
狗飼は茶化すように言ったが、芦川はボーっとしたまま自分の財

布を取り出し始めた
「ヘイまこまこ、冗談だ。きぃしっかりもてや」
狗飼が芦川の頬をペチペチと叩いて、芦川の膝の上にペットボトル飲料を置く
芦川はゆっくりとした動作でそれを取り、中に入っているスポーツドリンクを少しづつ飲み始めた
それを見ると狗飼は満足そうに頷き、北条にまるで汚物を見るような視線を向ける
「で、くそったれギター侍にも買って来てあげましたよ」
狗飼は嫌々そうに買ってきたペットボトル飲料を差し出す
北条も少し顔を上げ、ペットボトルを受け取り一気に煽る、が
「ブーッ？！」
北条はそれを一気に噴出した。どうやらとても不味かったようだ
「な、な、な、な、にこれ？！　ワンワン何私に飲ませたぁ！」
「ハーッッハッハッッハ、フーン！！　かかったな！アブリルラヴィーン気取りのエセシンガーが！！」
狗飼は腰に手を当て、まるで鬼の首を取ったような高笑いし始める
その笑い声は病院じゅうに響き渡り、不治の病に冒されこの七石病院に入退院を繰り返し、生きる事を諦めた中学2年生の女の子に「笑うってすばらしい！」と生きる意味を与え、手術を受けると事を決意させ、無事退院
その後、その女の子が悩める若者達うを笑ってサポートする教師になる、というどこぞの暮れなずむ先生もびっくりのストーリーが始まるのだがそれはまた別のお話
「ガチムチ製薬からの新発売乳酸菌飲料『ウホホホンヨーグルト！！』濃厚な飲料ヨーグルトで、天下の病院様じゃ言えないところで大人気だ！」
直後、通りすがりの看護士さんの持つカルテの角が狗飼の頭を狙い撃ちし、それ以上話すとＰＴＡから苦情が来そうな内容の発言をストップさせた

「芦川さーん、入っても大丈夫ですよ」
処置室の中から看護士さんの声が聞こえ、芦川がハッと顔を上げる
北条と狗飼は「一人で行ってこい」との事なのか、動かない
芦川は立ち上がると足取り重く処置室の中に入っていった

「簡潔に言いましょう、命に別状はなし。助かったわ」
袖のところに血がついた白衣を脱ぎつつ、３０代後半の女医さんがそう芦川に告げる
短い髪にメガネをかけていて学校の保健室にいたらさぞ人気だろう
処置室にはベッドが三つ並んでおり、茨乃もその内一つに横たわっていた
「ほ、本当ですか？！」
「落ち着いて聞きなさい、まだ終わってません」
女医は腰を下ろすと数値が書かれた書類を芦川に見せてきた
「なんですか？　これ」
「茨乃さんの血液の種類を表した紙だ。普通ならここにＡとかＢとか出るはずなんだが……」
彼女が指を指した場所には『ｅｒｒｏｒ』とある
「これ、どういうことですか……」
「英語は苦手なのかな。エラー、と書いてある」
「いや、それは分かるっすけど……普通はＡとかＢなんですよね」
女医さんはため息をつき、後ろ頭をかく
「私も不可解なんです。彼女はもしかしたら『ボンベイ・ブラッド』かもしれない」
「ボンベイ？」
聞きなれない単語に芦川は聞き返してしまう
「人間の血液型は大きく区分すると４つなのは知っているな？　Ａ、Ｂ、ＡＢ、Ｏ」
女医さんは指折り数えて説明し、最後に残った小指を芦川の前に出す

「だが、中にはそれらの区分に当てはまらない血液型がある。俗に言う『稀血』です」
「茨乃がそれだと？」
女医さんは芦川の質問に肯定も否定もしない
「だがボンベイ等の稀血も一応は検査で分かるんです、でも今回は完全にエラー、もしかしたら……」
女医さんはそこで言葉をにごらせた
「ま……こ？」
「蒼……」
ベッドで茨乃がわずかに手を動かした。芦川はそばに座りその手を握る
「わりぃ……助けられなくて……」
「ま……いるんだね……」
茨乃はうわ言を言ってすぐに目を閉じた
芦川は泣きそうになるのを堪え、手をゆっくりと離した
（１０年たっても変わってないじゃないか……）
「さて、確か保険証がないんでしたね」
芦川が女医さんの言葉で現実に引き戻される
記憶がなく、チームに捕らえられていた茨乃に身分証明書などあるはずもなかった
「医療費全額負担ですよね……」
「一週間は入院してもらうことになりますね」
現実は厳しく芦川達にあたるのだった

「まぁ、入院費ならオレも出すから、落ち込まないのまこまこ」
「そういうわけにもいかねぇよ……」
芦川は病院の待合室の椅子で、処置室の前にいたときよりも深くうな垂れなる
病院での一週間分の入院費が芦川の財布で賄えない事ぐらい知っていた

いっそこの場で「コイツなんか知りません」と言えばそれまでなのだが、芦川にはそれがどうしても出来なかった
「とりあえずさ、詳しく話してもらえないかな？　今芦川の周りで起こっていること」
北条が顔をしかめながら提案する。彼女は先ほどの飲んだ不味いジュースの余韻がまだ残っているようだ
「分かった、今から話すことが……俺が知ってる事全部だ」

「なぁ、ちょっとやりすぎなんじゃないか？」
大男、神崎が腕を組みながら入り口に立つ黒栖に文句を言う
チームがアジトにしているプールバーは今日も薄暗く、明かりもわずかについているだけだ
「あらぁ？　神崎ちゃんはお仕事に連れて行ってもらえなかったからむくれてるのぉ？」
神崎はまるで子供に接するような口ぶりで神崎を挑発する
彼女はお気に入りのビリーヤード台の上に座り、携帯電話を取り出し操作を始めた
神崎の話には興味がない、とでも言いたげだ
「違う、『殺しすぎ』とゆうておるんじゃ」
神埼はカウンターの隅においてある小さなテレビの電源をつける
緊急特別番組が流れていて、ニュースキャスターが駅前で慌しく原稿を読んでいた
『今日昼ごろ、七石市駅前でガス災害があり付近にいた市民や観光客、および……』
テレビの中ではブルーシートで駅前のデッキなどが覆い隠され、立ち入り禁止のテープがそこかしこに貼ってある
「あら、ガス災害？　お気の毒に」
「冗談はその奇抜な服だけにしてくれんかのぉ」
キャスターは続ける
『七石市の発表によりますと、今回の集団ガス中毒は、１０年前起

きたガス事件のものとは無関係で、昨今日本やアメリカ政府に対しテロを行ってきたテロ組織の犯行との見方を……』
「ハッ！　政府はビビッておるのか。全部わしらの仕業じゃと言うのに！」
「あんた、本当にあたし達の味方なの？」
黒栖の突っ込まれ、バツが悪そうに神崎は咳払いをする
「ともかく、この虐殺……おぬし等が芦川とかいう小僧と戦う前にやったこのなのじゃろう？」
神埼が顔をしかめるのを見ると、黒栖はとても楽しそうに笑ってビリヤード台から降りる
「あらぁ？　貴方だってガキを炙り出すために殺したじゃなぁい？」
「お主らは殺しすぎるとゆうておるんじゃ。信詩もそうじゃった、必要最低限に傷つけ、わし等のの存在を誇示する。それが本来の理念だったはずじゃ」
黒栖は神崎に近づき彼の顎を指で優しくなぞる
「神崎ぃ？　私たちは変わらなきゃダメなのよ」
神崎はその手をさっと払い除ける
「ふふっ、助けを求めて、手を指し伸ばさない奴は刺し殺す。行動理念は変わってないわ、安心なさい？」
黒栖は「じゃあ、私少し休むわ」といってバーの奥の方へ向かった
チームがアジトにしているこのプールバーは多少改造されていて、メンバーが奥で寝泊りできるようになっている
黒栖の姿が見えなくなったのを見計らい、神崎はコートのポケットから一枚の写真を取り出す
そこには１０年前の神埼、信詩、黒栖、リーダー、そしてその後ろで白髪交じりの男性がにこやかに微笑んでいるというものだった
一見すると子供に囲まれる父親、といった感じだ
「大志のため、か。中途半端な革命家じゃ。わしは」
その写真を眺めながら、神崎は一人呟いた

「っと。これが『ＤＡＮＤＡＮバーガー』から駅前までに起きた事すべてだ」
芦川は話に区切りをつけた。一応、自分が記憶している限りで起こったことすべてを話したつもりだ
茨乃と会った事、大男、チーム、ウェポン、陣川
何か口を挟まれるかと思ったが、北条も狗飼も最後まで黙って聞いてくれた
「なるほど、大体の話は分かったよまこまこ」
狗飼は腕を組んで頷く。北条は一度ウェポンを見た事があるため、話もすぐに理解できたようで同じく「オッケー」と小さく言った
「狗飼、なんならお前にも見せるか？　その……」
「あーいいよいいよ。手放しで信用するのも親友ってもんじゃないかい、まこまこ！！」
親友だからこそ、咎める所は咎めようぜと芦川は言いたくなったが、ここは狗飼の好意に甘える事にした
「でもさ、変だなって思った」
北条が口を開き、疑問を口にする
「いやぁ、カナの顔は前から変でしょ」
茶化した狗飼が北条の持ったギターのフルスイングを頭に綺麗に喰らい、鼻血を出しながら綺麗に吹っ飛んで行った
「で、何が変なんだ、北条」
芦川は狗飼を無視しながら、北条の質問を聞く
「うん、なんかその『チーム』って人達の目的がわかんないじゃん」
芦川は押し黙る。確かに彼らの目的がいまいち分からない
当初は捕らわれていた茨乃が彼らの資金を持ち出して逃げたため、その報復と思った
「だけど、報復の割にはだいそれてるよなぁ……」
芦川はイライラを隠さずに髪の毛を掻く
「その疑問には私が答えられそうだ」
騒がしい病院の待合室に、凛とした声が響く

芦川と共に黒栖と戦った陣川だった。いまは髪は下ろし、チームのコートも脱いでラフな格好だった
陣川も負傷していたためこの病院で治療を受けたのだろう。だがその足取りからは負傷している素振りは何処にも見られなかった
よく見ると陣川は何か頭のようなものを持っている
鼻から血を出している間違いなく狗飼の頭。残念な事に首から下の体も健在だ
「さっきそこで転がっていた。芦川君、君の知り合いか」
陣川がそう言った途端、死体のように見えた狗飼は急に動き出し、あろうことか陣川の太ももに絡みついた
「あぁん！　お姉さまアイツらなんかしりませぇん！　うっは、すげぇやわらけぇっす！！」
狗飼は気持ちの悪い声を上げながら、陣川の太ももに頬擦りし始める。ここまでやったら基本的に通報ものだが――
「？　うごはっ！」
陣川はコアラよろしく脚にしがみついていた狗飼を引き剥がし、床に叩き付けるという非常にバイオレンスな報復を行い、彼を許した
「話を戻そう、君達が『チーム』と呼ぶ連中はウェポンの『集約』が目的らしい」
「集約？」
北条の疑問符に陣川は頷いて話を続ける
「芦川君や茨乃君、そして私が使うウェポンはどうやら一つのキーではないか、と奴らは考えている」
「俺達のウェポンが、キー？」
「彼らの見解だと１０年前の実験の産物、ウェポンは個々では不完全だが特定のウェポンの因子を組み合わせると真の力を出せるらしい」
「その因子ってやつが俺達って事ですか」
芦川は質問したが陣川は答えない。しばし沈黙が訪れる
「もしかして陣川さんも詳しくは知らないの？」

突然ひょこっと顔がぐちゃぐちゃになりつつある狗飼が出てくる
今度は自分の番かと芦川は拳を握ったとき、以外なことに陣川が頷いて肯定した
「すまない、偉そうに講釈したが私もそれが本当の理由か分からないんだ」
陣川によると今の話も以前戦ったことのある、信詩と黒栖の会話を盗み聞きしてきいた情報だそうだ
「だがひとつだけ分かっている事がある」
陣川は一呼吸置いて仕切りなおす
「チームは我々を狙ってはいる、だが我々が倒れればおそらく奴等はこのウェポンを悪しき道に使い七石に住む人、いや日本中の人間を不幸にするだろう」
芦川も同意見だった。少なくとも『ＤＡＮＤＡＮバーガー』での大男の殺戮行為、信詩の人を道具のように扱う様、そして今日の陣川の弟、ワタルの殺害
待合室にはテレビもあり、そこでは駅前のガステロのニュースが流れている
だがあれも嘘っぱちだろう。おそらくチームが仕業の虐殺をああやって隠蔽しているのだ
このままだと、チームはもっと多くの犠牲を出すであろう
「我々が生きていれば、誰かを巻き込む。だが、その悲しむを少なくするために芦川君、私と協力してチームを一緒に倒さないか？」
陣川が座っている芦川の前に、手を差し出してくる
「ま、待ってくださいよ！」
それを見た北条が急いで止めに入る
「芦川君は今まで普通の、一般人だったんですよ？！　なのに急に『戦え』って、酷なんじゃないですか？」
陣川は押し黙る。確かに一般人の目からすればこの光景は異常なのだろう
実際、陣川もバツが悪そうに手を引っ込めた

「いや良いんだ、別に」
その気まずい空気を壊すように芦川は立ち上がった
北条が反論しようと口を開くが、その前に芦川が喋りだす
「北条が反対する気持ちも分かる、でも俺にも理由があってここまで色々やってきたんだ」
「理由って？」
芦川は一度口を開くが、躊躇って答えなかった
「……意味わかんない」
北条が呆れたように悪態をついて、一人どこかへ歩いていく
「にゃっはっは、困ったねまこまこ？」
その姿を見送りながら狗飼は肩を竦める
彼女の計画通りに自分の身だけ守ればいいのかもしれない。だが芦川にもチーム戦いたい理由があった
「狗飼わり……なんつーかもう引き下がれないところまで行っちゃったんだわ。だから……その」
芦川が言いにくそうに口をもごもご動かしていると、狗飼がやれやれとばかりに掌を天に向ける
「やれやれ、フォローしろってことだね？」
「今の俺じゃ、北条は話を聞いてくれないだろうから」
芦川は苦虫を噛み潰したような顔で北条が歩いていった方向を見る。入り口付近には小学生ぐらいの男の子の退院を祝っている家族がいた
「あういう笑顔を消さないため……ってのにＤＡＮＤＡＮバーガー１セット」
狗飼が芦川の肩を数回叩いた後、入り口の方へ通り過ぎていく
「オレはさ、真」
狗飼は振り返らずに芦川達に背中を向けたまま語り始める
「音楽は神聖なものだって考えてる。だからジミー・ヘンドリックスもマキシマムザホルモンも好きじゃないよ。下品な言葉を吐きながらギターに火つけるのは最低だと思うのさ」

全国の彼らのファンが聞いたら集団リンチをしかねない暴言を狗飼は吐く
「だけどね」
「だけど？」
狗飼が首から上だけ動かし、芦川と陣川を見る
「その神聖な音楽を『武器』にする奴がオレはもっと嫌いなんだと思う」
芦川は狗飼の目に先ほどのおふざけの時とは違う光が宿っているように見えた
「やるからにはキッチリやろうよ、まこまこ」
そういうと狗飼はいつもの人懐っこい笑顔に戻り、北条を追いかけるべく走ってその場を去った

狗飼を見送った後、陣川と芦川は茨乃の病室に来ていた
主治医によれば
「綺麗な切り傷だから、跡を残さないようにするのも簡単だったよ」
とのことだ
病院にはチームの襲撃に巻き込まれた一般人が多く運び込まれていて、茨乃のベッドの周りにあるベッドも茨乃と同じくらいの女子や歳を召したお婆ちゃんが寝ている
「ありがとう、まずは感謝する」
「いえ、多分これから俺陣川さんに迷惑掛けちゃうと思いますから」
茨乃は時折、怖い夢でも見ているのか体を強張らせていて、芦川が茨乃の手を握るとそれが少し落ち着くのだった
「茨乃君のために、君は戦うのか？」
ベッドの向かい側から陣川が問う。芦川は重々しく口を開いた
「それもあります、でも他にも考えはあるんです……」
芦川は息を落ち着かせる。緊張で口の中が乾燥してしまう
芦川は意を決したように立ち上がり陣川の前に立つ
「陣川さん、無茶を承知でお願いしたい事があるんです」

「なんだい？」
芦川は綺麗に頭を下げる
「陣川さん！　俺を――」

翌日失恋から復活した脇田が芦川達のクラスに入ってくる
「さて、一週間以上いなかった分の遅れを取り戻すぞー。出席を取るぞ、芦川！」
名前のあいうえお順で、あ行の芦川が一番最初に呼ばれるが返事が無い
「？……珍しいな、あいつが欠席とは」
「センセー、アイツがなんで居ないか知りたくないですかー？」
「あー乾―」
脇田は狗飼の分の点呼を飛ばして次の出席者の点呼を取る
「先生オレの出席も取ってよぉぉぉ！！」
今日は珍しく狗飼が授業にキチンと出ていた。出席ギリギリの彼にしては珍しくノートまで広げている
脇田はめんどくさそうに狗飼のほうを見る
「で、なんで芦川は休みなんだ？」
「オレの出席も取ってよー！」
「いぬ『い』といぬ『か』い、なんだからボクの方が出席先でしょ」
狗飼の隣の席の乾君が、冷静な突込みを狗飼に浴びせた
「三度目は聞かないよ。狗飼、芦川の欠席理由は」
「修行」
「次、内田―」
「全力スルーされたぁぁぁぁ！！」
狗飼の魂の叫びが教室にこだまするが、誰一人その言葉を信用しなかった

「あ、カナっちー」
茨乃がベッドから少し体を持ち上げる。突然の見舞い客に少し戸

惑いながらもいつもの笑顔を見せる
「にっ、おはようございますだ」
北条がその見舞い客で、ベッド脇の椅子に座り背負ってきたギターケースを壁に立てかける
「なんの本読んでたの？」
カナは茨乃の上に開いた状態で置いてある雑誌に目が向く。表紙には人気バンド『アルタイル』のボーガルのアップバストアップだ。脇には赤いギターも写っている
「なんか音楽雑誌、これとスポーツドリンクが置いてあった」
茨乃は突然むすっとして、北条から視線を外す
「真、これだけ置いてすぐ行っちゃうんだもん……学校とかあるのは分かるけどさ……」
「んー芦川君なら、今日学校来てなかったよー」
北条は特に気に掛ける事も無くサラリとそれを告げるが、それを聞いた茨乃は首をひねるばかりだった
「うー？　じゃあ、なにしに行ったんだろ……」
「そうだ、蒼ちゃんその雑誌見せて」
北条は返事を聞かずに雑誌を取って表紙を眺め始める
「あ、カナっちも『アルタイル』好きなのかな？！」
怪我人であるはずなのに、蒼は前のめりになって北条の方へ寄ろうとするが、点滴のチェックにやってきた看護士に無理やり寝かしつけられた
「うーん……好きっていうよりは……」
「あれ？　カナっち硬いバンドは嫌い？」
「嫌って言うわけじゃないの、ただねぇ……これ、写真映り悪いかなって」
北条が雑誌を返し、茨乃もその言葉を確認するように雑誌の表紙を見る
ボーカルの長髪が綺麗に写っていて、茨乃にはとても魅力的に見えた

「あー……でもそんな事無いと思うけどなっ、ボクは」
それでも北条は納得できないようで、首を横に振って否定する
「そうかなー、私写真映り昔から悪くてさ。この写真もちょっと自信ないんだ」
「そんな事無いって！　これカッコ可愛く取れてると思―――」
茨乃が笑顔のまま止まってしまい、次の瞬間
「わ、わ、ｗｈａｔ，ｓ　ｈａｐｐｅｎ！！　うひ」
茨乃は叫びまたまた看護士に頭を叩かれ制止するが、それでも興奮は収まらない
「え、あ、いや、確かに高校生がボーカルやってるって聞いたけど、そ、そ、それがが」
「ほら、こんなものも」
北条は壁に立てかけていたギターケースからズルリとギターを取り出す。それは雑誌の表紙で『アルタイル』ボーカルと一緒に映っている赤いエレキギターだった
「ふぇ、フェイク！　ダウト！」
「残念、モノホン」
「え、えぇー……」
茨乃はにわかに信じられず、苦笑いする
「む、信用してないなぁ……あ、メンバーのベースの子呼ぶ？　暇―ってさっきまで言ってたし」
「いや！　本当に来るとボクの心臓がもちそうに無いからやめてっ！」
茨乃は点滴の針が刺さっていない方の腕を北条の前にかざし拒否する
「ぬふふー……まっこれでおあいこにしてもらえないかな？」
「ふぇ？」
「蒼ちゃんの素性とか、『うぇぽん』っていう武器の事とか、芦川君から聞いたんだ」
北条が言いにくそうに俯く。芦川から事の真相を聞いたときに、

芦川が心底辛そうに話していたのを、北条は思い出したのだ
無理に聞き出すべき事じゃなかったのかもしれないと、今は反省しているようだ
「べ、別にいいのに……」
「なんか、私一人だけって知ってるのもアレだしさ。隠し事はロックじゃないし」
北条は恥ずかしそうに笑う。表紙に映っているボーカルは長髪で、北条は短髪だ。ライブやテレビに出る際にウィッグをつけたりしているがその内「切った」ということにしてしまいたかった
「あうー……衝撃の事実で頭がオーバーヒート……」
「あ、蒼ちゃん?！」
茨乃は頭を抱え、体をくらくらさせた後に「ボフッ」っと音を立てながらベッドに倒れこんだ

放課後、狗飼は足を引きずりながらとある場所へ向かっていた
「ちっくしょ、あの三十路教師めっ！　オレにばっかり当てやがって……っ！」
狗飼は今日、久しぶりに学校に顔を出した事をいいことに、教師達からの「狗飼、コレを答えろ」攻撃に晒されたようだ
「いつか復讐してやるんだ！　プンプン！」
今までサボってきた事の反省はしていないようだった
「とうちゃーく、あの二人はどうなった事でしょうー」
狗飼が入っていったのは廃校になった小学校だ。近々新しく建て替えられるらしく、今はもぬけの殻だ
そんな誰も居ないはずの学校の敷地から声が聞こえる
「スピードが落ちているぞ！　もっと早く走れ！」
「はい！」
狗飼がグラウンドの方へ足を運ばせると、仁王立ちの陣川とグラウンドを走るジャージ姿の芦川が居た
芦川は相当走りこんでいるようで、その顔を汗が伝い、息は完全

に上がっていた
「ん？　君かどうした」
狗飼に気づいた陣川が振り向く。夕日をバックにした彼女は普段よりも魅力を上げている
「学校をサボってまで修行に打ち込む友人を生暖かく見守りに」
「なんなら君も走るかい？」
「謹んでお断りします」
陣川は少し微笑みながら狗飼を見るが、芦川に視線を戻すとあっという間にその表情を曇らせた
「しかし……」
「あいつ、運動神経ないでしょ」
陣川は重々しく頷く。今日一日芦川を鍛えてみたが、体力がそもそも無くこうやって体力付けに励んでいるのだった
狗飼はニヤリと笑って陣川の横へ近づく
「ただ、ガッツはあるでしょ、あいつ」
陣川はチラリと狗飼を見たが、その表情は硬かった
「それが良いのか悪いのか……私には良く分からなくなってきたよ。芦川っ！　今日は終わりだ！」
それを合図に芦川が減速し始めるが――
「ぼへっ」
「あ」
体力の限界が来たようでその場に崩れ落ちた

「うっ……わりぃ」
「まー困ったときはお互い様ぜよ、まこちん」
芦川は狗飼に手伝ってもらいながらベンチに腰を下ろす
一日中続いた鍛錬で足は震え、体のあらゆる部位が痛みという方法で悲鳴をあげていた
「滅茶苦茶疲れた……」
「オレも疲れた。聞きなれない授業を聞いてノート取ってさ」

狗飼はノートを芦川に手渡す。彼が今日まじめに授業に出ていたのは、陣川に修行を頼んだ芦川の変わりに授業を聞くためだった
芦川がノートを開くと、ノートに授業内容がびっしりと書かれていた
「ホントわりぃ……借りるよ」
「ふっ、まこちん。オレをそんなに軽く見ないでほしいなぁ」
狗飼は不適に笑い、次々とノートを芦川に押し付ける
「全部あげるよ、朝にでも返してくれればその日も書くから」
「狗飼……お前……」
「なぁに、これからクソ野郎共をぶちのめしに行くヤツに、退屈な授業の再現なんてさせられないよ」
狗飼はなんでもない、とばかりに威張って見せる。そんな狗飼を芦川は頼もしく感じてしまった
「はぁ……なんか優しくされっぱなしだよ、俺」
芦川は肩を落として派手に落ち込んだ
それを慰めるように狗飼は肩を叩く
「いいじゃん、いいじゃん。今こうやって出来そうな事からやってるんだから」
芦川はそれでも釈然としないようだった
「てか、よく他人のために戦おうと思うよね。オレはムリノスケ」
狗飼が漠然と聞いてくる。北条の言い分どおり、多少解せないところがあるようだ
「おーい、二人とも出来たから来てくれー」
校舎の方から陣川が呼んでいる。どうやら夕飯を作っていたようで、美味しそうな匂いが鼻をくすぐる
「ひゃっほう！　綺麗なお姉さんが作ってくれた晩御飯っー！」
狗飼は芦川の返事を待たず、跳ねるように立ち上がり陣川のほうへ駆けて行った
「どうして……か」
芦川は茨乃を助け、何故チームと戦うのか。その根底になった出

来事を思い出す
古い映画のようにセピア色に色あせた、古い思い出だ

１０年前、芦川は親戚の家に厄介になっていた
「ねぇ、一体誰が引き取るのよ、結局」
まだ幼い芦川の鼻に蒸したキャベツのような臭いが入り込んでくる
「けどもさ、この子でき婚の子だべ、うちで面倒見る義理もねーべ」
今度はタバコだ、タバコの臭いがする
「施設っていってもさぁ……今爆発で孤児いっぱいって話じゃない。何処も入れられないわよ」
今度は化粧品の臭いだ。キャベツおばさんにタバコおじさん、さらに極めつけは化粧おばさん
三者三様で面白い。だが話してる内容が非常に笑えない事はまだ社会に出た事のない芦川にでさえ分かった
「おいおい、俺のところは勘弁してくれ。息子が受験なんだ、そんな大事な時期にアイツらの子供なんかひきとれねぇよ」
「だったら私のところだって――」
「勝手なことばっか言うなや、俺さとこも――」
この個性豊かな臭いをかもし出す三人の男女は、誰が扶養者に正確に言うなら、ガス爆発災害で両親を失った芦川を誰が引き取るか、という話だった
かれこれ3時間、三人の言い合いは続いており、当事者の芦川は少々イラついていた
「外にいってきます」
小さく大人達に告げるが三人とも返事をせず、自分のところでは引き取れないと声を張り上げるばかりだった

芦川が外へ出ると、雨がポツリポツリと弱く降っていた
芦川は軒下でズボンのポケットから父親から貰った大事な音楽プレーヤーを取り出し、慣れない手つきで操作する

流れてくる曲名を見るが英語で書かれているため、どんな意味かはさっぱり分からない
ただ、それを歌っている人が「ディラン」という名前だという事を芦川は知っていた。父がよく「ディランは良い！　真も良く聞いとけ！」と『ディラン』の歌をよく聞かせてくれたため、彼の歌声を覚えてしまった
「……」
普通ドラマや映画ならここで父の面影を思い出して子が号泣、と感動を誘う場面なのだが芦川の目は涙どころか水滴すら出なかった
自分の身の回りに起きた事にリアリティが無さ過ぎて、どう反応したら良いのか分からないようにも見えた
だが、とても切なかった。爆発の後、周りの人に助けを求め誰も足を止めてくれなかった時と似ている感覚、ようは孤独感だ
自分だけが一人ぼっちな気分に芦川はなる

芦川が雨の降る知らない街の様子を見ていると、ビニール袋を持った『お兄さん』と『おじさん』の境目あたりの男性がヨタヨタとこちらへ歩いてきた
「よっとっと、うへぇ靴が濡れたぁ。てか遅れたぁ」
彼は一度芦川を見ると「よっ」と短く挨拶し、先程まで芦川が中にいた家に入っていく
芦川がその様子を怪訝に見てから数分後、家の中からは怒号と何かが割れる音が響く
しばらく音がやんだ後、緑色の缶ジュースを二本持った先程の『おじおにいさん』がヘラヘラと笑いながら家の中から出てきた
「ほっぺた、切れてるよ」
芦川が『おじおにいさん』の頬を指差す
「知ってる、ちょっと痛い。でも絆創膏はくれなかった」
彼は芦川の横に座り缶ジュースの方の一本を芦川へ差し出す
だが芦川はすぐには受け取らず、音楽プレーヤーが入っていた方

とは反対のポケットからクシャクシャのハンカチを取り出し、それを彼の腕に掛けてから缶ジュースを受け取る
「絆創膏じゃないですけど」
「ありがとな、ありがたく使わせてもらう」
彼がハンカチを頬に押し当てている間、芦川は缶ジュースの蓋を開け一口飲む
サッパリしていてどのジュースにも区分しがたい、そんな味の炭酸飲料だ
「マウンテン・デューっていうんだ、美味いだろ？　中にいるキャベツおばさんに『下品な味』って言われたけど」
「あ、やっぱりあの人キャベツの臭いしますよね」
芦川が言った後、しばらく沈黙の後
「「あっはっひっはイッヒあっははひっひっはっはっはっわっがっわあわ！！」」
二人は同時に笑い出した。中にいる大人たちが「うるせぇ！」と怒鳴るまでずっと笑っていた
「自己紹介が遅れた、君の親戚のおじさんだよろしく」
「苗字は？」
「スミス」
彼――スミスは大真面目な顔で答えた後、ハンカチを一度頬から離す。ハンカチには大きな赤い染みが出来ていた
「世間は冷たいな。いや、大人が冷たいんだな」
スミスは悲しそうにハンカチを握り締める
「今降ってる雨だって冷たいです」
「その下手な突っ込みは母親似だな」
スミスはどこか懐かしむような目で芦川を見た
「そうだなぁ、君のお母さんの親戚、だな俺は。ただ君のお父さんの親戚からも、お母さんの親戚からも憎まれてる」
「母は親戚の話、したがりませんでした。僕が原因だっていうのも知ってます」

芦川は母の教育のおかげか、それとも不躾な父反面教師のおかげか、非常に礼儀正しくスミスに対して受け答えを行う
「酷い話だ。なぜ俺たちばかり苛められなくちゃならない。なんで助けてもらえない」
スミスは片手で器用にマウンテン・デューの缶を開けると、まるでビールでも飲むかのようにゴクゴクと喉を鳴らしながら一気に飲み干した
「でも君は誰にも助けてもらえないのに、俺にハンカチを差し出した。俺を助けたわけだ」
「人に優しくするのは当たり前って、母が言ってました……」
「だけど、それを出来ない人のほうが圧倒的に多いんだ。悲しいな」
だがスミスの顔はまったく悲しそうではない
「ならせめて俺たちは人に優しくありたい、そう思う。そうしたいと思わないか」
スミスは立ち上がってマウンテン・デューの缶を思いっきり投げた、そしてタバコおじさんがここまで来るのに使っていた車に当たった
「俺は君を引き取ることにした。有効期限は君が住んでいた七石が復興するまで」
スミスは芦川を見ずに続ける
「君がその後も困っている人をパッっと助けられるような男なら、その後も飯代くらいは出してやるよ」
スミスはニッっと笑い「俺は負けないぞぉぉぉぉぉ！」と叫ぶ
その雄たけびはイヤホンを耳につけていた芦川の耳にもしっかり届いた

「芦川君、早く来てくれないかな！」
陣川の声で芦川は我に帰る。長い間ぼーっとしていたようで日は既に落ちていた
（手をさし伸ばせる人間……ね）

芦川はその後スミスの経営するボロ下宿で暮らした後、約束どおり七石しが復興した途端追い出された
今も連絡は取り合ってはいるが、ウェポンのことは伝えていない
「助けたいけど、力まだたりねぇんだよ……」
誰に言うでもなく、芦川は呟いて痛む体を立ち上がらせた
Ｔｏ　ｂｅ　ｎｅｘｔ　Ｔｒａｃｋ！！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8527s/

オンガクウェポン

2011年5月28日23時55分発行